
悪がままに ～23区編～

柳秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪がままに　　＼23区編＼

【Nコード】

N3860Y

【作者名】

柳秋

【あらすじ】

舞台は東京23区。各々の思惑と信念を貫く能力者達の、複雑に絡み合う人間模様を描いた物語。哀しみを胸に抱える“皆殺”の『翔』に、本当の幸せは訪れるのであろうか……。23区制覇という偉業を成し遂げ、最強伝説を背負う『一鉄』の不可解な行動の真相は……。歌舞伎町No.1ホスト“孤高の剣豪”『麗』に秘められた、過去とは……。無類の女好き“傭兵”『直人』が、戦い続けるその訳は……。戦闘の天才と評される『誠』が、追い求め続け、辿り着いたその先にあるものとは……。彼等は、総じて【五虎将】と

呼ばれている。その彼等を支える妖艶でパワフルな女性陣。そして、謎多き“パンダマン” “女帝” “国取り”の面々を筆頭に個性豊かな人物達。総勢23名。彼等に宿された運命の結末は……。

プロローグ

西の空が赤く染まり、鴉の鳴き声が聞こえている。

学生服を着こなし付き合い始めて半年を迎えた幼い2人は、いつものように小さな公園のベンチに座っていた。学校から程近いその公園には鮮やかな青紫色のアジサイが咲き乱れ、奥には無人のブランコとジャングルジムが寂しそうに夕日に照らされている。そんな景色を眺めながら、学校での出来事や友人の話など他愛も無い会話をしていると、不意に真剣な面持ちで優香は翔を見つめた。

「翔、大好きよ……」

あまりに唐突な出来事に翔は驚いた表情をしているが、その後に見せた優しい笑顔が何よりも好きだった。

「俺もだよ」

優香の目を見つめ真剣に答えた。顔は強張り引きつっている。苦手な笑顔を作ろうとしたらしい。そんな精一杯の姿を見た優香はそっとキスをした。そして、ベンチの背に寄りかかりながら薄暗い空を見上げている。翔はキスの余韻に浸りながら、優香を見つめていた。

「大人になった翔ってどんなだろ？」

「変わらない気が（んっ、これは……）」

何かが過ぎったのであろうか、翔は不思議な感覚に襲われていた。

「そうだよね。どんな事があっても変わらないでね……」

優香は足元に視線を落とし、寂しげな表情で話し続けている。翔は嫌な予感が脳裏を過ぎり、話を止めようと必死になった。

「ちょ、ちょっと待ってくれ!!」

「今日はもう帰るね……」

目の前にいるはずの優香が透けて見える。翔は何度も瞬きを繰り返して信じられない表情で見ていると、優香はゆっくりとベンチから立ち上がり無言のまま遠ざかっていく。

「くっ、ま、待って……行くな!!」

抱きついてでも止めようと試みるが、思うように体が動かない。遠ざかっていく背中から、聞こえるはずの無い声が心に響いてきた。

「もう……自分の……人生を……歩んで……」

突如、辺り一面が暗闇に包まれ優香の姿が吸い込まれていく様に見えた。翔は無我夢中になってもがき続けるが、何も変わらない。

「うおお……（我に眠りし……）くうっそお……動けっ!!」

ゆっくりと遠ざかっていく背中を、ただ見つめる事しか出来なかった。

「……さようなら」

「うわぁっ!!」

布団を抱きかかえたまま上半身だけを起こしていた。日の出前な

のか、静けさの漂う暗い部屋の中で一人茫然としている。ふと気がつく、大粒の涙が髪を濡らしていた。

第1話 噂 (Bar Change) (前書き)

この作品はフィクションであり、実在する人物名、地名、団体等など一切関係ありませんのでご了承ください。

第1話 噂 (Bar Change)

——練馬区…Bar Change——

儂い運命、散り際が最も美しいと評される桜の花びらがヒラヒラとヒラヒラと途絶える事無く大地に無常を知らせている。共に流れゆく優しい風が、心の何処かに潜んでいる哀しみを連れ去ってゆくようだ。

そんな季節、とある店に舞い込んできた知らせから、この物語は始まりを告げる。

人通りが激しい大通りから一步外れた雑居ビルの1階に、昌也は店を構えていた。態と覗けるようにしたガラス張りの入口からは、左手に8席のカウンター右手には4人掛けのテーブルが3つ置かれているのが見える。決して飲食店を営むには最適の場所とは言えない立地であるが、地道な営業活動と人当たりの良さで店は連日の賑わいを見せていた。

昌也は、面倒見が良く知識と優しさを兼ね備えた人物で、一時は他校にファンクラブができた事がある程、異性から人気があった。小学校3年生の時に翔が転校してきた頃からの大親友で、良き理解者である。そんな昌也も28歳を迎えていた。

日が沈み、常連客の姿がちらほらと見え始めている。昌也はカウンター越しに話をしていると、ポケットから携帯電話に呼ばれた。

「はい……」

キッチンに向かいながら何度も応答するが、相手は沈黙を続けて

いるだけだった。不審に思い誰からか確認しようと、携帯画面に目を向けようとした瞬間だった。

「誰だっ!!」

相手の言葉に一つ間を置き目を瞑った。聞き慣れた懐かしい声に、思わず頬が緩んでいる。

「お前から掛けてきて誰だとは何だ!! ……元気にしてんのか?」
「おーよ、久しぶりだな。今、羽田に着いた……」

電話の主は、親友の翔からだった。

「……はい!? お前帰って来たのか?」

「おう、そろそろ頃合かと思ってよ……」

「……バカ、長すぎだよ。10年だぞ10年」

「まあまあまあ、そーゆーなって。ところでお前は……今何してんだ?」

「2年前に開業したBARを……」

「うおっ……後で行くからよ。じゃあな……」

「お、おい……切りやがった。店の場所知らないくせに……」

相変わらずの身勝手さに目を細めながら参った表情を浮かべている。だが、久しぶりの再会に心は躍っていた。

——数時間後。

来店を告げる鈴の音が鳴り響き、いかにも悪そうな面構えをした4人組の男と1人の女が姿を現した。おそらく20歳を超えて間もない年頃だろうか、昌也は何気ない表情で見っていた。

「いらっしやいませ!!」

女性店員の径子は、その5人組に笑顔絶やさずカウンター席に案内をしている。男達は周囲を威嚇する様に歩いているせいか、常連客は一斉に目を逸らしていた。彼らは席に着くや否や、今日の出来事であろう話を始めた。

「翔さん、やっぱ強いっすねー」

一番端に座っている男が口火を切った。昌也はカウンター越しにグラスを磨きながら、聞き耳を立てている。

「あいつらの逃げっぷりは最高でしたよ」

「さすが、東京【五虎将】っすよね」

翔と呼ばれている男を持ち上げながら会話が進んでいく。煙草に火を点け、男も満更でもない表情をしていた。女は見惚れた様子で見つめている。おそらく、その翔と呼ばれている男の彼女なのだろう。

「でも、大丈夫なんすかね。やつら【侠狼会】だって言っていましたけど……」

「その名前を出せば俺たちがびびると思って言ったんだろ……それより、持って来たんだろな？」

「あっ、はい。どうも、ありがとうございました!!」

手渡された包みは明らかに大金だと見て取れた。男は手馴れた手つきで中身を確認し、不敵に微笑んでいる。

「まっ、何かあったら連絡くれよ」

「はい、よろしく願います!!」

3人は翔と呼ばれている男を囲むように席を離れ、頭を下げてお礼を言っている。それが終わるや否や、注文もせずにそそくさと帰ってしまった。その様子を見ていた径子や常連客は、啞然としている。

男は優越感からなのか女を意識してなのか、格好つけて珍しい名前のカクテルを注文した。しかし、それはノンアルコールカクテルだ。知ってて言っているのか、ただ知らないだけなのか。聞き間違いかと不安に駆られたバーテンダーが確認をしている。そんなやり取りを見ていた常連客がクスクスと笑い始めた。カウンターを挟んでの押し問答が、今にも始まりそうな雰囲気だった。

その様子を隣で見ている昌也は、話題を変えようと男に話しかけた。

「失礼ですが、お客さんってあの有名な『翔』さんですか？」

男は不機嫌な顔をしたまま、昌也に振り向いた。

「……だとしたら？」

「いやあゝあのですね、そろそろ帰られた方が……」

「な、何だと!？」

男は立ち上がり、物凄い形相で昌也を睨みつけた。

「あついやつ、そろそろ……」

相手の反応に慌てた昌也は、理由を伝えてなだめようとした時だった。濁った鈴の音が強く鳴り響いた。

第2話 噂　くつまんねーのく

——大田区・羽田空港——

——時は少し遡る。

羽田空港に到着した翔。

“皆殺”の異名を持ち、我侬で自分勝手、ついでに気分屋の野蛮人。そんな性格と数々の過去の悪行から完全に悪党としての噂が付きまとう男だが、その一方で立場の弱い者を保護するという奇特的な一面を持ち合わせている。しかしながら総評すると、悪名が先に立つような人物である。目を合わせた相手が一瞬たじろぐ程の目力を除けば、至って普通の外見であり、淡い水色のジーンパンをはき全体的にラフな格好を好む。

翔は、第2ターミナルのソファアに腰掛けて電話をしていた。

「……バカ、長すぎだよ。10年だぞ10年」

……ピーコン……ピーコン。耳元で何かが鳴っている。

「まあまあまあ、そーゆーなって。ところでお前は……今何してんだ？」

……ピーコン……ピーコン。その音は鳴り止まない。

「2年前に開業したBARを……」

「（んっ）うおっ……後で行くからよ。じゃあな……」

「お、おい……」

ピーーーーーー。

「切れた……」

充電が無くなったようだ。携帯片手に悲痛にも似た雄叫びを放つ。

混雑しているターミナル、周囲の人々は係わり合いを恐れ翔の居場所を避けて歩きはじめた。

「まっいいや……」

気を取り直して立ち上がった。これといった手荷物は無く、手ぶらのまま羽田空港国内線ターミナル駅へと歩きだした。

ターミナルの広大な景色を眺めながらしばらく歩いていると、政治家と思われる人物が記者団に囲まれている。好奇心旺盛な性格からか、テレビカメラに映ろうとわくわくしながら向かった。

「カメラだけかよ……つまんねーの」

あからさまに不機嫌な表情を浮かべている。テレビカメラが1台も無い事が気に入らなかったようだ。興味が無くなり駅に向かって歩き出した。

「……首相の参拝に対して……ありますか？」

無言のまま立ち去ろうとする政治家に、記者団から次々と質問が浴びせられている。必死で守る秘書の姿が痛ましい。

翔は品川駅に到着していた。山手線へ乗り換える為、構内を歩く。各方面への中継地点として役割を担うこの駅は、時間帯を問わず大勢の人々が行き交う。真っ直ぐに歩く事などままならない状態である。

人の波にのまれ歩いていると、突然、目の前が開けた。視覚障害者の男性が白杖を突いて歩いて来ていたからだ。翔も道を譲りすれ違う。

「すみません、ありがとうございます」

「んっ？」

男性の言葉に、一瞬だが妙な感覚に襲われた。振り返り、遠ざかっていく背中を見ていた。人の波は、立ち尽くす翔を避けるように流れている。男性の姿が視界から消え、山手線へ向かって歩き出し

た。

山手線の外回り、渋谷・池袋方面に乗り込んだ。車内はそれほど混雑していない。

「とりあえず池袋で乗り換えるか……」

路線の案内図を見上げている。すると扉を開ける大きな音が聞こえ振り向くと、隣の車両から大工らしき服装をした、大柄のおっさんが入ってきた。

「うつひゃつひゃ。ういゝ……」

誰の目から見てもベロベロに酔っ払っている様子が窺えた。周りの乗客は見ても見ぬふりをしている。何かやらかすんじゃないのかと期待の目線を送っている翔の居場所に差し掛かると、目が合った。しかし、おっさんは電車の揺れに流されるまま、フラフラと次の車両へ行ってしまった。

「ちっ……つまんねーの」

何事も無かった事が気に入らなかったのか、不貞腐れたまま席に座った。

電車は目黒駅に到着している。翔は中刷り広告などを眺め発車するのを待っていた。ベルが鳴り止み閉まるドアと同時に、コギヤル2人が飛び込んだ。

「ちよつとお!! 今のマジ際どくない?」

「もう超ーうける!! 挟まれるかと思ったじゃん」

ギリギリの動きに興奮したのか勝手に盛り上がっている。そのテンションの高さは異常だ。静寂に包まれている車内で迷惑そうな表情を浮かべている乗客。

「……（ちっ、挟まれればおもしろかったのに）」

そんな目線でじっと見ている翔に気づいたのか、2人は目の前の席に座った。ミニスカートを気にする様子もなく、足を開き座っている。当然、下着が丸見えだ。

「……（じっと見るのも変だし、見て見ぬふりも嫌やな）」
目が泳いでいる。2人はチラチラと翔を意識して笑い、ヒソヒソと話し始めた。

「……（うわっ、最悪！！）」
居ても立ってもいられず、隣の車両へと向かった。

第3話 噂 〱 修羅〱

——練馬区…某所——

翔は地元に着した。街灯が光り輝き、想いでと共に懐かしい景色を眺めていた。

「さすがに10年も離れると、景色が結構……変わってねぇ!!」

街の変化を覚悟していたのか、ホッとした表情を浮かべていた。感慨にふけりながら地元を見歩いている。

すると、母校の制服を着た不良達が屯していたので立ち止まった。彼等を見つめ中学時代の懐かしい想いでに浸っている。しばらく眺めていると、煙草を吸い始めたり、飲んだ空き缶を道路に投げ捨てたり、通行人に絡んだりとやりたい放題に振舞い始めた。

「かぁ……いつの時代もやる事は一緒だなあ」

呆れた顔で見ていると、通りすがりのお爺さんに不良達が絡み始めた。調子に乗った一人が杖を蹴飛ばし、倒れ込む姿を見て大はしやぎしている。

「ちっ、あのガキ共……」

不良達に向かって歩き出した。杖を拾いお爺さんを抱き起こす。

不良達はただ傍観していた。

「お爺ちゃん大丈夫？」

「これは、どうもすみませんねえ……」

お爺さんは杖を突き、ゆっくりと歩き出した。翔は不良達に背を向けたまま、その姿を見届けている。

「おい見ろよ、正義のヒーローが現れたぞ……きゃー、助けてヒーロー……!!」

背後から小馬鹿にした野次や空き缶を投げつけられている。よほど気に入らなかったのか挑発を繰り返し、大騒ぎしていた。

「あれ！！　もしかして翔かしら？」

通りすがりの女性は騒ぎに気づき集団を見ると、翔らしき姿を見つめ近づいて行った。

「見つけました……」

物陰から覗いている怪しい男も、騒ぎの渦中に翔の姿を発見し、何処かへ報告をしている。

終わる事の無い挑発を繰り返し大騒ぎしている不良達は、振り返った翔を見て言葉を失った。

「正義のヒーローの方がまだましだったかもな……」

殺気を放ち悪魔の形相で睨んでいる。不良達は蜘蛛の子を散らすように逃げ去って行った。

「……ったく。俺もあんなだったのかなあ」

「良く言うわよ。あんたに比べれば可愛いもんよ」

横から聞こえる女性の声に、驚いた表情で隣を見た。

「……弘美か？」

「生きてたんだねー。よかった……」

喜びのあまり人目も気にせず抱きついてきた。

「お、おい。離れろ……（皆が見てる、恥ずかしいだろ）」

大騒ぎしていたからか、翔の周りには軽い人ばかりができていた。

「はい、商店街の入口付近です。……このまま尾行します」

再び怪しい男は現状報告を何処かへしている。

「あのねえー。みんな心配してたんだよ……」

「はいはい。それより、昌也の店を教えて（いい加減離れろよ）」
「もうっ……えーとね、まー君のお店は……」

翔から離れ、昌也の店の場所を教えている。

「ありがと、じゃーな」

サバサバとお礼を言っ立ち去ろうとしている。

「ちょっと、まだ話が……」

「悪い、急いでんだ……また今度な」

手を振りながら逃げるように立ち去って行った。

翔は教えられた昌也の店へ向かわず、人通りの無い裏道へ進んだ。
人気の無い小さい広場に辿りつき、辺りを見回している。

「ふう、ここなら大丈夫だろ……誰だ？」

「……気づいていたんですね。流石です」

しばらくして薄暗い場所から怪しい男が姿を現した。明らかに暴力団関係者と思われる。

「ああ、お前か。……『重慶』は元気にしてるのか？」

「はい、とてもお元気ですよ」

男は微笑みながら答えるが、口は笑っていても目が笑っていない。

「……で、用件は？」

「証明して頂きたいんですね、彼らで……」

背後から見ると手に手強そうな6人の猛者が姿を現した。翔は振り返り、予想外だったのか苦笑いしている。

「証明ねえ……（うげっ、全く気づかなかった!!）」

「ご存知だとは思いますが、中継されておりますので……」

「いい加減その趣味やめたら……『重慶』聞こえてんだろ？」

「……では」

その声と同時に、襲い掛かってくる猛者達。瞬時に翔を取り囲み一斉攻撃を繰り出してきた。

「むっ……うお……ぐっ……ぐわぁ」

予想以上の強さに完全に後手後手になっている。そして、背後からの強烈な蹴りに包囲網の外へとふっ飛ばされた。倒れている翔を見下ろしながら不敵に笑っている猛者達。

「痛っ、こんなにやろう!!」

「大丈夫ですか、そのままだと危険ですよ……」

その光景を穏やかに眺めている男は、含みのある言葉を投げかけた。翔は立ち上がりその男を見た。

「しょうがねえなあ、希望を叶えてやるよ。（【潜在…修羅】）うおお……（我に眠りし修羅よ、今……目覚めよ）」

「修羅」 殺戮の悪魔。魔界の頂点に君臨する絶対的支配神。万物を滅亡へと導く。

「能力」 黒いオーラが全身を覆い殺気を解き放つ。見た目に変化は伴わないが、怒りに比例して超人化し爆発的な強さを得る。その反面、強さに起伏が激しく、持久力に不安を抱える。

悪魔の形相に黒いオーラが全身を覆っている。解き放たれる殺気に、猛者達は圧倒され後ずさりしている。

「……いくぞ」

——2分後。

無残な姿をした猛者達が地面に転がっていた。

「で、目的は？ ……って、もう居ねーし」

男に問いかけるが、いつの間にか姿を消していた。

「ふう……あーあ、返り血を浴びすぎたぜ」

服に付いた大量の血を眺めている。ふと腕時計に目をやると23

時を回っていた。急いで昌也の店へと向かった。

第4話 噂　く騙りの翔く

——練馬区…Bar　Change——

翔は店の前に到着し、勢いよくドアを開けた。濁った鈴の音が強く鳴り響いた。

「ああー疲れた……昌也はいるかあー？」

大声で叫ぶ姿に、店内の視線が一斉に注がれた。常連客と従業員は唖然としている。血だらけ男が来店してきたのだから当たり前だ。そんな事は御構い無しに店内を見渡すと、カウンター越しに男に詰め寄られている昌也を発見した。

「……（昌也だと？）」

男は名前に反応したのか、静かに席に座り煙草に火を点けた。

「おおっ、こっちだこっち……（なんでコイツは血だらけなんだ？）」

カウンター内から手を振り声を掛けた昌也は、あからさまに嫌な顔をしている。怪子は無言のまま翔を見ていた。

「あんにやろく……帰って早々に襲ってきやがって、何なんだ……」

昌也に歩み寄りながら、ぶつくさと独り言を口走っている。

「えっ、もしかして……【狭狼会】？」

「んっ？　何で解ったんだ……」

「こちらさんが詳しく教えてくれるかもよ」

めっきり大人しくなった男に目を向けた。翔は何の事やら分からないまま、カウンターに座っている男に声を掛け顔を覗き込んだ。

「……誰だあ？」

「あー！！　お前こそ誰だ？」

「何だと！！　……客らしいが、いいのか？」

いきなりの喧嘩腰に驚いている。そして、言い方が気に入らなかったのか苛々しながら昌也に尋ねた。

「【修羅】には絶対になるなよ!!」

「……（【修羅】!!）」

店の破壊を恐れた昌也は、目をギラつかせ念を押した。その言葉に反応したのか、男は驚愕した顔で目を見開いている。翔は再び覗き込んで睨みつけた瞬間だった。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。もしかして本物……ですか？」

「本物だと!？」

眉をひそめ首を傾げている。

「あっはっはっはっはっ」

昌也は腹を抱えて大笑いしている。

「なあゝに笑ってんだよ？」

「すまんすまん、実際に会おうのは俺も初めてでよ……。お前が消息を絶ってから偽者があちらこちらで出没してるって……」

「偽者!？ 消息を絶つ!？」

「ああ、お前が旅に出た事は誰にも言っていないからな。4年ぐらいしてからだったかな、死亡説が流れたのは……」

径子は無言のままそつと昌也を見つめた。

「（どおりで……）おいおい、勝手に人を殺すなよ……」

苦笑いをしている。男は無言のまま2人のやり取りを聞いていた。

「お前、『仁』には話したのか？」

「お前だけに決まってんだろ（何であいつに言わなきゃならんだ）」

「それじゃゝ偽者の出現もしようがないな」

「……そうなんですよ、昌也の兄貴!!」

「兄貴だぁとおゝ」

だんまりしていた男は意を決して話しに割り込んだ。

「大変申し訳御座いませんでした。私は三原台の修と言います」
申し訳なさそうに深々と頭を下げた。

「ほお君が……で、修君は何で翔を騙ったのかな？」

「はい、あの……【皆殺伝説】に憧れておりまして……。翔さんの死亡説を聞いてから、少しでも近づきたいと……」

真剣な眼差しで翔を見ている。昌也もまた、無言のまま翔を見ていた。

「……その話はどうでもいいが、今すぐ三原台に帰った方がいいぞ。お前が手を出したのは【侠狼会】が囲っているチンピラ達なんだよ」
「あっ、はい。こんな形だったとはいえ、お会い出来て嬉しかったです！」

修は報酬として受取った包みを残したまま、女を連れて店を飛び出して行った。

「お前を襲ってきたのは『重慶』の手の者だったのか？」

「うーん……だが、三原台にはおそらく本隊が動いただろうな」

「三原台ねえ」

昔を想い出していた。

「おい！！ それより傍に居るその可愛い店員は誰なんだ？」

径子は可愛いと言われ驚いた表情をしている。

「おお、紹介が遅れたな。俺の彼女だ」

「なっ、何いー！！」

驚きのあまり目を見開いた。

「あの、初めまして径子です」

おしとやかに微笑みながら挨拶をした。

「よ、よろしく……（羨ましい）」

引きつった表情で答えた。

23歳を迎えた径子は、昌也と付き合い始めて4年が経つ。幼い頃に両親を亡くし、高校卒業まで親戚の家にお世話になっていた。そんな境遇からなのか、礼儀正しくしつかりとした雰囲気が見て取れる。

「お前さあ、それより風呂貸してやるから入ってこいよ」

「……お、おお。さすがにこれじゃーお客来ないもんな」

家の鍵を受け取り店を後にした。

翔と修が居なくなった店内。常連客の慣れたいつもの空気が流れているが、どこかソワソワした雰囲気漂っていた。時刻も日をまたぎ、店内は少数の常連客が残っているだけだった。

昌也と径子はカウンター内で後片付けと明日の下準備を始めていた。

「まー君。翔さんって聞いてた噂と全然違うね」

「うーん、半分以上は当たってる気が……」

手を動かしながら苦笑いしている。

「でも、いい人そうだったよ」

「いい奴だよ。弱い立場の人には絶対に手を出さないし」

「え？ それって当たり前じゃ……」

呆れた顔で昌也を見た。

「あいつは当たり前って常識が無いんだよなあ」

「……噂の部分も本当にあるって事？」

昌也は頷きながら考えていた。

「上手く言えないんだけどさ、両足が不自由なんだろうな。杖を突かずに、なんとかその足で歩いている障害者の人って見た事ある？」

「うーん、両足を引きずるように歩いている人の事かな？」

「そうそう、俺達の中学にその障害を持った女の子がいてな……」

——15年前。

翔と昌也が、中学1年生の時である。
残暑も終わりを告げ、秋の到来を間近に控えた季節である。

昼休み、裏庭にあるいつものたまり場に翔の姿が見えない。昌也は教室に向かい話を聞くと、今日は欠席しているとの事だった。しようがなくなつたまり場へ戻ろうと廊下を歩いていると、翔の姿を発見し駆け寄った。

「お前……また喧嘩したのか？」

「喧嘩じゃねえ、袋叩きにされた……体中が痛え」

翔は顔に数箇所の子あざと鼻血を出していた。

「どうせあの公園に行つたんだろ……先輩達にも近寄るなつて言われただろ？」

「うるせえなあ……頭に響く」

当時、翔達の地域にある小さな公園は隣町の中学校に占領されていた。その生徒はほとんどが不良であり、3割近い卒業生が組員の道を選ぶという最悪の学校だった。

「で、理由はなんだつたんだ？」

「お前には関係ねえよ」

つれない返事をして、翔は立ち去つて行つた。

——数日後、心配した昌也はこっそりと翔を尾行した。やはりあの公園へ向かっている。公園付近に到着し、ふと目を離した隙に見失ってしまった。

「やばっ、あいつどこ行つたんだ？」

物陰からひっそりと公園を覗いてみると案の定、公園に面した道路には隣町の不良達が屯していた。

「6人か……今日は少ない方だな」

不良達を見ている視界の奥に障害者の女の子が姿を現し、こちらに向かって歩いている。

「まずいな、このままじゃ奴等の所を通るぞ」

不自由な両足で一生懸命に歩いている女の子は、不良達の前を通り過ぎた。

「ふう……絡まれなくて良かったぜ」

何事も無かった事に安堵の表情を浮かべている。手には沢山の汗が握られていた。

その時だった、不良の1人が女の子の真似をして他の連中を笑わせ始めた。女の子は気にする様子も無く一生懸命に前へ前へと歩き続けている。不良達の終わらない馬鹿騒ぎと笑い声に、昌也は段々と苛立ってきていた。

しばらくして、女の子が昌也の隠れている場所に差し掛かった時だった、遠くてよく見えなかったが襟元まで涙で濡れていた。声を押し殺し立ち止まる事無く歩き続け、悔し涙を流している。

昌也は物陰から飛び出して連中に向かって走り出した。

「調子に乗ってんじゃねーぞ!!」

突如、翔の叫び声が聞こえ、どこから現れたのか不良達の輪の中で暴れている。昌也が到着すると真似をしていた1人が倒れていた。翔は躊躇する事無く男の両足を押し折る。悲痛の叫び声が、周囲の人の目をこちらに向けた。

「おい、どうした、面白いんだろ？ 笑えよ……笑えっ!!」

押し折った足を更に踏みつけて大喝している。凄まじい迫力に圧倒され、他の連中は戦意を失い青ざめていた。

「おい、もうよせ。こいつらもこれで懲りるだろ」

優しく声を掛け帰ろうとした瞬間だった。次々と他の連中の両足を押し折っていく。

「……翔!!」

叫びも空しく、道路にはうごめきながらのた打ち回っている連中がいた。

「怖い……」

径子は青ざめた表情で昌也を見ていた。

「まあ、真似していた奴だけなら分かるが……全員はやりすぎだな」昌也は何故か笑っていた。

第5話 連続殺人事件 〱痴漢〱

――港区・東京タワー――

東京を代表する名所の1つとして、大勢の人々に愛され続けている東京タワー。

エレベーターガールとしての誇りを胸に日々働いている洋子は、31歳を迎えていた。大人びた雰囲気を漂わせ、肩を少し隠すように伸びているストレートの黒髪が、上品に着こなしている紅色の制服と良く合っている。異性に興味がなかった訳ではないが、一途になって仕事に打ち込んできた彼女から浮いた話を聞いたことがない。しかし、彼女目当てのリピーターを持つ程、ファンからは絶大な人気ぶりであった。

そんなある日の事、いつもの様に乗客の案内を終えた洋子はエレベーターに乗り込んだ。大勢の乗客で混雑したエレベーター内、第一展望台へと向かっている。間もなくして、背後から覆い隠すように迫ってくる大きな影に気がついた。

「……（触られている？）」

腰からお尻の辺りに手の感触がする。混雑による気のせいかと思いたかったが、徐々にその手はエスカレーターしていく。異変を感じ抵抗を試みるが、隅に追いやられていて動けない。男に覆い隠された洋子の姿は、大勢の乗客からは見えなかった。

「はあ……はあ……」

耳元で荒い息遣いが聞こえる。あまりの気持ち悪さに、洋子は下を向いた。無抵抗を確信したのか、男の手は内へ内へと進み始めた。「……んっ（ちよっ……と……）」

遮ろうと抵抗を始めた手など気にもせず、動き回る男の手。押し

殺した洋子の声は、乗客達の賑やかな声にかき消されていた。

「お待たせ致……しました。第一展……望台へ到着……致しました」
執拗に攻め続けてくる指先に耐えながら、力の無い声を振り絞った。両足が小刻みに震え立っているのがやっとの状態だった。第一展望台へと向かう大勢の乗客に紛れ、何事も無かったかのように男は姿を消した。

――数日後。

終電が姿を消した頃、薄暗く人通りの無い道を男は歩いていった。タクシー乗り場にも向かっているのだろう。ほろ酔い気分で歩いている男の前に、洋子が姿を現した。

「こんばんは。先日はどうも……」

「……（誰だ？）」

私服姿からなのか気がつかない様子で洋子を眺めていたが、ふと思いついたかの様に目を見開いて視線を逸らした。酔いも一瞬にして醒めた様子だ。

「女性の気持ちなんて解りませんよね？」

「……何の事かな？」

証拠がない事を盾にしらばくれている。しかし、疚しい気持ちからか洋子の目を見ることが出来ない。

「一緒に警察に行きましょう」

「な、何をさっきから自分勝手な事を……。人違いだよ人違い。それに、証拠でもあるのか？ 見せてみるよ!!」

逆ギレをして、その場から言い逃れようと必死になっている。そんな卑怯な男の姿を見て、洋子の目の色が変わった。

「自ら裁きを下すしかないようですね……」

「な、何をするってんだ!!」

洋子はゆっくりと宙へ舞い上がっていく。男は目を疑い、洋子の姿を目で追っていた。次の瞬間、男の首が胴から離れ地面に転がっていた。

第6話 連続殺人事件 〈共通点〉

——足立区…警察署——

国民の安全を守る。そんな正義に憧れて、司は警察官の道を選んだ。生真面目で一本気な彼は、身近な人達に始まり強いては国を守る。そんな使命感にも似た感情が彼を奮い立たせた。命がけで悪事を働く者達と向き合う日々。異例の速さで署長の座に昇進した彼も、43歳を迎えていた。

犯人の所在を突き止める任務を任されていた司は、署長室で資料と睨み合っていた。

「うーん……（『学』の所在をどうやって突き止めるのか……）」
ブツブツと言いながら考え込んでいると、ノックする音が聞こえた。

「失礼します。署長、ついに管轄内での被害者が出ました!!」

新たな事件の報告が舞い込んできたようだ。今月に入り、区内各所で発生している連続殺人事件の報告だった。司は関連資料を受取り内容を確認している。

「これで4件目の発生となります」

「犯行の手口は全で一緒……」

「はい、正面から刃物で真っ二つです」

コーヒー片手に、しばらく考え込んでいた。

「……おそらく『一鉄』が引き起こした【大暴走】以来の大事件ですよ」

興奮気味の部下を他所に、司は冷静に考えていた。

「他の3件に携わった関係者からの情報は？」

「奇怪な事だらけで、どの現場も犯人の目星すらつけれておりません。しかし、被害者の共通点はある程度確認されています」

「共通点？」

「はい、男性と東京タワー」

「……東京タワーだと？」

腕組みをして眉をひそめた。

「はい、被害に遭う数日前に全員が東京タワーに立ち寄っています」

「防犯カメラに映っていた……か」

再び資料に目を通し考え込んでいる。

「現場には血痕が全く見当たりませんし、奇妙すぎます。巷では、呪いだの祟りだのと無茶苦茶な状態です」

「わかった、ご苦勞様。捜査を続けてくれ……（今回も相談するしかないか）」

部下の退室を見届け、司は携帯を手を取った。

第7話 連続殺人事件 ～ニュース～

——練馬区…Bar Change——

昼下がり、偶然にも翔はBar Changeの前を通りかかっていた。シャッターが開いているのを不自然に思い勝手に中へ入ると、準備に追われている昌也と径子を見つけた。

「あれ、何で店にいの？ デートじゃなかったのか？」

「お前、ニュース見てないの……」

昌也は忙しい手を止め、呆れた顔で翔を見ている。

「……俺がそんなもの見ねー事ぐらい知ってんだろ」
口を尖らせ息巻いている。

「連続殺人事件の被害者全員が立ち寄ってるんだとよ」
「……で？」

「径子が怖いからやめようって」

「まー君、ごめんね……」

「気にするな。嫌なのに行っても楽しくないしな」
シュンとした表情の径子を昌也は慰めていた。

「ふん」

よく理解出来ていない様子である。

——江戸川区…某所——

12歳にして学者顔負けの知識と知恵、千里眼を潜ませる少年・涼。戦略的な書物を読み漁り、戦術や罠の実践改良などもこなす、ちよっと危ない小学生。しかし、まだ甘いものが好きだった。

昼下がり、リビングの食卓でチョコレートを食べている。母親はソファに座りテレビを見ていた。ついている番組はもちろんワイドショーだ。

「ニュースをお伝えします。昨夜未明、連続殺人事件の被害者と思われる……」

「物騒な世の中ねえ」

「警視庁の発表によりますと、犯行の手口などから同一人物との……」

「……（そろそろかな）」

「東京タワーで、何らかのトラブルが原因と……」

「残念だったねー、せっかくの遠足だったのに……」

「しょうがないよ、それに僕だけじゃないしね」

……ジリリリリ……ジリリリリ。

電話が鳴っている。思い腰を上げ、母親は電話に向かって歩き出した。

「はい……あら、どーもいつもお世話になっております。お待ち下さい……」

涼を見て手招きしている。

「こんにちは。……はい、わかりました」

電話を切るや否や、リュックサック片手に出かける準備を始めた。

「もしかして、今回の事件？」

「うん、そうみたい」

「気をつけるんだよ」

「はい」

母の温かい抱擁を受け、涼は出発した。

第8話 連続殺人事件 ㄱ推理ㄱ

——足立区…警察署——

警察署に到着し受付に顔を出した涼は、すぐさま署長室へと案内された。ここを訪問するのはもう何回目になるのだろうか。ほぼ顔パス状態である。

「おっ、涼君わざわざすまないね」

司は首を長くして待っていたのか、涼の顔を見るなり喜んでいる。涼は簡単に挨拶を済ませ、案内されたソファーに腰掛けた。

「すでに知っているとは思うけど、これを見てくれ……」

涼は手渡された資料に目を通してしている。その姿を見ている司は、毎度思うところがある。目では資料を見ているが、実際のところその奥に潜む遠くを見ている感じがしていた。

「（【潜在…アテナー】）……不思議な事件ですね」

ㄱアテナーㄱ ギリシア神話に登場する戦争の知略を司る都市の守護神。知恵・工芸・学芸の神でもある。

ㄱ能力ㄱ 千里眼を開花させる。更に、知略を用い独自の罠を改良して相手を陥れる。

「そうなんだよ。正直お手上げだ……」

司は飲み物の手配をして、頭を抱えている。

「……人の仕業ではないかもしれませんよ。不思議な力を持っている者達がいることは……」

「ああ、理解しているつもりだ」

「その線で事件を紐解くと辻褄が合ってきます」

「んっ、もう犯人を確信している言い方だね」

司は何とも言えない表情で訪ねた。

「はい、ある程度までは……」

「聞かせてもらえるかな？」

涼は差し出された飲み物を頂き、一息ついてから話し始めた。

「まず、正面からの切断なのに全員が無防備という点です。普通、正面から刃物が迫ってきたら反射的に先に手が出るはずだと思います。」

「……物凄い速さで突進してきたと考えたら？」

「どんなに速くても人の速度なら顎を引くなり身を縮込ませる方が速いと思います。なのに全員の首が無防備な状態になっていた……」
司は話を聞きながら、顎を引く素振などをして被害状況の確認をしている。

しばらくその仕草を繰り返していた司は、閃いたのか目を見開いて涼を見た。

「……上を向いていた？」

「はい、おそらく何かを見上げていたんだと思います」

「うーん。しかし、犯人が上に何かを投げて見上げた瞬間について事も……」

「はい、それは否定できませんが、問題は血です」

「血痕どころか血の一滴も現場には無かった……」

司に限らず、事件を担当した同僚達が一番頭を抱えた部分であった。

「血を一滴も流させずに相手を斬る……」

「……【妖怪・鎌鼬】？ ……ってまさか」

「はい、僕はそうだと思います」

「……………」

「それを操っている人が……」

「んー、確かに辻褄は合うが……動機は？」

司は話を遮り、納得のいかない表情を浮かべている。

「本人に聞くしかないですね。この人達から事情聴取して下さい」

「……エレベーターガール？」

涼の指差す資料の場所を見て、司の脳は錯乱した。その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「失礼します。署長、お電話が……」

警視庁のお偉いさんからとの事で、2人は話を止めて涼は帰宅した。

——その夜。

司は呼び出された銀座高級クラブ・リジュームにいた。お偉いさんをホステス達が囲い、隣には絶世の美女と言われているクラブのNo. 1が接待している。

「今回の事件だが、君に一任されたと聞いているが……」

「はい。管轄内で被害者が出ましたので……」

「あの大事件の主犯を捕らえた君だ。大いに期待しているぞ!!」

「……ありがとうございます」

「どうぞ……」

No. 1から差し出されたお酒を受け取り、一気に飲み干した。

——数日後。

任意の事情聴取が行われ、数名のエレベーターガールが警察署を訪れていた。部下に案内された一同は応接室に通され、椅子に腰掛けた。

「皆さん、大変お忙しい所、ご協力頂きありがとうございます。今月に入ってから何か身の回りで変わったことなどはありましたか？」
司の質問に多少ざわつきながら答える一同。

「私は特に……何もなかったと思います」

「はい、私も」

「あの……痴漢に遭いました」

勇気を振り絞り1人が答えた。

「失礼ですが、犯人の顔などは……」

「仕事柄、振り向く事ありませんので……」

「そうですか……」

「あの、痴漢って立派な犯罪ですよね？」

突然、横から食って掛かるような口調で質問された。

「はい、もちろんです」

「もう少し警察の方々もそっちを厳しく……」

不満気な表情をしている。

「そうだね。いい迷惑だわ」

同調する彼女達。警察に対する不満が部屋に充満していた。司は取締る立場から申し訳ない表情を浮かべている。

「それでは皆さん、貴重なお時間を頂き、ありがとうございました」

司はお礼を述べ、急ぎ足でモニタールームへと移動した。そこでは、涼が一部始終を視聴していた。

「涼君、どうだった？」

「判りました……4人目の女性です」

「理由は？」

「本人が教えてくれますよ……」

涼は何か考えがありそうな表情を浮かべていた。

第9話 連続殺人事件 〽実証〽

――江戸川区…某所――

夕暮れ時、帰宅途中の涼は人通りのない道を歩いていた。しばらく歩いていると、背後から近づいて来る足音に振り向いた。

「ボーヤ……凄いいじゃない、まだ小学生なんですって……。帰りに渡された紙を見て驚いたわよ」

足音の正体は洋子だった。不敵な笑みを浮かべている。

「ごめんなさい……殺さないで下さい」

全身を震わせ、命乞いをしている。

「ごめんね………怨まないでよ（【操術…鎌鼬】）」

〽鎌鼬〽 鎌のような両手の爪を持つ妖怪。三位一体の姿で現れ、一匹目が人を倒し、二匹目が刃物で切り、三匹目が葉をつけていくため出血・痛みがない。

Ⅱ能力Ⅱ 鎌鼬を召喚して斬撃を繰り出す。自らも旋風に乗って浮遊する事が出来き、主に空中からの遠隔攻撃が得意。

洋子はゆっくりと宙へ舞い上がっていく。それを見た涼は瞬時にしゃがみ込んだ。頭上を凄まじい風が通り抜けていくのを感じた。その姿に、洋子は目を見開き驚いた表情を浮かべている。

「ねっ、やっぱり操っていたでしょ？」

誰かに話しかけている。すると物陰に隠れていた司が姿を現した。「ふう、心臓が止まるかと思ったぞ。自ら囹になるなんて言うから

……」

何事も無かったことに安堵の表情を浮かべている。

「……嵌めたわね!!」

洋子は怒り心頭の表情で見下ろしている2人を睨んだ。

「奇怪すぎて、実証するしかなかったんですよ」

「ばっちり撮れてるぜ……おとなしく自首するか？」

司は手に持っているビデオカメラを見せた。

「あんまり図に乗らないでよね……」

突如、鎌鼬が洋子を囲むようにして姿を現わした。

「げっ、3体もいるぞ!!」

「違いますよ、三位一体なんです」

「……………」

「屍が1つ増えるだけ……何も変わらないわ!!」

叫び声と同時に上空から鎌鼬が襲い掛かってくる。

「涼君、ちょっと離れていなさい」

涼を遠ざけ、立ち向かう司に鎌鼬が襲い掛かる。

「うわっ……おっ……」

三位一体の鋭い斬撃をкаろうじて避けている。

「ふふ、死になさい……」

空中から見下ろしながら笑っている。

「いつまでもやられっぱなしだと思ふなよ……」

司は右手を拳銃のようにして構え、狙いを定めた。

「（【体技…空砲】）喰らえ!!」

|| 能力 || 溜め込んだ気合を形にして放出する。ただし、両手からしか放出する事が出来ない欠点を抱える。

浮遊している洋子に空気の銃弾が向かっていく。だが、撃ち込んだ銃弾のほとんどを鎌鼬に弾かれた。

「……（他にも誰がいる!?!）」

涼は何かの気配を感じ、辺りを見回している。

「……………あっらあ」

司はほとんどの銃弾を弾かれ参った表情を浮かべている。

「あんたも変な力を持っているようね？」

「俺達だけじゃないと思うがな……」

睨み合いながら対峙している2人。

「司さん、他にも誰かいます!!」

その叫び声と共に気配が消えた事を、涼は悟った。

「えっ!? 何だって？」

司は涼を振り返った。その一瞬の隙を突き、洋子は飛び去ろうと
していた。

「あっ!! 逃がすか……」

口ではそう言っただけに見たものの、為す術もなくあっさりと取り逃が
してしまった。

「取り逃がしちゃいましたね……」

涼は司の背中を見ながら苦笑いしている。

「……面目ない（だって俺は飛べないし……）」

司は口を開けたまま肩を落としていた。

「……（しかし、あの気配は一体何だったんだろう?）」

翌日、司は事件の決定的証拠として犯行手口を撮影した映像を提出したが、世間的・科学的に理解されず、洋子の指名手配は証拠不十分で終わった。

第10話 謎（音郷道場）

——文京区・音郷道場——

全国にその名を轟かす空手の名門・音郷道場。

門下生の熱く激しい稽古が続いている。そんな最中、学校から帰宅した香織は颯爽と道着に着替え姿を現した。明るい性格の典型的なおてんば娘で猪突猛進な行動が多々あるが、2代目師範の娘としてだけでなく門下生の憧れの的だった。門下生の視線を集め準備運動をしている香織に初代師範が気配を消すように近づいている。

「きゃー！！ もうっ、お爺ちゃんったら……胸を触らないでよね！！」

「ひえっひえっひえっ。脇がまだまだ甘いんじゃないよ……お尻は気づかんかったのか？」

両胸を包み込むように押さえている香織に、爺はニタついた顔で逃げるように奥の部屋へと消えて行った。毎度の事ながら、そんな刺激的な光景を目の当たりにした門下生は、稽古に集中できずにざわついている。

「やはり老師は只者じゃないぞ！！」

「そりゃそうだろ。なんてったって……」

「大抵の奴なら、胸に届く前に指か手首を折られているはず……」

「ああ、いくら香織ちゃんが油断しているとはいえ……って、そっちかよー！！」

「こらっ！！ 無駄口を叩いてないで、稽古に集中しろ！！」

2代目師範は門下生に活を入れた。再び稽古に熱が入る。その姿に満足している師範は、ふくれっ面の香織の元へ歩み寄った。

「まったくもお爺ちゃんったら、皆の前で……」

「香織、『誠』君は休みか？」

「うん、テスト期間中なんだって……」

「そうか、大学生も大変だな……」

「あつ、そうだお父さん。この前『涼』君がね……」

「（小さな声で）こらこら、ここでは師範と呼びなさい」

「はーい」

「ん？ 香織のテストはいつからだ？」

「高校生は来月からよ」

「そうかぁ……来月……うーん」

師範は指導そっちの気で、何やらブツブツ言いながら考え込んでいる。

「こらっ！！ 娘に構ってないで、指導に集中しろ！！」

香織は師範に活を入れた。

第11話 謎（未確認生物）

——文京区・東京大学——

夏休みに入り、香織は誠の運転で1泊2日の旅行先へと向かっていった。晴れ晴れとした空の下、レンタカーは東京大学付近の大通りを走行している。

「教授、あの未確認生物はこの辺に逃げ込んだと思うんですが？」

「ふむ、まだ遠くへは行っていないはずだ。手分けして探そう……」
なにやら生物学部の教授と生徒達が校舎周辺を搜索している。

「あいつらいつも追いかけてくるな。麻酔銃なんてアブねーもん持ってるし、ここは逃げるしかない……」

その未確認生物は逃走中であつた。物陰に身を潜ませ、大通りを渡るタイミングを計っていた。

「いたぞ！！ こっちだ！！」

生徒の叫び声が近くで聞こえた。慌てた未確認生物は大通りへ飛び出して行った。

その頃、香織と誠は宿泊先のイベント話で盛り上がっていた。

「他県からわざわざ見に来る程、花火が有名らしくてさ……」

誠はチラチラ香織を見ながら運転している。笑顔で話を聞きながら前を見た香織は、何かが横断しているのが目に入った。

「ちょ、ちょっとまこっちゃん！！ 前見て前！！」

誠が前方を見ると、そこには獣か人か見分けがつかない何かがあった。とっさにブレーキを踏んだ。周囲にブレーキ音が鳴り響く。跳ねた感覚は無かった。どうやらその何かは轢かれずに逃げていったようだ。安堵の表情を浮かべている2人。

「何だったの？ 熊っぽく見えたけど……」

「危なかった、轢かなくて良かった」

「もう、ちゃんと前見て運転してよね!!」

「ごめん。これからは気をつけるよ」

気を取り直し、2人は旅行先へと車を走らせた。

現場を目撃していた生徒達は啞然としていた。数名は腰を抜き、青ざめている。

「……教授、あの生き物……もの凄い動きをしましたね」

「まさに珍獣だ……捕獲したら生物学界を揺るがす発見になるかもしれない!!」

教授の目の輝きとは裏腹に、生徒達は未確認生物への恐怖に襲われていた。

第12話 謎（吾駒運送）

——石橋山古戦場——

頼朝拳兵の地として知られている石橋山古戦場。高速を降りた車は海岸沿いを走行していた。晴れ渡る空、目の前には広大な海が広がっている。

「わぁー……綺麗な海」

「まだ1時間近くかかるな。ちよつと休憩する？」

「そうだね。海を見たいわ」

車を近くの路肩に停め、2人は心地よい潮風に吹かれ景色を眺めていた。打ちつける波の音が心を癒していく。

「……今回の旅行だけど。師範は怒ってなかった？」

「ううん、むしろ喜んでたよ。お爺ちゃんは寂しそうだったけど……」

誠はその言葉に若干の笑みを浮かべているが、少なからず抵抗を感じていた。いくら親公認の恋人同士とはいえ、香織はまだ高校生である。

「私はね……まこっちゃんとうしていられるだけで幸せ」

誠を見つめ、恥ずかしそうに照れた表情を浮かべている。誠は微笑みながら優しく抱き寄せた。2人の顔がゆっくりと近づいていく。

「お母さーん！！ お父さーん！！」

遮るように、少女の叫び声が遠くから聞こえた。2人は声のする方へ駆け出し山間の道を曲がると、そこには地元の人達と思われる人だかりが出来ていた。

「まこっちゃん、上見て！！」

香織が指差した崖の上から事故車両が顔を出している。今にも落下しそうだ。姿こそ見えないが、その車両から少女の叫び声が聞こ

える。

「すいません。崖の上に行く道はどこにありますか？」

見渡す限りそれと思われる道がなく、誠は地元の人に尋ねた。

「あそこに行くには、ずっと先の道を迂回するしかねえよ」

「それじゃー間に合わない……」

誠は登れそうな場所を見つけて、急いで崖を登り始めた。

「あーどうしよう。何もしてあげられない……」

香織は落ち着かない様子で事故車両を見上げている。その間にも、ジリジリと車両は傾き始めていた。

誠はなんとか崖の上に到達し事故車両へ走り出した。しかし、まだ100m以上の距離がある。全力で走る誠の視界に、対向車線から1台のトラックが現場近くで停車するのが見えた。

「まこっちゃん、急いで!!」

崖を登りきった姿を見届けた香織は、大声で叫んだ。事故車両は限界を超え、ゆっくりと落下し始める。

「くっ……（間に合わない!!）」

走る誠の耳に、崖下から大勢の悲鳴が聞こえた。

「きゃあ!! ……えっ？」

崖下にいる香織達からは、落下した事故車両が宙に浮いている様に見えていた。ざわつき騒ぎ始める人ばかり。

現場に到着した誠は目を疑った。トラックの運転手が、煌々と輝いている右腕一本で車両のテール部分を掴んでいる。そして、ゆっくりと引き上げ始めた。誠はその姿を見て、無言のまま立ち尽くしている。引き上げた車のドアを開け、トラックの運転手は少女を抱きかかえた。

「もう大丈夫だ。怖かったな……」

「……お父さん、お母さんは？」

全身を震わせている少女は声を振り絞った。落ち着かせた少女を誠に預け、車両に向かって歩き出した。中を覗き込み両親の様子を窺っている。そして、再び誠の前へと歩み寄った。

「気を失っているが、大丈夫だよ」

「ありがとう……」

精一杯の声でお礼を言った少女は、誠の腕に抱かれたまま大声で泣き出した。

「後は頼んだぞ、青年……」

誠の後事を託し、トラックへと歩き出した。

「すみません……あの、お名前は？」

誠の問いに振り向きもせずに無言のままトラックへ乗り込んでしまった。走り去るトラックに書かれている会社名を見ていた。

「……（吾駒運送？）」

「まこっちゃん、大丈夫？」

香織が崖下から叫んでいる。報告がてら顔を出しに行こうとした時だった。目の前に両親が現れ、誠は抱きかかえていた少女をおろした。どうやら意識が回復したようだ。特に2人には外傷は見られなかった。

「この度は、本当にありがとうございました」

「あつ、いえ、あのですね……」

誠は目の前で起きた衝撃的な事実をありのまま伝えた。両親はにわかには信じられない表情を浮かべている。すると母親の腰に抱きつきながら少女が口を開いた。

「そうだよお父さん。大きなおじさんが助けてくれたんだよ」

父親は娘の顔を見ている。再び崖下から香織の声が聞こえた。

「まこっちゃんってばっ!!」

誠は思い出したかのように走り出し崖下を覗いた。香織達に無事を伝え、再び両親の元へ向かった。そして、トラックに書かれていた吾駒運送の事を知らせると、父親は連絡してみると告げ、頭を下げてお礼を言った。

誠は親子に挨拶を済ませ、崖を下りた。香織を呼び寄せ車へ向かって歩き出す。しばらくすると、パトカーと救急車のサイレンが聞

こえてきた。

2人は車に乗り込み旅行先へ向かう。

「あの家族、無事で本当によかったね。でもさあ……あの時、何があったの？ とても不自然だった……」

どこか浮かばない表情で運転をしている誠は、見たままを話した。

「えー嘘！！ 私達からはトラックもおじさんも見えなかったよ……気になるの？」

「（あっ！！）……ごめん。2人の時間を大切にしよう」

横顔からでも分かる優しい笑顔に、香織は嬉しそうにキスをした。

後日、誠は様々な方法で吾駒運送を探したが、存在していなかった。

第13話 五虎将 ㇿ出会いㇿ

――北区…華艶――

翔は昌也の所用に付き合い北区を訪れていた。用件を済ませた2人は122号線沿いを歩いている。太陽は真上に顔を出していた。

「おい、あいつの話長すぎだぞ……」

「悪い悪い、あーゆー人なんだよ」

Bar Changeの開業を手助けしてくれた恩人に会いに行っていたようだ。

「あぁーそれより腹減った。ここはどこだ？」

「北区だなこの辺は……じゃー適当に入るか」

大通り沿いに見えた小さな中華料理店へ、2人は向かった。

「いらっしやいませ!!」

翔は暖簾を潜って立ち尽くしている。店内を忙しそうに走り回る中国人女性に目を奪われていたからだ。

「おい……何してんだよ。早く行けって」

昌也にせっつかれ、空いているカウンター席に2人は腰掛けた。注文を終えて間もなく、昌也は翔の変化に気がついた。

「お前、もしかして……」

「……な、何だよ」

横目で翔を見る昌也。翔は何も言われていないのに顔を赤らめていた。

「……（分かりやすいなコイツ）」

「こ、この店のおく名前……何だったっけ？」

目が泳いでいる。翔は白白しく話題を変えようとしていた。

「暖簾には華艶って書いてあったぞ」

「……そ、そうだよな。書いてあったあった」

「……（コイツまた来る気だな）」

そんな会話をしていると、厨房の奥から声が聞こえた。

「凜、運んでくれ……」

20歳を迎えた凜。天然ぼけが多少見受けられるが、礼儀正しく争いごとが嫌い。常にチャイナドレスを身に纏い、中華民族である事を誇りに思っている。

「！！（あの子、凜ってゆー名前かあ）」

「……（決まりだな）」

翔は凜をじっと見つめ、落ち着かない様子だ。間もなくして、2人の注文が運ばれてきた。

「おまちどうさま」

「……に、ニーハオ！！」

翔はとりあえず笑顔で話しかけた。

「何言ってるんだ？ おい、見すぎだ、お前見すぎ……」

凜は笑顔を残し、また厨房へ戻っていった。

「まーさーやー。どうしたらいい、どうしたらいいんだ？」

「お、おい、落ち着け。腹が減っては……だ、とりあえず食うぞ！！」

ゆっくりと食べ始める昌也、隣からガチャガチャと音がうるさい。翔が勢いだけで食べている。食事を終えた2人は、一息ついた。

「まあ、言いたいことは分かるが、とりあえず今日の所は様子を見よう」

「……（さっきの笑顔可愛いかったなあ）」

「聞いてんのか。じっくりゆっくり時間をかけてだな、徐々に慣れていこう」

「わ、わかった」

「……（もうあれから何年経つんだ……複雑だな）」

昌也は遠くを眺めながら物思いにふけていた。翔はソワソワしながら凜を見続けている。

「出前に行ってきたーす!!」

ふと店内を見渡すと数名の客しか残っていなかった。

「……（ああ、いってらっしゃーい）」

もう、翔の目には凜しか映っていなかった。

第14話 五虎将 〔約束〕

――文京区…音郷道場――

凜は音郷道場へ到着した。バイクを停め、インターフォンを押す。

「こんにちわー、華艶です」

「はい。今行きまーす」

インターフォンから香織が答えた。道場の奥からバタバタと足音が近づいて来る。

「凜さん、こんにちは。遠いのにもいつもごめんね」

「大丈夫だよ。いつもありがとう」

月に数回だが、出前をしている内に自然と2人は仲良くなっていた。

「みんな大好きなんだよね。華艶の炒飯」

「ありがとう。老師は元気ですか？」

初めての出前で訪れた時に、凜は爺に胸を触られた過去があった。

「うん。今日は留守だけど。…あつ、そうだ」

今度の休みの日にでも、渋谷へ買い物に行こうと誘っている。

「うん。連絡ちょうだい」

凜は笑顔で手を振り、道場を後にした。

第15話 五虎将 友情

——北区・華艶——

その頃、翔は昌也から興味の無い話を聞かされていた。

「だ・か・ら……その【五虎将】ってなんだよ？ ……（凜ちゃん早く戻ってこないかなあ）」

「あーそっか、お前長いこと居なかったもんな……」

翔は入口を見つめ、昌也の話を上の空で聞いている。

「いつごろだったかな、東京で最強は誰だ……みたいな話が出始めてさ……」

「なんだそれ……どーでもいいわ（次はいつ来ようかな……）」

突然、翔の目が輝いた。

「ただいまー！！」

「！！（あっ、おかえり）」

凜が出前から帰って来たようだ。獣のようにその姿を目で追っている。

「おい……で、墨田区の『一鉄』しかないだろうって始まって……」
翔は昌也に後頭部を見せている。

「23区を制覇した男だ。知ってるだろ？ 後にも先にもこの偉業を成し遂げた者はいない」

「18年も前の話だろ。……実在するのかね？ ……（凜ちゃん可愛いなあ）」

「……いるだろ、バカ！！」

「次は？ （俺だろ）」

「新宿区の“孤高の剣豪”『麗』。歌舞伎町No.1ホストだ」

「知らん……（凜ちゃんこっち向いてくれないかなあ）」

「裏の世界じゃー知らない奴はいないってよ」

「次？（そろそろ俺か）」

「ご存知『直人』！！ あいつ今“傭兵”って呼ばれてんだぜ」

「何っ！！ あいつ……（直人がランクインしてるなら次こそ俺だろ）」

「そして……中野区の『誠』」

「……ぐえっ（俺じゃないのかよ）」

「んっ、どうした……すげー良い奴らしいんだが……
「が？」

「一度戦闘になると全てに対応してくる天才なんだとよ」

「……（あつ凜ちゃん笑ってる）」

「おそらく現時点では最強じゃねーかって……」

「（はっ、そうだ俺は死亡説が流れてたんだっけ）……ブツブツ。
（だから候補にならないのか。そーだ、そーに違いない）……ブツ
ブツ」

「何ブツブツ言ってたよ。最後の一人は……」

「もういいや、興味ねえー（凜ちゃん見ていたいし）」

「はっ？」

「どーせつままない奴だろ」

「……ある意味当たってる。……お前だ」

「だろー【五虎将】なんてつままない奴ばっか……って、ええ！？」

「俺はいつでもお前が最強だと信じている」

「お、お……兄弟よ。死ぬときは一緒だよな？」

「……嫌、それは遠慮しとく」

「うおおい！！ この涙どうしてくれるんじゃい」

「おい、その兄ちゃんうるせーぞ!!」

翔の騒ぎ声を他の客が叱りつけた。

「何だと?」

「アイヤー、喧嘩はやめて!!」

「御意っ!!」

「うるっさい……武士かお前は……（大田区あの男は……まあいいか）」

第16話 治安部隊ヒーロー 杉並区の英雄

——練馬区…Bar Change——

翔はカウンター越しに昌也と会話をしていた。

「お前、戻ってからしばらく経つけど『仁』には連絡したのか？」

「なんでイチイチ連絡するんだよ」

「お前が居ない間、結構大変だったらしいぞ」

「なんだそれ？」

「杉並区の安全神話が崩れそうになったんだとよ」

「それって勝手にあいつが言ってるだけだろ？」

「そうでもないらしいぞ。実際、犯罪件数が最小の区になったみたいだし」

「ほおーそれは3本槍の功績なのか？」

「どうだろうなあ。今じゃ13番まで部隊があるらしいし」

3本槍とは、仁が代表を務める治安部隊組織の旗揚げ時より付き従う1・2・3番隊の隊長達の事である。

「……でも、警察には煙たがられてんだろ？」

「あいつら戦闘までこなすからな……でも、区民の人気は絶大らしいぜ」

「それで増えたのか……しょうがねえなあ、今度顔でも見に行くか……」

第17話 治安部隊ヒート 〽無双〽

――杉並区・善福寺公園――

――数年前に遡る。

治安部隊ヒートの事務所に、2番隊隊長の溝口が駆け込んできた。
「仁、吉祥寺の奴ら久々に善福寺公園を狙ってきたぞ!!」

治安部隊ヒート代表の仁、現在29歳。“神速の蹴り”の異名を持ち、堅実で手堅く、良識があり仲間を大切にする人物。ある時、警察には出来る事と出来ない事があるのを悟り、旧知の仲間達と治安部隊を結成する。その後、この組織は……。

「最近やっとおとなしくなったと思っていたのにな……」

「ああ、とりあえず3・7・8番隊を向かわせている」

「わかった」

吉祥寺の連中が度々、杉並区の領土を狙っていた。特にこれと言った人物はなく、数任せの相手にそれほど警戒をしていなかった。いつものように、鎮圧の報告を待っていると、9番隊隊長の三浦が駆け込んできた。

「仁さん、大変です!! 3部隊が壊滅状態との連絡が……」

「何だと!? 仁、全部隊に召集をかけるか?」

「まだだ、他の地区の情勢も気になる。……とりあえず向かうぞ」
仁達は急ぎ現場に向かった。

しばらくして、仁の友人である信人が事務所を訪れた。

この人物、無類の酒好きで仁の親友である。現在55歳。大工の頭領でもあり、人情派の熱い男である。

「仁は居るかあー？」

「あっ、信さんこんにちは……」

事務所に待機している10番隊隊長の岡本。信人は事務所の雰囲気
気がいつもと違うことに気がついた。

「誰も居ないな……何かあったのか？」

「いえいえ、特に何もありませんよ」

「……そうか。たまには顔出しに来いって伝えてくれ」

「あ、はい、わかりました」

信人は不服そうに事務所を後にした。

その頃、仁達は最前線の本陣に到着していた。真っ先に溝口が状
況を聞く。

「吉祥寺の蔵野達の仕業なのか？」

「はい。総勢150名程です。3番隊隊長…今川さん、8番隊隊長…
清水は病院へ運ばれました」

答えているのは、7番隊隊長の小木である。

「いつもの3倍近いじゃねーか」

「仁さん……申し訳ありません」

「気にするな。詳しく教えてくれ」

落ち着いた表情で仁は問いかけた。

「いつになく、蔵野の奴が正面から強気で攻めてきました」

「数まかせの総力戦ですかね？」

三浦が口を挟んだ。

「最初は今川さんの活躍で驚くほど互角に戦えたんですが……」

「……どうした？」

「1人の男が現れてから状況が一変しました」

小木は、少し青ざめた顔をしている。溝口が問う。

「その男は誰だ？」

「私には分かりませんでした。今川さんが逃げろって……」

「至急、そいつを調べてくれ」

仁は三浦に指示を出した。

「……あいつは強すぎます」

下を向き、恐怖に怯える小木。

「……各部隊長には持ち場の治安を維持しろと伝えろ」

「遠征に出して修行させている弘道はどうすんだ？」

「あいつは俺の後継者だ。そのまま修行させておけ」

仁と溝口が話している所へ、三浦が血相を変え戻って来た。

「大変です！！ 男の正体が解りました…… “傭兵” 『直人』です
！！」

「ぶー、【五虎将】じゃねーか！！」

「ああ、【無双】の使い手だ……」

慌てふためいている溝口とは対照的に、仁は落ち着いていた。すると今度は、小木が駆け寄ってきた。

「た、大変です！！ 弘道が遊撃隊になって背後から攻めますって……」

「誰が連絡したんだ？」

「弘道から事務所に連絡があって……岡本の奴、しゃべっちゃったみたいです」

「危険ですよ！！ 弘道は“傭兵”がいることを知らない……」

「連絡はつかないのか？」

「何度連絡しても繋がらないんです」

「『直人』と150に対して、こっちは遊撃隊の弘道を含めて40弱。……どうすんだ、仁？」

ずっと無言で聞いていた仁は、口を開いた。

「次の衝突の際は……俺が『直人』と戦う」

「何？」

「聞いた噂だが、1回の戦闘が100万らしい。おそらく蔵野達じゃ1200万を集めるのが精一杯だろう」

一同がその話に沈黙している。三浦が口を開いた。

「次の戦闘で資金が尽きるって事ですか？」

「おいおい、そんな噂信じるのか……」

「『直人』さえないなければ何とかなるだろ？」

「馬鹿言うな俺が行く。簡単に大将を出せるかよ!!」

「俺がいきますよ!!」

「……立ち向かっていけるか自身がありません」

「無理はしなくていい。【五虎将】の戦闘を目の当たりにしたんだ

……」

怖がる小木に優しく微笑んだ。

「お前も十分体験してるだろ？」

無言の溝口に、仁は語り掛けた。

「絶対的不利な状況だ、作戦を練るぞ!!」

——善福寺公園入口。日が沈み、辺りは暗闇に包まれていた。

見張りの前に信人が姿を現した。

「うつひゃつひゃ。……ういゝ」

「な、なんだこの酔っ払いは……おい、おっさん。ここで何をしている？」

「池で魚でも釣ろうかと思ってねえ」

「もう夜だ。それに状況が見えないのか……今ここは戦闘地区なんだよ」

「えっ!! 魚が寝てるって……」

「言ってねえよそんなこと……怪しすぎるぞコイツは。とりあえず連れて行くか？」

「ちっ、しょうがねーな」

見張りの数名が面倒臭そうに信人を連行していった。その頃、敵陣の背後に到着した弘道と補佐役の佐助。

「どうにか間に合ったみたいだな」

「ああ。妙に静かだぜ」

「これからどうする？」

「とりあえず、仁さん達の動きを見極めないと」

「それにしても数が多くないか？」

「いつもの倍以上はいるな……」

本隊の動きを見極めようと、13番隊の10名が敵陣の背後で息を潜める。

連行された信人は敵の本陣へ到着していた。

「失礼します。入口に変な奴がいましたので連れてきました」

「んーなんだ？」

蔵野は入口を振り返った。

「ういゝひいっく。……ご苦労様」

豪腕をうならせ見張りの数名をぶっ飛ばした。

「敵だ！！ 集まれ！！」

蔵野の叫び声に、すぐさま20名程の兵隊が集まった。

「敵本陣に1人で来るとは……いい根性してるな」

「友の危機なんぞな。……暴れさせてもらうぞ」

豪腕のうなりに敵兵は次々と倒されていく。

「何者だ、貴様？」

「ただの酔っ払いだよ。……覚悟しな」

「うわぁ！！ ……直人さん、直人さん」

歩み寄る信人に恐れをなした蔵野は、直人の名を叫びながら本陣の奥に逃げ込んだ。

「……苦戦してる理由ってそーゆー事か」

信人は歩みを止め、顔が引きつっている。まもなくして、奥の部屋から直人と蔵野が何やら話をしながら姿を現した。

「この戦闘で終わりだが……いいんだな？」

「ああ構わねえ。（また『清』さんに連絡すればいいさ）」
直人は信人を見た。

「じゃあ……始めようか？」

「待て、ここじゃ狭い。外で存分に楽しもうじゃねえか」

「……お好きなように」

信人は外に出るなり、すぐさま大木を引き抜き手を加え、巨大な六角棒を作った。

「うわっ、なんだこいつは！！」

それを見ていた兵隊が驚いている。信人は片手に携えた六角棒を直人に向けた。

「なにか不服でも？」

「……問題ない」

「そんじゃー遠慮なくいくぞ！！」

大木並の六角棒を小枝を振るうようにブンブンと振りまわす。直人は軽々しくそれをかわしている。

「ちっ、全然あたんねー……年は取りたくねーな」

攻撃し続けるが、疲れの色が出始めていた。

「終わりか？　じゃあ、こっちも遠慮なくいくぜ（【呪縛…無双】）」

「無双」　古の武将達の呪いにより、あらゆる武器を使いこなす。

「能力」　無双の呪いからあらゆる得物を出現させる。しかし、得物を持たない肉弾戦は不得意。

突如、直人の全身がほのかに青く光り手に長槍が現れた。

「【無双】の力か……（やばい、俺も変身を……）」

「無双・螺旋突！！」

閃光の一突きが信人を貫いた。

「ぐはっ……（ちっ、間に合わなかったか……）」

信人は、苦悶の表情を浮かべ膝から崩れ落ちた。

「決まりだな」

蔵野は不敵に笑っている。

「仁さん、敵陣が慌しい動きをしています」

「……………」

「弘道達じゃねーだろうな……………」

「突っ込みますか？」

「…………暗くて判らないがもう少し様子を見よう」

「うおっ、なんだ今の稲妻みたいな青光りは？」

「！！…………全員突撃！！」

「おっ、よっしゃーいくぞー！！」

息巻いて突撃していく溝口。その頃、身を潜めていた弘道と佐助。

「動いた！！」

「…………総攻撃か？俺達も突撃だ！！」

本陣の動きに呼応するように、背後から急襲する。

本陣に戻っていた蔵野の元へ報告が入った。

「大変です！！敵の総攻撃が始まりました」

「何が大変なんだ。3倍近い兵隊がいるんだぞ…………潰せ！！」

「帰るぞ…………」

「えっ！！あっ、ちょっと待っててくれませんか？」

直人の帰るそぶりを見て慌てた蔵野は、急いで連絡をしている。

「もしもし、『清』さんですか。…………な状況でして」

「くっくくっ、楽しませてもらったぜ…………。諦めろ、追加融資は

もうできんな…………」

『清』の言葉に、蔵野は腰を抜かした。そんな蔵野に、次々と報告が上がってくる。

「大変です！！背後からも敵が現れました」

「…………ひい」

直人が去り。数だけの蔵野達は全滅した。

第18話 パンダマン 〽歓喜〽

——練馬区…Bar Change——

夜9時、店は最高潮の賑わいを見せていた。忙しく動き回る昌也の携帯に翔からの着信が入った。

「昌也、やったぞおー!!」

大きな叫び声が鼓膜を直撃した。あまりの衝撃に、昌也は携帯を遠く離し手で耳を塞いでいる。そして、表情は大きく歪んでいた。

あの日以来、翔は華艶に通い続けた。そして、ついにデートの約束をした直後だったらしい。遠く離れた携帯から、喜ぶ声が聞こえるほどだった。

「お、おめでとう…で、どこに行く予定なんだ？」

「おお、パンダが見たいって…」

「そしたら上野動物園か？」

「そうそう。でさ…」

店の営業を終え、昌也は徑子と酒を酌み交わしながら話をしていく。

「恥ずかしいから俺達も来いって…」

「わぁー、私もパンダ見たい!!」

「勘違いするなよ。翔を影から見守る役目だからな…」

昌也はまだ耳鳴りがするのか、耳を気にする素振りをしていた。

第19話 パンダマン シュンマオ

——台東区…上野駅——

デート当日、快晴に恵まれ、あたかも天が2人を祝っているかのようだった。緊張した面持ちで翔は待ち合わせ場所にいた。しかし、30分が過ぎても凜の姿が見えない。

「……（も、もしやドタキャン？）」

最悪の事態を思い浮かべ、緊張と焦りで落ち着かない様子だ。その姿を物陰から見守るように、昌也と径子の姿があった。

「遅いね凜ちゃん……あつ、来た！！ あれそうじゃない？」

無言のまま翔を見ていた昌也は、安堵の表情を浮かべている。

「遅くなってごめんね」

翔はチャイナドレスを身に纏った姿に見とれている。とても幸せそうな顔だ。

「ねえ？……行こうよ」

「お、おお（可愛いなあ）」

まだ手こそ握れないものの、寄り添って歩く2人。

「なんだか翔さん、幸せそうだね」

「ああ、幸せになってもraitaina……」

——台東区…上野公園——

上野動物園の入口に到着した翔と凜。そして、気づかれないように尾行する昌也と径子。翔は係員の手を持っているプラカードを見て青ざめた。

「うげっ！！ 入場制限だと……」

動物園は連日の大盛況。パンダの人気を甘く見てはいけない。

「只今、大変混雑しております為……」

係員がメガホンで何やらアナウンスをしている。

「さ、3時間待ちだど!!」

翔は呆然と立ち尽くすしかなかった。凜は残念そうな表情を浮かべている。もちろん昌也達にも情報は伝わっていた。

「凜ちゃんって仕事あるんだよね?」

昌也はなんとも言えない表情をしていた。

「残念だけど、しょうがないよね……」

「……（こんな俺に、神様は微笑まねえか）」

「仕事まで時間あるし、園内を散歩でもする?」

凜は笑顔で話しかけた。その笑顔に癒され、一緒にいれる事に幸せを感じた。翔に笑顔が戻り、2人は不忍池の方向に向かって歩き出した。その姿を見届けた昌也。

「大丈夫そうだな。よし、俺達もどっか行くか?」

「映画を見たーい!!」

昌也と径子は、仲良く手をつなぎ映画館へと向かった。

不忍池に沿って歩く翔と凜。仲良く歩く姿に初々しさが漂っている。

「ん? あれは……」

そんな姿を見ていた的屋が何処かに連絡をしている。

「どうした?」

「若頭、翔の奴が目の前を歩いているんで……」

「ばかやろう!! そんな事でいちいち連絡してくるな」

「あ、はい。すみません」

「それより、ちゃんと売れてんだろぅなあ……たこ焼き?」

「そ、そりゃーもちろんですよ……はは」

「どうやらこの的屋、【侠狼会】の者らしい。」

そんな的屋の慌てふためく姿など御構い無しに歩き続ける翔と凜。

至福の時間が流れている。

「でも、3時間待ちだなんて驚いたね」

「いっその事、パンダが檻から脱走してしまえばいいのに……」

「あはっ、入場制限しなくてすむもんね」

しばらく散歩していると会社員と思われる30名程の集団が宴会をしていた。会話が弾み、幸せそうな2人が横切る姿を彼らは見ていた。

「ヒューヒュー、これからどちらまでえ」

「そりゃそちらに向かって歩いてるんだから、聞かないでえ」
かなりの酒が入っているのだろうか。調子に乗った酔っ払い達の

野次が飛ぶ。

「野郎……」

「翔。喧嘩はだめだよ」

凜の言葉にその場をやり過ごそうとする翔。

「中国人を相手にいい気になるなよ」

「いやあゝあれはコスプレ好きかもしれんぞ」

ギャーギャーと野次がエスカレートしていく。

「私は大丈夫よ。こーゆーの慣れっこなんだから……」

凜の笑顔だけが翔を押し留める唯一の救いだった。

「へっ、可愛い顔して売春なんじゃねーのか。お金なら沢山……」

凜の表情から笑みが消えた。その瞬間だった、翔は集団に向かって走り出した。

「テメーラみたいな奴らがいるから、何もかもが歪むんだよ!!」

うおお……（我に眠りし修羅よ今日覚めよ）

「翔!」

瞬時に野次を飛ばしていた5人の顎を砕き、残りの集団に睨みを利かせて殺気を放った。恐れ慄きながら減らず口を叩く会社員。

「お、お前、亀柴商事に手をだして、ぶ、無事でいれると思うなよ」
「亀柴商事ですって……」

何やら凜の表情が硬い。

「だまれ狐共がっ!! 虎のお出ましを待ってやるから早く呼べや……」

翔は目で会社員達を殺している。

「翔、もうやめて!!」

「呼んだかね？」

どこからともなく声が聞こえた。辺りを見回し、ざわつく会社員達。

「どこだ？」

「いた!! あそこの屋根の上だ……」

発見した会社員が指差す先に、背を向け仁王立ちしている何者かの姿があった。翔と凜もその先に視線を向けた。

「……本当に脱走？」

「シュンマオ!!」

凜に笑顔が戻り、目が輝いている。会社員はその異様な姿にざわついている。

「なんでパンダがここにいるんだ？」

「馬鹿、どう見てもきぐるみだろ……」

「何者だお前は？」

どう見てもパンダのきぐるみを着ている様に見えるが、パンダ体型の男がパンダ柄の全身タイツを着ている様にも見えた。どっちにしろ異様な姿だ。男は振り返って語り始めた。

「俺の名は“パンダマン”。平和とパンダをこよなく愛する正義のヒーローだ!!」

通称“パンダマン”。パンダ体型でパンダ柄の全身タイツ、顔はペインティングしているという噂。自分を正義のヒーローだと思っており、悪に対しては容赦しない。全てにおいて、謎多き男……。事態がよく飲み込めないのか、静寂が辺り一面を覆いつくしていた。

「自分でヒーローって言っちゃったぞ、あいつ……」
会社員の一人が静寂を打ち破るように口を開いた。

「ちっ、ただの変態か……」

翔は見下した目線でパンダマンを見ていた。

「大丈夫だよお嬢さん、何も言わなくていい。状況は把握できた……」

屋根から飛び降りたパンダマンは、一目散に翔を目掛け襲いかかった。

「お前が悪の元凶だな……問答無用!!」

「ちょ、ちよっと、違う……」

「邪魔だ!!」

翔の裏拳でパンダマンはあっさりぶっ飛んでいった。

「……弱っ!!」

会社員の面々はあまりの弱さに驚いた。

「ちっ、邪魔が入ったが亀柴商事が何だって？」

再び会社員達に向かって歩き出す。すると背後から気配を感じ、翔は振り返った。

「（【变身…鬼熊】）俺をこの姿に変えさせるとは……」

「鬼熊」 熊の妖怪。怪力の持ち主で、人と同じように直立歩行し、家畜の牛馬などを襲う。

「能力」 3 m程に巨大化し怪力を得る。パンダ柄はそのまま継続されるらしい。

パンダマンは【妖怪…鬼熊】に変身していた。

「どっちにしろ、俺には勝てんと思うが……」

「ぐがああ!!」

雄叫びと共に振り下ろされる熊手。防御はしたが、その威力をまともに受けた翔は片膝を着いた。

「くっ……（パワーはあるみたいだな）」

翔とパンダマンの一身一体の戦闘が続いていると、会社員の1人

が何処かへ連絡をし始めた。

「もしもし、社長ですか。大変お忙しい所、申し訳御座いません」
「どうした？」

「上野公園で飲んでるんですが……」

社長に状況を伝え、助けを求めている。

「ほお……（“皆殺”の翔だな……）」

「……どうしたらよろしいでしょうか？」

「お前達じゃ100人いても敵わんよ。今のうちに逃げときな」

「……はい。分かりました」

全員にその旨を伝え、翔とパンダマンの戦闘が続く中、隙を見て次々と逃げていった。

「ちっ……（しぶといな。こっちも全力でいくか）」

「ゼエ……ゼエ……（なんだこの強さは……）」

「（【潜在…ヘーパイストス】）火鳥扇！！」

くへーパイストスく　ギリシア神話の火山・炎・鍛冶の神。

Ⅱ能力Ⅱ　火系の攻撃を得意とする。得物、打撃に炎を宿すことが出来る。

翔とパンダマンの間を火炎の扇が通過した。翔は目を真ん丸にして凜を見ている。

「シュンマオ……ちょっと待って！！」

凜は火鳥扇を持ったままパンダマンに近づいて行った。

「アチッ！！（動物に火を向けないで……）」

「勘違いよ。悪いのは……」

凜が見た先に会社員達の姿は消えていた。

「あのね、この人は……翔は私の……」

「……えっ（何？）」

翔はドキッとした表情で凜を見ている。

「冷静に状況を把握したんだが……私の勘違いでしたね」

「あっ！！（こらパンダ野郎、話を遮りやがって）」

翔はパンダマンに向けて変な顔をしている。

「大変申し訳かった……危うく怪我をさせてしまう所でした」

「こちら……（よく状況を見ろ！！）」

翔は怪我をしてるのはお前だよって顔をしている。

「助けてくれようとしたんだね。シェイシェイ」

「なあゝに、礼には及ばん。正義のヒーローの宿命さっ！！」

言いたい事を言い切ったのか、パンダマンはふらふらとよろめきながら去って行った。

「ちっ、あいつのせいで逃がしちゃったじゃねーかよ……」

「翔……ありがとう」

涙ぐんでいる凜をそっと抱きしめようと両腕を広げた。

「あっ、大変！！ 仕事の時間に遅れちゃう。帰らなきゃ……」

両腕は広げられたままフリーズしている。

「そ、そうだね。帰ろっか……」

翔は恥ずかしそうに両腕を下げ、次に会う約束を言い出せずに上野駅まで凜を見送った。

心に空いた虚無感を抱え不忍池が見える公園のベンチに戻り、水面に浮かんでいる蓮の花を見ながら1人たそがれていた。

第20話 靖国神社（参拝）

——千代田区…靖国神社——

蝉の合唱が最盛期を迎えている。降り注ぐ日差しが心地よさを通り過ぎ、苦痛に変わる季節。

翔は昌也に誘われ、見知らぬ場所をひたすら歩いていた。

「なにっ!? それで抱きしめられずに帰ったのか……」

「……うるせえなあ」

「まったく、情けねえ。そこは抱きしめるだろ絶対に……」

どうやらデートの出来事を話しているようだ。

「……それより、何処に向かってんだよ？」

「んっ、靖国神社だ」

「神社だど!? ……俺は用がねえから帰るぞ」

「まー付き合えよ、参拝するだけだからさ」

「参拝？ 近くの神社で済ませればいいだろ」

「この時期は特別なんだよ……」

2人が境内の入口に到着すると、そこには大勢の警察官がいた。

「おい、警察官が入口を固めてるぞ。目的は俺か？」

「……馬鹿。警備に決まってるんだろ」

「な、なんで警察が神社を警備するんだよ？」

「この場所は、今日が一番危険な日だな……」

昌也は説明するのも面倒臭くなったのか、境内へ入って行った。翔は警察を気にするようにチラチラと見ながら昌也の後を追った。

「いやあゝ暑いですね。署長自ら警備に付かなくても……」

「……上からの命令だよ」

司はあからさまに不満な顔をしていた。

翔と昌也は境内のジャリ道を歩いている。すると車道の方から演説が聞こえ2人は振り向いた。

「……の行為に対し、多くの国民やアジアの近隣諸国が……」
選挙カーの上から政治家が汗だくになって話をしている。

「ったく、このくそ暑いのに大声でうるさいんだよ（あれ、どっかで……）」

「うわっ！！　こんな所で一郎さんに会えるなんて……」

ぽっちゃりとした体型の63歳。仏頂面からか見た目で損をする事が多いが、この国の将来を本気で考えている最後の大物政治家。苛々している翔とは対照的に、昌也は目を輝かせて一郎を見ている。

「……は？」

「お前の事だから知らないとは思うけど……。一郎さんはなあ……。政治・経済について熱く語り始めた。」

「あ、ああゝ息苦しい……」

暑さに加え、昌也が語る訳の分からない話が翔の脳みそを混乱させた。

ジャリ……。ジャリ……。翔は音に気がつき振り向くと、白杖を手にした視覚障害者が向かってくるのが見えた。

「おい昌也、じゃまだから道をあける（むむっ、どっかで見た気が……）」

翔の声に、熱中していた昌也も気づき道をあけた。

「すみません、どうぞ……」

「ご親切に、ありがとうございます」

ジャリ……。ジャリ……。その視覚障害者はお礼を言って通り過ぎていった。昌也は無言のまま見ている。

「……（あの人、もしかして）」

「気の毒だっと思ったら失礼なのは分かっているけどさ……」

翔は視覚障害者の背中を見つめながら、大変そうだなって表情を

浮かべている。

「……平和で豊かなこの国を……」

「うるせえなあ……まだ話てんのか」

「お前なあ。一郎さんって人はだな……」

話が振り出しに戻ってしまった。翔は両耳を塞ぎ、神社の方向へ歩き始めた。

神社に近づく、大慌てでウロチヨロウロチヨロしている巫女がいた。

「ああーどうしましょう。よそ様の所は使い勝手が解かりませんわ」

「おっ!! 巫女がいるぞ」

「神社なんだから当たり前だろ……」

「あーはいはい。さっさと参拝終わらせようぜ」

2人は神社へと消えて行った。

第21話 靖国神社（リジューム）

——中央区・リジューム——

銀座NO.1ホステスの美咲が経営する高級クラブである。

42歳。通称“女帝”。絶世の美女であることから、嫉妬したウエヌに呪われたと噂される程である。素性は謎が多い……。

銀座のきらびやかな風景を更に引き立てる豪華な建物は、道行く人の目を引いた。そこへ、演説を終えた一郎が足を運んでいた。

「先生、今日の演説お疲れ様でした」

「ふははは、さすがママ。もう情報が……」

「ふふ。私の知らない情報などありませんわ」

経済界から裏社会まで、美咲の交友関係は広い。

「今日はとても多くの皆様に聞いて頂けた……」

今から演説を始めるかの様に、まだまだこの国は良くなると熱く語り始めた。

「相変わらず真面目で熱い人ね」

「志をかざして……もう20年か」

志や熱い思いだけでは、国を変えることが出来なかった。今、その一つ一つを思い起こし溜め息をついている。

「ふふ。あの頃の先生は可愛かったわ……」

「こ、こら……恥ずかしいからその話はやめてくれ」

議員1年目、駆け出しの頃の自分を思い浮かべ照れている。

「しかし……いつまでもママは美しい、あの頃のままだ」

「ふふ。お上手ですね、先生」

一郎はお世辞ではなく本音でそう言っている。瞳を見つめていると知らぬ間に美咲の魅力に吸い込まれていた。

「先生、そんなに見つめられたら恥ずかしいですわ」

「えっ、あつ……あの、弟さんは元気になっていますか？」
顔を真っ赤にして照れている一郎は、話題を変えようと必死にな
っていた。

「お蔭様で、その節は……」
美咲は深々と頭を下げた。

「で、では。そろそろ……」
帰ろうとする一郎に美咲が耳打ちをした。

「先生、最近不穏な動きが御座います。ご用心を……」
「ありがとうございます。では……」

一郎はリジュームを後にして、事務所へと帰って行った。

第22話 靖国神社（刺客）

——千代田区…某所——

日付が変わる頃、車を降りた一郎は事務所へ到着していた。ドアを開けると、遅くまで残っていた秘書が出迎えている。

「先生、おかえりなさい」

「ああ、遅くまでご苦勞様」

「あの、ご友人の方が奥の部屋でお待ちですが……」

「分かった、ありがとう」

「先生はお茶でよろしいですか？」

「ありがとう。今日は一日疲れたろ、もう帰りなさい」

「あつ、はい……」

一郎と友人の邪魔をしてはいけないと、秘書は身支度を済ませて帰っていった。

一郎は秘書の姿を見届け入口のドアに鍵をかけた。そして、奥の部屋へと入って行く。中には男が一人、背を向けソファに座っている。一郎は反対側に腰掛けた。

「ご配慮、ありがとうございます」

「……で、用件はなんだね？」

「本日の演説はとても良かった、と伝言を預かっております」

「それはどうも……」

一郎はこの男とは面識がない。しかし、何故ここに居るのかは大体見当がついていた。

「しかしながら、いつまで続けても何も変わりませんよ」

「ふははは、それは最後まで判らんだろ……」

「残念ですが、今日がその最後の日……」

突然、男は隠し持っていた短刀をチラつかせ立ち上がった。

「刺客か……だいたい見当はついているがな。お前さんは“国取り”の手の者だろ？」

「……そこまで分かっているとは、流石だな」

「お前さんごときには殺られんよ……」

「ほざくな老いぼれ!!」

一郎は2人の間にある机を咄嗟に蹴った。男は弁慶の泣き所に机があたり、短刀を握ったままうずくまっている。

「悪いがまだ死ぬ訳にはいかんのでな……（【変身…閻魔】）」

（閻魔） 仏教の地獄の主。冥界の王・総司として死者の生前の罪を裁く者。

Ⅱ能力Ⅱ 3 m程に巨大化し黒魔術を使う。

一郎の姿は巨大化し【閻魔】に変身した。その姿を見た刺客は、驚愕して短刀を落とした。

「この姿を見たからには死んでもらう……魔道波!!」

一郎の掌から暗黒の波動が解き放たれた。あっけなく刺客の姿は、溶けて消えていった。

第23話 歌舞伎町（トレーダー）

——品川区…某所——

「あん……もう……そう、そっち……」

自宅でトレーディング画面を眺めながら、瞳は呟いていた。

26歳。見識が高く聡明だが、大雑把な一面も持ち合わせている。世界中が不況一色で染められたこの時代。個人投資家として日々画面に向き合う生活を送っていた。

「うん、今日は300万円の利益か……」

世間では耳を疑いたくなるようなお金の動きである。

「……あそこで仕掛けていたらなあ」

一瞬の判断ミスが多額の損失に直結する世界。

「でも、タラレバ言ってちゃ駄目だよね」

……運命と同じように。

「うーん、為替はいいかな（動きがなさそうだし）」

気分転換にと携帯を手に取り夕食の誘いを友人にした。

——新宿区…アルタ——

瞳は、待ち合わせの時刻より少し早めに着てしまい、アルタ前を行き交う大勢の人々を見ていた。

「あの映画良かったよな……香織は泣きすぎだけど」

「だって本当に泣けたんだもん。まこっちゃんだって……」
通りすぎるカップルの会話が聞こえてきた。

「……（デートかあ）」

異性との触れ合いからすっかり遠ざかっていた。

「ごめん。待った？」

「私も今来た所よ……」

恵子が姿を現した。看護学校の時の友人である。2人は高級レストランへと入って行った。

「でも、瞳が看護職から離れるとは以外だったわ」

「……そう？」

「だってあなたは主席で卒業して、あんないい病院に就職したのよ……」

瞳は優秀な看護師として将来を期待されていた。

「……。でも、恵子が今日お休みで良かったわ」

「タイミングだけはいいのよねー私」

「お仕事は、順調？」

「そうね。色々あったけど順調よ」

友人の幸せそうな表情に笑みを浮かべている。

「今はそのトレーダーって仕事をしているの？」

「うん。仕事って呼べる程の物じゃないけどね」

「難しそうで私には分からないわ……それよりね……」

恵子は最近通い始めたホストの話始めた。

「そうなんだ。でも、あまり興味がないわ」

「瞳も長い間彼氏いないでしょ。社会勉強だと思って、どう？」

社会勉強だなんて、都合のいい話である。

「（夕食付き合ってくれてるし）……今日だけだからね」

「うん。わかってる」

食事を終えた2人は、歌舞伎町へと向かった。

第24話 歌舞伎町 くデュアルコアく

——新宿区…デュアルコア——

歌舞伎町N.O. 1の麗が所属しているホストクラブである。

28歳。“孤高の剣豪”の異名を持つ。冷静沈着で優しい心の持ち主だが、野望を成し遂げる為なら手段を選ばないという一面も。それには、生い立ちが関係しているようなのだが……。

接客中の麗にホストが耳打ちをしている。

「美雪さんが見えです」

うなずく麗。もうすでに10名以上の指名客が来店していた。

「申し訳ありません静香さん。指名が入ったようなので……」

「ええーもういつっちゃうの？」

「すぐに戻って来ますよ……」

麗は甘いマスクで微笑み、その卓を離れて行った。

「どうも初めまして静香さん!!」

指名者が卓を離れると、ヘルプがその卓を受け持ち盛り上げる。

「初めてじゃないでしょ、あなた……」

「あははは、ばれました……」

「やっぱり高いお酒でも入れないと長くいてくれないのかしら……」

そんな時、店内に響き渡るようにマイクパフォーマンスが入った。

「8番テーブルのお客様より、ドンペリ・プラチナ頂きましたー!!」

「！」

「ありがとうございますーす!!」

「ホスト……集合!!」

合図と同時に店内のホスト達が8番テーブルを囲みパフォーマンスが始まった。シャンパンなどを注文するところといったサービスが受けられる。

その頃、瞳と恵子はデュアルコアに到着していた。

「いらっしやいませ恵子さん!!」

ホストに名前を覚えられる程、恵子はこの店に通っていた。

「お隣の方はご友人ですか？」

「初めてなの。S券で入れるかしら？」

「もちろん大丈夫ですよ」

2人は席へと案内された。店内は薄暗いが高級感が味わえる豪華な造りになっている。まもなくして、恵子ご指名のホストが現れた。

「恵子さんいらっしやい!! お友達の方初めまして達也です!!」

異様にテンションが高い。瞳は軽く会釈をした。指名者がいない瞳のようなフリーのお客に対しては、まだ駆け出しのホストや指名を取れないホストから接客をするのが通常である。

「ねえ達也。麗さんをここに呼べないの？」

「えっ!! (NO・1ホストがS券に来る訳ないだろ)」

「私の友達なの、美人でしょ。楽しませてあげたいのよ……」

「……無理だよ」

「またそー言って、麗さん呼べないんでしょう？」

「……(当たり前だ!!)」

2人の会話を聞き入っているだけの瞳。

その時だった、瞳達の卓の前を偶然にも麗が通り過ぎた。

「あっ、麗さん!!」

恵子の呼び止める声に麗は立ち止まり振り向いた。

「いらっしやい。恵子さん」

「あの、友達なんですが……」

麗は恵子の隣に座っている瞳に目を向けた。しばらく無言で見つめ合う2人。

「後で来てもらえませんか？」

「もちろんですよ」

麗は微笑みを残し次の指名客の元へ向かった。

「はあ……素敵。指名変えちゃおうかしら？」

「おいおい。俺は心臓がバクバクしてたぞ……」

「あの人……（とても哀しい目をしてた）」

営業時間も終わりに近づき、へべレケな達也と恵子。代わる代わるホスト達は来るものの、麗の姿は無かった。麗の存在・瞳の存在も忘れてしまい、達也と恵子は2人で何処かへ行ってしまった。

「あーあ、私も帰ろう……」

取り残された瞳は、1人店を後にした。

第25話 歌舞伎町 〱 一番街〱

――新宿区…一番街――

午前4時前後、歌舞伎町が最も危険な時間帯を迎える。

始発待ちをしている一般人の酔っ払い・お茶引きホスト達のキャッチ、麻薬の密売人・付随したチンピラ、ゴロツキ達。そして何よりも最も危険な繁華街、眠らない街…歌舞伎町。その元締め組員達がうごめいている。

そんな凶悪な輩達を相手に、常に目を光らせている歌舞伎町交番の精鋭警察官。まさに一触即発のピークを迎える時間帯に、瞳は何も知らずに一番街を歩いていた。

「まだ、時間早いけど始発動いてるかな」

コマ劇付近に差し掛かった時だった。案の定、ゴロツキ達に取り囲まれる。

「……（ちょ、ちょっと何？）」

それを見ていた組員達がニタニタしながら近寄ってきた。すぐにゴロツキ達は逃げ去る。弱肉強食の世界。

「ほおこりゃ上玉だな」

瞳を囲む組員達の元に車がまわされ、連れ去られる瞬間だった。

「俺の連れだが……何か？」

そこには麗の姿があった。

「なんだあ……へっ、ホストかよ。ホストごときが首を突っ込むんじゃない！」

麗は3人の組員に囲まれている。

「お前ら【侠狼会】の者か？」

「知っているなら話は早え……判るよな？」

「麗さん……」

瞳の呟きを聞いた他の組員が叫んだ。

「麗だと!?! ……お前ら手を出すな!?!」

時既に遅し、3人は地べたに転がっていた。

「ちっ……女は返せばいいんだろ。行くぞ!?!」

【侠狼会】の連中は車に乗り込み、逃げるように去って行った。

麗は瞳の元へ優しい笑顔で歩み寄った。

「あの……ありがとうございます。ご迷惑をお掛け致しました……」

「とんでもありません、私の方こそ約束を守れなくて申し訳なかった……」

麗は卓に來ると言った約束を守れなかった事を詫びている。

「よろしければ、始発までお話しませんか?」

投資家とホスト。畑は違えど、己の裁量のみで生きる共通点に瞳は心を開き始めた。

「……はい」

2人は朝靄のかかる場所へと姿を消した。

第26話 刺青 〱 俠狼会〱

――板橋区…俠狼会事務所――

今は亡き、初代俠狼会・会長。名立たる勢力を駆逐し、至弱から至強の組織へと導いた偉大なる人物。その血を受け継ぐ重慶、若干28歳。現在は父親である3代目会長が君臨しているが、とにかくこの親子……とても仲が悪い。

俠狼会・若頭で義侠心の強い人物。大胆な性格からか、度々周囲を困らせる事がある。信念が強く、極道の真髓を常に探求している。また、世話好きという似つかない一面も。翔とは古くからの顔見知りのようなのだが……。

ある日、重慶は大きなソファ―に腰掛けていた。両腕と腰元に裸の妾を侍らせ、快楽に浸っている。そんな最中である、部屋の扉が開き若い衆が入って来た。

「若頭、本隊の奴らが『麗』とトラブルになったとの情報が……」

「……“孤高の剣豪”か？」

「はい、出勤命令が出ておりますが……」

「放っておけ……ったく、自分のケツぐらい自分で何とかしろってんだ……！」

怒気を含んだ言葉に、腰元の妾がビクッと反応した。

「おっ、すまねえ驚かせたな。続けてくれ……」

妾の背筋を撫でながら目を瞑り、再び快楽に浸っている。

「それよりも、亜門会の動きは掴めたのか？」

重慶の問いが聞こえたのか、部屋の扉が開き1人の男が入ってきた。

「それは私からお話しましょう」

「李伯か……『翔』の件はご苦労だったな」

「いえ、これで本隊も簡単には手を出せないでしょう」

「あいつとの決着は俺が着けるんだからよ……」

目を見開き、不敵な笑みを浮かべている。

「若、亜門会についてですが……この1年足らずで急速に成長しております」

「資金源でも確保したのか？」

「詳細は掴めませんでした、何者かが後ろ盾している事は確かです……」

「麻薬の売買までは目を瞑ってやるつもりだったが……」

急速に勢力を拡大させている亜門会。特に敵対的關係でもなく、度々侠狼会の島に姿を現していた。しかし、人身売買にまで手を染めた輩に、道無きと判断した重慶の怒りを買ってしまった。

「決行日は今夜だ。あいつらにもそう伝えておけ……」

「……わかりました」

李伯と若い衆は部屋を後にした。

第27話 刺青 〱極道〱

――板橋区・亜門会・布佐の屋敷――

広大な中庭を有し、古びてはいるが屋敷の大きさは豪邸を連想させる。部屋でくつろいでいる布佐の元に、侵入者の報告が入ったのは日が沈んだ頃だった。

「会長、“傭兵”が侵入者を捕らえました!!」

報告を届けに組員が部屋に駆け込んだ。まもなくして、犯人が連行されてきた。両手を後ろに縛られ猿轡を噛まされている黒装束の女。続いて直人が部屋に入った。

「んゝ女か？ まさか本物の忍者ってことはないよな……」

女の出で立ちに布佐は驚いた表情をしながら歩み寄った。そして、自ら顎を掴んで顔を持ち上げ、耳元で囁く。

「お前も運が無い、直人がいる日に進入してくるとは……」

「用件は済んだな。帰るぞ……」

「ご苦労様。『清』さんよろしく伝えてくれ……お前達、お見送りだ!!」

組員達に直人を見送らせ、布佐は部屋に鍵をかけた。そして、捕らえた女を大の字にして机に縛り付けた。

「さてお嬢さん、コスプレなのか、それとも本物のくノ一なのか……」

歩きながら布佐は話している。そして、奥から箱を持ち出し卑猥な玩具をちらつかせた。

「じつくりと体に聞いてみるとしよう……」

布佐は服を引き裂き、露になったそれ達に刺激を加える。微動だにしない女の姿を見て頬が緩んだ。くノ一とは、幼少の頃からこのような訓練を受けていると伝えられている。

「本物に出会えるとは光栄だ。……で誰からの依頼かね？」

女は無言のまま目を閉じている。

「……では、言いやすくしてあげようじゃないか」

布佐は金庫から持ち出してきた注射器を女に見せている。中には薬物らしき液体が入っているのが見て取れた。

「素直な自分に戻してあげるよ……」

「……そろそろかな」

虚ろな目をしている女。膨張している2つの山の頂上を、布佐はやさしく摘んだ。全身に迸る快感に、女は目を見開いた。

「うっ!!」

その反応に、布佐は満面の笑みを浮かべていた。口では尋問を続け、手にした玩具で全身の反応を確かめている。女は必死に逃れようとするが、仰け反る体勢が精一杯であった。

「んん、どうなんだ。そろそろ言いたくなってきたのか？」

女の喘ぎ声が鳴り止まない。そんな悪趣味が続く中、凄まじい爆発音が聞こえ布佐は手を止めた。

「何事だっ!!」

布佐の叫び声に、扉の向こう側から組員の報告が入った。

「狭狼会の襲撃です!!」

「ちっ、取り合えず応戦しろ!! それと直人を呼び戻すんだ……」

布佐の屋敷、敷地の正面入口。

頑丈そうな鉄門に狭狼会がバズーカー砲を打ち込んでいる。

「はっはぁー、どんどんぶち込め!!」

重慶は爆発音の度に歪んでいく鉄門を見ながら、血をたぎらせている。

「門が開いたぞ!!」

「突撃!!」

李伯の開門を告げる声を聞き、重慶は1人で突っ込んで行ってし

まった。

「あー若頭!」

いつもの事ながら無鉄砲な重慶の突撃に組員は手を焼いていた。しかしながら流石である、一同はその行動に呼応する。

広大な中庭で待ち構えていた亜門会と銃撃戦が始まった。目の前の敵を次々と撃ち倒し、重慶と数名が屋敷に辿り着く。中へ突入すると、外とは別世界の静寂に包まれていた。重慶は布佐の名を叫ぶが、声だけが木霊した。

「出てこないんじゃないだろうがねえ……」

重慶は懷からマグナム・ウルフを取り出した。そして、吹き抜ける空間へ向けて構える。

「頼んだぜ……（【操術…送り狼】）」

「送り狼」 狼の妖怪。山道を歩くと後ろからぴたりとついてきて、転んでしまうとたちまち食い殺されると伝えられている。

「能力」 送り狼を召喚して操る。得物に送り狼を宿して戦う。

【妖怪…送り狼】が姿を現し放たれた銃弾に宿った。意志があるかのように、目標に向かって飛んで行く。重慶は導かれるように後を追った。辿り着いた先は2階の部屋だった。扉を蹴り壊し、中へ入って行く。

「見いゝつけた……」

布佐は咄嗟に銃を構えようとするが、それより先にマグナム・ウルフが額を打ち抜いていた。一段落していると、ふと視線を感じ振り向いた。

「……何だこの裸のねーちゃんは?（!?! この刺青は……）」

女の左胸にある刺青を見た重慶は、すぐにこの女を解放するよう伝えた。解放された女は一瞬にして姿を消した。

「き、消えた!?! 若頭、誰なんですか?」

重慶は無言のまま立ち尽くしていると、奥の部屋から気配を感じ歩き出した。扉を開けると、その部屋には数十人の女がいた。全員

が裸で酷く怯えている。

「とんだ悪趣味ですね……」

背後には李伯が立っていた。亜門会を掃討し終えたようだ。この部屋には、隅々にまで卑猥な玩具が置かれていた。すると突然、重慶が語り始めた。

「俺達は世間の邪魔者だ……どんな行いをしようと決して受け入れられる事の無い十字架を背負っている。だが……己の道を貫き極める者だからこそ、俺達は極道と呼ばれる。帰る場所がある者は去れ、無い者は面倒を見てやるからついて来い!!」

怯えていた女達は、一斉に安堵の表情を浮かべた。

「この腐った屋敷は今すぐ焼き払う。急いで全員屋敷から出ろ!!」

屋敷に火が放たれ、中庭から一同はその様子を眺めていた。しばらくすると、女達が騒いでいるのに気づき組員が事情を聞いていた。

「若頭、4歳の子供がまだ屋敷の中にいるとの事で……」

重慶に報告しにきた組員の話聞いた李伯が、女達に聞いたのだ。た。

「何だと!? 何故一緒に連れ出さなかったんだ？」

「布佐に見つからないように隠し部屋に避難させていました……重慶様のお言葉の後に迎えに行ったのですが、そこにはすでに……零ちゃん達は私達の宝なんです」

重慶は炎に包まれる屋敷へ無言のまま入って行ってしまった。

「あっ!! お前らすぐに火を消せ!!」

屋敷内に突入した重慶の姿を見た組員達は急いで消化活動を始めた。

「くっ、火事で死ぬ奴の気持ち少し分かった気がするぜ……。これで、その娘が居なかったら……ピエロだな」

屋敷内は黒煙と炎に包まれている。予想以上の環境に重慶は戸惑っていた。最悪の事態が過ぎるが、送り狼に娘の居場所を託した。

すると、解き放たれた送り狼が動き始める。最も火の手があがっている部屋へ向かって行った。

「生きているんだろうな……」

扉を蹴り破ると幼い少女が倒れていた。すぐに抱きかかえ、意識を確認する。

「よし、なんとか生きている。後は脱出だが……」

燃え盛る炎と黒煙で方向すらつかめない状況となっていた。その瞬間、部屋の天井が崩れ落ち2人を覆い隠した。

「まだかっ!!」

いっこうに進まない消火活動に李伯は苛立っていた。

「まずいな。時間的に見ても厳しいか……」

重慶が屋敷に入ってから10分程の時間が経っていた。呆然と燃え盛る屋敷を見上げていると、女達が騒ぎ始めている。目を向けると、全身炎に包まれた3人の姿が見えた。女達は一生懸命に火を消している。李伯もすぐに駆け寄り手を貸した。覆いつくしていた火を何とか消し終えたが、ぐったりしている3人。意識が全く無い状態だ。

「（この女は……）すぐに『学』先生の元に連れて行くぞ!!」

重体の3人を急いで車に担ぎこみ、女達を乗せた数十台の車は燃え盛る布佐の屋敷を後にした。

第28話 刺青 く少女く

――江東区…診療所――

規模こそ小さいが、庭付き平屋建ての建物がそこにはあった。どうみても、診療所とは見られない平凡な家である。しかし、姿を晦ますのには最適だった。その一室に大火傷を負った2人は寝かされている。

布佐の屋敷、襲撃事件から4日目。重慶は目を覚ました。

「……若頭が目覚めたぞおー!!」

余りの嬉しさに組員達は大騒ぎしている。

「うるさいですよ。少し静かにしてなさい……学先生を……」

傍らに座っていた李伯も安堵の表情を浮かべている。間もなくして、学と呼ばれている白衣を着た男が姿を現した。

54歳。穏やかな性格で心有る人物。細身の白髪交じりで丸眼鏡かけている。死者をも蘇らせたと噂されるほど優秀な医者だったが、ある事件をきっかけに免許を剥奪され追われる身となってしまう。その後、闇医者として活動するのだが……。

「気分はどうですか？」

「……（助かったんだな）」

重慶は天井を見つめながら記憶を辿っていた。

「安心して下さい、少女の火傷は軽症です。きっとあなたが守っていたからでしょう……」

学は小さな庭で女達と無邪気に遊んでいる雫を見て話していた。

「ぐっ……」

重慶は起き上がろうとするが体が動かない。

「まだ無理ですよ。あなたが一番重症なんですから……」

重慶はふと隣を見るとまだ女が眠っていた。学と2人で話をする為、他の者達を部屋から出るように伝える。

「先生、その女の刺青を見ましたか？　正直、俺はそれを見た時ゾツとしましたよ……」

「……私もです」

「ずっと架空の組織だと思っていました……」

「相当な大物が絡んでいるようですね」

世の中には、絶対に表に出してはいけない情報が存在する。その情報のみを取り扱う闇の諜報会社の存在が、裏の世界では噂されていた。過去に一度だけだが、裏社会にその機密情報と思われる物が流出した事があった。当時は何者かの悪戯と思われていた。そして、その情報の一つに爵位を意味しているかのような印の序列があった事を、重慶は思い出していた。

そして、女に刻まれた刺青はそれを意味しており、しかも組織最高の実力者に刻まれる印であった。

「その女が布佐ごときを調べに来たとは考えづらい」

「おそらくあの娘が目的だったのでしょう」

「だが、その女は捕らえられていた……俺達が乗り込む前に誰かいたはずだ」

布佐を後ろ盾した黒幕の存在。最高実力者が動く程、重大な意味を持つ謎の少女。

「俺の頭じゃ無理だ。段々眠くなってきたな……」

「今は体のことだけを考えて下さい」

「とりあえず、その女が目覚めたら教えて下さい」

重慶は再び眠りに着いた。

――2日後。

驚異的な回復力で、重慶は起き上がることぐらい出来るようになっていた。

「若、若。お休みの所すいません」

「……ん、何だ？」

昼まで目覚めない重慶を、李伯はそっと起こした。

「あの女が消えました……」

隣を振り向くと、寝たきりだった女の姿がそこにはなかった。そんなにすぐに動けるものかと、重慶は驚きの表情をしていた。しかし、すぐに少女の事を思い出した。

「……娘は？」

「おりますが……何か？」

「……（最重要目的の娘を置いたまま消えたのだと？）」

「あの女、寝た振りをして体力が全快するのを待っていたんでしょ
うね……」

「先生はどうした？」

「今朝早くから例の件で……」

学は月に数日、ある約束を守る為に診療所を留守にする事がある。

「それと娘のことについて女達から聞いた事です……」

「……なんだ？」

「出会った時から、耳が聞こえていない様子らしいとの事で……」

「話すこともできない……か」

雫から何らかの情報を得ようと考えていたが、情報源を絶たれた。

……ガチャ。雫と不安な表情を浮かべている女達が部屋に入ってきた。

「あ、あの、お体が大分良くなったと聞きましたので……」

恐る恐る話し始める。

「お前達……雫は好きか？」

一斉に頷いた。

「雫をここへ……」

李伯はベットに雫を連れてきた。女達は心配そうに見守っている。

「俺の声が聞こえるか？」

重慶は目を見て話しかけるが、雫はキョトンとした表情で見上げている。その様子を見ていた重慶は、突然大きな両腕を広げ雫を抱

きしめた。

「お前は俺の娘だ!!」

おそらく言葉は聞こえていないだろう。だが、そのやさしい温もりに雫は微笑んだ。

「さて……帰るぞ!!」

雫を抱きかかえたまま立ち上がった。女達は不安そうな表情で重慶を見ている。

「お前達、雫の世話は任せるぞ……」

歡喜に沸く女達を連れ、重慶は診療所を後にした。

第29話 奇怪な出来事 〈女の戦い〉

――渋谷区…ハチ公前――

曇り空の午後、香織は大慌てで待ち合わせ場所に向かっていった。約束の場所ですぐにたづねている凜の姿を発見すると、その速度は光と化した。

「遅くなって、ごめんなさい！！ お、お爺ちゃんに邪魔されて……」

お洒落をしている姿を見られ、爺の突っ込みが激しかった話をしている。それを聞いている凜は笑っていた。

「初めて来たけど、とても分かりやすかったよ……」

ハチ公を見上げている凜は笑顔だ。

「そうでしょ。渋谷と言ったら、やっぱりここよね」

2人はスクランブル交差点を渡り、楽しそうに109へと歩いて行った。

――渋谷区…センター街――

数十年前はチーマーの聖地として知られていたセンター街。だが、ここ数年はコギャルに汚ギャル、センターGUYやギャル男にチャラ男など、世にも奇妙な動物園と変貌を遂げていた。芸能スカウトなども多数混在しており、世間知らずのお人好しが後を絶たない。そして、それをカモにする悪徳者達が巢食っていた。

そんな去年の事である。夏希と名乗る当時16歳の少女が姿を現した。彼女は瞬く間にこの街を支配し、従わぬ者は容赦なく追放した。

程好く買い物を買ませた凜と香織は、お食事処を求めセンター街へと向かった。日が沈み始めた夕暮れ時である。しばらく歩いていると、ギャル男やらスカウト達の目に留まる。

「ねえーねえーお姉ちゃん達……今暇してなくなかない？」

「いいよおー、綺麗だ。光り輝く原石だね、芸能界とかって興味ある？」

しつこく付きまとわれるが、すべて無視して歩いている。その後も、ひっきりなしに声を掛けられた。ふと気づくと、ひと気の無い場所まで歩いてしまっていた。

「……凄かったね」

「うん、もううんざり。はぁーお腹空いた……あれ、ここ何処!？」

香織は不安な表情をして辺りを見回している。見知らぬ場所に来てしまったようだ。来た道を戻ろうと、歩き出した時だった。どこか身近な場所と思われるが、叫び声のような騒がしい声が聞こえてきた。

「悲鳴!? ……やだ、何？」

「……行ってみよう」

香織は気味が悪い表情を浮かべている。凜は声のする方向へと走り出した。

広い更地へと辿り着き、異様な光景を目の当たりにする。宙を舞っている女を目掛け、数十人の男が石やら何やらと物を投げつけている。そして、数人だが倒れている男の姿も見えた。

仲裁に向かおうと走り出す2人。すると男達は呻き声をあげながら香織に襲い掛かってきた。

「ちょ、ちよつと……!!」

凜は香織の救出に向かおうとすると、妙な気配を感じ立ち止まった。目の前をすさまじい風が通りすぎるのを感じ、宙に浮いている女を見上げた。

「いい勘してるじゃない……これ以上、邪魔立てすると容赦しない

わよ」

女は凜を見下している。

「凜さん！！ こっちは大丈夫だからその女を……」

香織は手当たり次第に周りの男達をぶっ飛ばしながら叫んでいる。

「火鳥扇！！」

火炎の扇が女へ向かう。

「鎌鼬！！」

火炎の扇が真っ二つに切り裂かれた。凜は驚いた表情で女を見上げ、身構えている。女の正体は、洋子であった。

「どうしても邪魔をするというのね……死んでもらうわよ！！」

洋子は目を見開き、鎌鼬を連発している。凜は辛うじて避けながら反撃を試みるが、上空にいる敵に成す術が無かった。その様子を見ていた香織が、援護に向かおうとした時だった。

「お前達、その3人を逃がすなよ！！」

男達に囲まれて姿が見えなかったのか、突如聞こえた女の声に香織は驚いた表情で振り返った。そこに居たのは、この街を支配している夏希だった。

冷酷で手下を下僕のように扱い、歯向かう者は有無を言わず街から追放した。徒党を組み帝国さながらの集団を築くには、ある理由があった……。

「何あの子……コギャル？」

数十人の男達は一斉に3人に向かって走り出した時だった、下から突き上げるような大きな揺れが一同を襲う。余りの揺れの大きさに、地上にいる全員が地面に手をついた。

「じ、地震！？」

香織が叫んだ。しゃがみ込み、揺れが収まるのを待っている。

「ふふっ……そのまま動くんじゃないよ」

身動きが取れない連中に、洋子が襲いかかろうとしている。すると地響きが止み、地面が裂けるように割れ、そこから巨大なゴーレ

ムが姿を現した。その姿を見た一同は啞然としている。

「ゴーレム」 ユダヤ教の伝承に登場する自分で動く泥人形。

「グガゴ……ゴゴ……」

ゴーレムは唸り声をあげている。

「……（標的は誰？）」

夏希はゴーレムを眺めながら考えていると、洋子が仕掛けた。

「鎌鼬！！」

凄まじい風に乗った刃がゴーレムを襲った。だが、うつすらとした痕跡が残っただけだった。

ゴーレムは大きな手で土を掴み、宙にいる洋子目掛けて投げつけた。土の礫をまともに喰らった洋子は落下した。ゴーレムはゆっくりと洋子へ近づいて行く。

「ちよつと、助けなきゃ！！」

凜と香織がゴーレム立ち向かっていった。

「（【体技…聖拳】）二段突！！」

「能力」 急所を見極め、致命的な一撃を狙う。幼少の頃より叩き込まれた、老師直伝の変則空手である。

「火鳥扇！！」

香織の打撃、凜の火撃をもろに受けるが全く怯まない。ゴーレムは両腕を出鱈目に振り回し2人を弾き飛ばした。倒れ込む凜と香織だが、その一瞬の時間稼ぎのお陰で、洋子は振り下ろされる拳を間一髪で避け、再び宙へ浮かんだ。

「……（操っている何者かが近くにいます、どこ？）」

夏希は辺りを見回していると、ゴーレムは察知したかのように突進してきた。その隙に、洋子は姿を晦ました。

「うっ、お前達かかれ！！」

夏希の号令と共に一斉に襲い掛かる男達。しかし、あっけなく倒されゴーレムが素早い動きで襲ってきた。

「きゃあ!!」

かろうじて逃げるが徐々に追い詰められていく。凜と香織は動けないままだった。

第30話 奇怪な出来事 〈黄金の右腕〉

——渋谷区…某所——

夏希はいつの間にか袋小路に追い詰められていた。背後にはフェンス、目の前にはゴーレムがゆっくりと近づいて来ている。何やら覚悟を決めたのか、右手を上げ振り下ろそうとした時だった。

「呼んだかね？」

突然、頭上から聞こえた声に動きが止まる。恐る恐る振り返りフェンスの上を見上げると、背を向け仁王立ちしている何者かの姿があった。

「なんだコイツは!？」

夏希は嫌なアングルからその姿を見ているせいか、さっぱり訳が分からなくなっていた。

「……（あれ、どこかで見たような……）」

香織は立ち上がり、その姿を見て何かを思い出そうとしている。

「パンダマン!!!」

凜は何故か嬉しそうに見ている。するとパンダマンが振り向きながら語り始めた。

「俺の名は“パンダマン”。平和とパンダをこよなく愛する……ぐわっ（最後まで聞けよ!!!）」

ゴーレムの一撃を喰らいパンダマンはフェンスからぶっ飛んでいった。

「えー!! ……だ、大丈夫なの？」

香織は飛ばされたパンダマンの姿を見て驚いている。状況は何も変わらず、夏希のピンチは続く。ゴーレムの振り上げた腕が襲ってきた。

「ぬんっ!! （なんてパワーだ）……早く……逃げろ」

パンダマンは鬼熊に変身し両腕で受け止めていた。ゴーレムのパ

ワーに全身がプルプルと震えている。夏希は咄嗟に逃げ出した。

「ぐがぁー!!」

叫び声と同時に、パンダマンはゴーレムの腕を弾き返した。

パンダマンとゴーレムの一身一体の攻防が続いている。見ている3人は各々考え事をしていた。

香織はそんなに遠い距離ではないし、『誠』を呼ぶか迷っている。夏希はパンダマンでは勝てないと思い、『麗』に連絡しようか迷っている。凜は先程から洋子の姿が見えない事に気づいた。

そんな3人を他所に、生身であるパンダマンに疲れの色が見え始めていた。

……ドウルルルルル。すると突然、更地に面した道路からエンジンを切る音が聞こえた。道路には1台のトラックが停車している。

「……（吾駒運送!!）」

香織はトラックに書かれている会社名を見て目を見開いた。以前、『誠』から聞いたトラック運転手の話を思い出したからだ。トラックから降りてきた男は、一直線にゴーレムに向かっている。その姿を3人は無言のまま見つめていた。

「（【潜在…シヴァ】）……（唸れ黄金の右腕）」

「シヴァ」インド神話の破壊を司る神。

「能力」右腕のみに破壊的な力が宿る。黄金の右腕と恐れられている。

戦闘中にも係わらず、背後からの只ならぬ圧力を感じたパンダマンは思わず振り返った。パンダマンを通り過ぎ、煌々と輝いている右腕を振りぬいた。男の一撃にゴーレムは跡形も無く砕け散った。啞然とするその場にいる者達。

張り詰めた静けさの中、男は3人に振り向いた。

「化け物は退治した。もう大丈夫だ、安心しなお嬢ちゃん達……」

3人はあんたが化け物だよって言いたげな表情をしている。無視されたパンダマンは男に対して身構えていた。

「じゃーな。パンダマン……」

男はトラックに向かって歩きながらパンダマンに声を掛けた。そして、何事も無かったかのように去って行った。

走り去るトラックを見つめ、立ち尽くしているパンダマンに凜と香織が歩み寄った。

「ありがとう。パンダマン」

「……ああ、いつぞやのお嬢さんですね」

「あ、あの、パンダマンさん。あの人とはお知り合いですか？」

香織はトラック運転手の正体を確かめようと、勇気を振り絞って訪ねた。

「本物かどうかは判りませんが、『一鉄』かも……いや、きっと本人だろう……」

実際にパンダマンも一鉄とは面識がない。何故自分の事を知っているのか不思議でならなかった。

「……（まこっちゃんが出会ったおじさんって……）」

「……（あれが最強伝説の男……）」

夏希は会話を聞いていたのか、男の正体を知り何やら考えていた。

――翌日。

香織は、昨日の出来事から色々と調べて貰おうと、従兄弟の涼に電話をしている。

「もしもし、涼君」

「ゴーレム……ですか？」

涼は鎌鼬の事件を思い浮かべ不吉な予感を抱いていた。

「最近になって奇怪な事件が多発しているみたいですので、気を付けて下さいね」

「えっ、奇怪な事件って……」

とりあえず調べると言い残し、涼は電話を切った。

第31話 縁結び（巫女）

——練馬区…Bar Change——

翔はBar Changeを訪れていた。カウンター席に座り、終始ニタニタしながら忙しそうに働いている径子を見ている。そして、径子が通りかかった時に声を掛けた。

「……おい。何かいい事でもあっただろ？」

翔の問いかけに微笑みだけを残し、径子は何も言わず立ち去って行った。その態度にやはり何かあったと確信した翔は、カウンターでシェイカーを振っている昌也を見た。

「あー昌也！！ 何か隠してるだろ？」

「は？ 隠すって、何をだよ……」

翔は径子を指差した。

「見ろよあの顔。笑顔を通り越して気持ち悪いーぞ！！ 親友として隠し事は良くないと思うぞ……」

「別に隠しごとじゃないけどよ……」

この前のデートで、縁結びで有名な巫女に会いに行った事を話した。

「へっ……それだけ？」

「ああ、それだけだ。わざわざ伝えることじゃないだろ」

昌也はグラスにカクテルを注いでいる。

「本当か？ その後2人でイチャイチャしてたんじゃない？」

勝手な想像を膨らまし、1人興奮している。

「それはいつもだ。問題ない……」

昌也は誇らしげに言い切った。翔は羨ましい様な悔しい様な表情を浮かべていた。

「でもちよっと喜びすぎじゃねーか？」

「女性にとって好きな人と縁結びが出来たって事はだな……」

縁結びについて話し始めた。翔はぽかーんとした表情をしている。

「まったく……お前も同じ気持ちにさせてやろうか？」

「は？」

昌也は急にニタニタした表情で翔を見た。

「もしも、『凜』ちゃんと縁結びしてもらえたらどーよ……」

「……ぐうおおーああ!!」

突拍子もない雄叫びに、ビクつとする店内の従業員と客。

「お、おい落ち着け。例えばの話だ……」

妄想して興奮状態の翔を必死でなだめている。

「……で、それはどこにあるんだ？」

「え、えーとだな……」

翔のギラついた目に押され、昌也はしょうがなく場所と神社の名前を伝えた。

「なあ翔、まだそこは早すぎるんじゃない……」

翔は話を無視してあつという間に飛び出して行った。

「あつ翔さん、御代……」

——品川区…某所——

瞳はトレーディングを終え、ティータイムを満喫していた。手にしていたファッション雑誌を眺めてると、広告欄に目が止まった。そして、自然と携帯に手が伸びている。

「お久しぶりね……」

「やあ瞳さん。トレードは順調ですか？」

「そうね順調よ。今度顔出しに行こうと思っているんだけど……」

「ありがとうございます。楽しみにしていますよ」

電話の相手は麗だった。意気投合したあの日以来、お互いを認め合いながらも日々の生活に忙殺され、すれ違いが続いていた。

「それよりね、縁結びで有名な巫女の話って知ってる？」

「ええ、知ってますよ……（先週行った妖気を感じる巫女の事かな？）」

「ねえ、それでね……あのね……」

電話越しだが、自分から誘う事を躊躇している様子が窺えた。麗は女心を察し口を開く。

「一緒に行きましょう。いつ、お時間とれるんですか？」

「え、え」と……」

2人の恋が、再び動き出そうとしていた。

——文京区…音郷道場——

自分の部屋で、ゴロゴロしながら暇を持て余している香織。ふと携帯が目に入った。

「あつもしもし、凜さん……」

渋谷に買い物に行った時の話に始まり、先日『誠』とのデートで縁結びをしてきた話をしている。

「いいなあ、香織ちゃん」

「あれ！？ 凜さんって、いい人いないんですか？」

「うーん……」

凜の脳裏に『翔』が一瞬よぎった。

「ああーやっぱりいるんですね。凜さん綺麗だし可愛いもん」

「え、えっ……いないよ」

「あーはいはい、わかりましたあー」

香織はそう言いながら、神社の場所を教えている。

「だから本当にいないんだって……」

「一応ですよ一応。今後の為にね……」

その後も、2人の楽しい時間は続いていた。

第32話 縁結び　く九尾の狐く

——荒川区…尾日神社——

月夜の晩、神社の離れにある古びた風呂場で入浴中の巫女。名前は結衣、19歳。ここ尾日神社の神主の娘である。

おっとりとした性格で、相手に癒しを与える。仕来たりを忠実に守ることから、日々入浴を覗かれる悲劇に付き纏われている。

「……（もおくまた覗かれてる……）」

神聖な大木から造られたと伝えられている風呂場は、建て替えることは勿論、隙間を修理する事すら許されていない。そんな事情を知ってか知らぬか、風呂場を囲むように覗き魔が出没する日々が続いていた。

「（しょうがない人達だなあ）お仕置きですよ……（【操術…九尾の狐】）」

く九尾の狐く　三大悪妖怪に数えられる狐の妖怪。9本の尻尾をもち、万単位の年月を生きた古狐が化生したものだと言われている。

Ⅱ能力Ⅱ　九尾の狐を召喚して操る。地上戦、空中戦での戦闘が可能。

「うわぁー！！……ひいー！！」

風呂場の外に九尾の狐を出現させ、驚かせて追い払う日々。今日こそはと、着衣を済ませた結衣は、父親の元へ向かった。

「ねえお父さん。お風呂場どうにかなりませんか？」

結衣は迷惑顔で父親に話をしている。

「結衣、昔から言っているが……」

あの風呂場は神聖なる場所で、代々聖女しか利用がゆるされない仕来たりを伝える。その話を何度も聞かされて育った結衣はうんざりしていた。

「もう、いいです。私に何かあっても知りませんからね……」

「ははは、大丈夫だよ。その為に九尾の狐がいるんじゃないか……」
拗ねた面持ちで話している結衣に、父親はあっけらかんと話をした。

「……じゃー以前行った靖国神社のお手伝いは大丈夫なの？」

「あれも代々の行いだから大丈夫だよ」

この家の代々の仕来たりだと結衣は諦めたようだ。

「おやすみなさい」

「はい、おやすみ」

第33話 傭兵（亀柴商事）

——豊島区・西口公園——

——5年前に遡る。

サンシャインを象徴とする都内有数の賑やかな街、池袋。昼間は多くの人々が集い活気に溢れているが、ネオンが灯り始める頃になるとある集団が姿を現す。そう、ここを聖地と崇めるギャング達である。常に争いが絶えず、数ある集団の中からアッシュとロデオの2大勢力が生き残り、一触即発の状態が続いていた。

そんな時代の真っ只中に、20歳を迎えた直人の姿があった。この男、能天気で無類の女好きだが、仕事に関しては恐ろしく真面目である。

夜空には満月が光り輝き、いつものように園内をふらふらと歩き回りながらターゲットを探していた。

「やっぱりここにいたよ。……あの女好きは病気だな」

直人は園内を歩き交う女性に、片っ端から声をかけている。その姿を遠目に見ているアッシュのメンバーは呆れた表情をしていた。すると、直人の呼びかけに女性が立ち止まる姿が見えた。

「とてもステキに輝いているお月様だね。けど、君の瞳の輝きには……」

直人は上空の月を眺め、女性を口説いていた。そして、女性に振り向き決め台詞を放った。しかし、すでにそこには女性の姿は無く、アッシュのメンバーが立っていた。

「うおっ!! ……なんでお前達がいるんだよ」

「……またフラれましたね」

ニヤニヤと直人を見ているアッシュのメンバー。

「ふん、なんか用か? ……どーせいつもの話だろ」

「お願いしますよ。今夜にでも衝突しそうな雰囲気なんです……」
ロデオとの抗争の際に、何とか力を貸して欲しいと頼み込んでい

る。

「だ・か・ら、俺はどっちにもつかねーから勝手に争ってろよ」

昨日、ロデオのメンバーが誘いに来た事を伝え、アッシュのメンバーにも諦めるように伝えた。

「あっそうだ、お前らのリーダーにも伝えておけ……」

抗争の際に、俺の女達を巻き込んだり手を出したら容赦しない旨を告げた。

「えー！！ 誰が直人さんの女か判りませんよ。……無茶苦茶だ」

「バーカ。全ての女に手を出さなきゃいいんだよ」

肩を落とし、アッシュのメンバーは帰って行った。直人も帰ろうと歩き始めた時だった、携帯が鳴っている。

「……わかった。これから向かう」

——豊島区…某所——

直人は池袋No. 1のキャバクラ嬢である亜紀の家に到着した。
一応、この2人は恋人同士である。

「どうしたんだ急に……」

直人がリビングのソファに腰掛けるなり、亜紀はアッシュとロデオの争いについて話し始めた。

「最近、客足が悪くて困ってるのよね……」

遠まわしに争いを仲裁して欲しいと聞こえた。直人は両方のリーダーと面識があり、嫌な奴らではない事を知っている。

「まあ信念の違いじゃねーのかな。それはそれで大事な事なんだか……」

すると亜紀は、この抗争と関係があるのか因果関係がはっきりと解らないと前置きをして、気がかりな話を始めた。

「亀柴商事って知ってる？ 最近業績が絶好調でイケイケな……」
直人は経済の話などさっぱりだった。首を横に振り、亜紀の話を聞いている。

「その会社の人達がね最近よく飲みに来てくれてるんだけど……」
「……けど？」

「この豊島区を西の拠点にするって話を聞いてね……」
「……どーゆー意味だ？」

気になった亜紀は、経済に精通している他の客から亀柴商事について聞いた話を話した。

「“国取り”だと？」

「その社長、経済界ではそう呼ばれているんだって」
表向きは財力でこの国を支配しようとしている事、一方裏では多くの傭兵を抱え込んでいるという噂。

「……抗争の裏を引いているって事か？」

亜紀は静かに頷いた。

「情報ありがとよ。ちょっくら行ってくる……」
軽くキスを交わし、直人は家を飛び出した。

第34話 傭兵（国取り）

——南池袋公園——

日付が変わり、深夜の南池袋公園。アッシュのリーダー栄光とロデオのリーダー康利が、両軍の先頭で睨み合っている。お互いの背後には、いきり立ちながら戦闘の合図を待つ120名程のギャングが対峙していた。大通りから不意に聞こえたクラクションを合図に、一斉に怒号を上げ大乱闘が始まった。

その頃、直人は街中を歩き回り両軍のメンバーを捜していた。一向に姿が見えない事から、戦闘の開始を確信し必死になってその場所を追った。

「ちっ、アイツら何処でおっぱじめてやがるんだ……」

大乱闘も30分が経過すると、負傷者・逃亡者などの影響で両軍合わせて40名程になっていた。

「そろそろか……」

物陰に潜んでいる男が、作戦決行の連絡をし始めた。

「武蔵、本当に10名で足りるのか？」

「社長、相変わらず心配性ですね。本来なら俺1人でも十分ですよ……」

「くっくくく、頼もしいな。今後の重要な拠点だ、お前に全権を任せる!!」

亀柴商事の侵略が、今、始まろうとしていた時だった。直人は公園に到着し、両軍の真っ只中へ突っ込んで行った。

「おい、お前らちょっと待った!!」

栄光と康利は直人の存在に気がついた。

「ちよ、ちよっと直人さん。今更、何スカ？」

鼻血塗れの栄光が不満気な表情を浮かべている。

「すみませんが、もう止まりませんよ……」

冷静に康利は状況を見ていた。

行くところまで行ってしまい火がついた2人には、直人は只の邪魔者でしかなかった。周りでは怒号が飛び交っている。

「お前達の言い分は解るが、ちよつと話を聞け……」

直人は亀柴商事の存在。豊島区が拠点として狙われている事を伝えた。

「本当だとしても、今更引けないっすよ」

「何か、証拠はあるんですか？」

あまりにも推測の部分が多すぎる為、それ以上、直人は何も言えなくなっていた。周囲で怒号や血しぶきが飛び散る中、無言で立ち尽くしている。すると、八方から襲いかかってくる何者かの集団が見えた。

「何だコイツらは!？」

康利は驚愕の表情で身構えている。その集団は、争っていた残りのギャングを簡単にあしらひ直人・栄光・康利を取り囲んだ。

「上等だ!!」

栄光が勇んで立ち向かうが、疲れきった体では余りにも無力だった。あっさりと伸され、その場に倒れた。

「直人さん。……こいつらの事ですか？」

「まだわかんねえが、敵なのは確かだな……」

完全に取り囲まれた直人と康利。ふと直人を見た康利は咄嗟に伏せた。直人の全身がほのかに青く光り手に狼牙棒が現れているのが見えたからだった。

「じゃー何者なのか聞いてみるか……無双・円陣乱舞!!」

直人は取り囲んでいた傭兵らしき者達を一瞬にして殲滅した。康利は立ち上がり、周りに倒れ込んでいる相手を見ている。すると、拍手をしながら1人の男が近づいて来た。

「すばらしいね、君。ぜひ俺の部下にならないか……」

完全に直人を見下しながら、ゆっくり歩いて来る男は、武蔵と名乗った。直人は頭にきている様子を見せているが、相手から漂うただならぬ雰囲気を感じていた。

「まっ、お手合わせしてみれば分かるか？」

武蔵は、腰に携えている2本の刀を抜き構えている。直人は狼牙棒で果敢に打ち合いに行くが、その攻撃は軽くないなされた。打ち合うこと10合、武蔵の渾身の一刀が狼牙棒を真つ二つに切り裂いた。

「直人さん!!」

康利は不安な表情で叫んだ。こんなに一方的に押し込まれている直人の姿を見るのは、初めてだった。

「くっそお……（まだまだ修行が足んねえな）」

「勝負あり……かな？」

武蔵は勝利を確信したのか、満面の笑みを浮かべている。

「けっ、もう勝った気でいやがる。こいつを防げたら好きにしま……
…無双・国士!!」

直人の全身がほのかに青く光り両手にトンファーが現れた。自らが弾丸のようになって武蔵へ突っ込んで行く。凄まじいスピードからか、直人を包む大気が赤く見える。武蔵は、瞬時に受けの構えで対応するが、その威力に上空へと弾き飛ばされた。

「……か、勝ったのか？」

康利は起き上がる様子がない武蔵を見て、口ずさんだ。そして、ふと直人を見ると片膝をつき蹲っていた。

「ふう……ぐっ!!」

直人は戦闘が終わり、気を抜いたと同時に体中が痛む事に気が付いた。知らぬ間に、全身の数十箇所を斬りつけられていたようだ。

しかし、何はともあれこの街を守れた事に安堵の表情を浮かべると、上空から凄まじい音が聞こえ突如ヘリコプターが姿を現した。そして、ゆっくりと着陸を始めている。

「ちっ、今度はなんだ？」

直人と康利がヘリコプターを見ていると、細身の男と厳つい男が姿を現し、こちらに向かって来た。

「くっくくっ、いやぁ欲しい。君が欲しくなったよ!!」

細身の男が気味悪く笑いながら近づいて来る。その後ろに控えている護衛らしき男からは、只ならぬ雰囲気を感じる。直人の前で立ち止まった細身の男は、丁寧の名刺を差し出した。

「（亀柴商事 代表取締役社長）……“国取り”か!？」

「これはこれは、よくくご存知なようで……清と申します」

直人は差し出された名刺を見て驚いた。やはり、亀柴商事による侵略は本当だったのだ。

「武蔵相手にあんな戦闘を見させられたら……惚れちゃってもしょうがないよね？」

「それじゃー契約に移ろうか……」

清は、この場にいる全員を殺して拠点を築くか、亀柴商事の傭兵となって“国取り”の一躍を担うのか、直人に迫った。

「くっくくっ、迷うことはないと思うよ」

そう言って清は右腕を上げ合図を送った。姿こそ見えないが、公園を囲むようにそこら中から殺気を感じる。

「まっ、この男だけで十分だけどね。念には念を……」

後ろに控えている護衛らしき男の肩に手を置き、不敵な笑みを浮かべている。

「……わかった」

清は手を叩き子供のように大喜びしている。同時に園内を囲んでいた殺気が消えた。

「本気ですか、直人さん!!」

康利は悲しげな表情で直人の姿を見た。

「俺はこの街が大好きだ。しかし、今の力じゃここを守りきれない。」

こうするしかないんだ……」

康利に背中を見せたまま、直人は呟いた。

「清さんよお！！ 俺が傭兵となるからには報酬は高くつくぜ」

「くっくくくつ、金なんぞいくらでもある」

清は更に高笑いをしている。

「とりあえず、こいつらを全員病院へ……」

直人は園内に倒れこんでいる者全てに対し、要求をした。清の合図と共に、大勢の者が姿を現し負傷者を運んでいく。その統制のとれた動きに、康利は愕然とした。

「お前を得た事は、拠点を築いた事に等しい。祝杯だっ！！ ……」
いくぞ直人」

清に肩を抱かれヘリコプターに乗り込んで行く姿を、康利は無言のまま見ている事しか出来なかった。

“傭兵” 直人の誕生である。

第35話 潜在能力（決意）

——中野区…堀空道場——

——3年前に遡る。

高校最期の年、誠は入学と同時に始めた地元の空手道場で仲間と共に汗を流していた。小さな道場ではあるが地区予選を勝ち抜き、やっとの思いで掴んだ個人・団体戦での全国大会への切符。大会も1週間後に迫り、気持ちの高ぶりは最高潮を迎えていた。

「誠君、もうこの時期の稽古は程ほどにして下さいね」

誠の気持ちを察したのか、堀空師範はやさしく抑制した。この堀空師範という人物、大らかな性格で町内会会長も務めるという地域ではちよつとした有名人である。

そして、子供の頃から賢く誠実な少年であった誠もまた、近所で評判のちよつとした有名人であった。

そんな師範が子供の頃から見続けている誠という青年は、仲間からの信頼も非常に厚かった。

——中野区…某所——

日が沈み始め、早めの帰宅をしている会社員の姿が見える。稽古を終えた誠は、団体戦に出場する4人の仲間と明かりが灯り始めた街灯の下を歩いていた。

色々な雑談を交わしながら歩いているが、やはり、大会の話題になると皆が熱の入った口調へと変わっていった。

そんな中、誠は自販機を見つけ飲み物を買おうと集団から離れた時だった。背後から迫るワンボックスカーが見え振り返った。目に映しだされる信じられない光景、その車は次々と仲間達をはねて電

柱に衝突した。大きな衝突音が物語るように車は大破し煙を上げている。

「……だ、大丈夫か!？」

誠は蹲っている仲間達に駆け寄った。全員意識はあるものの、呻き声を上げて苦しんでいる。すぐに衝突音を聞いた近所の住人が集まり、救急車を呼んでくれたようだ。しばらくして救急車が到着し、誠も便乗する。サイレンの鳴り響く中、皆の無事を祈りながら頭の片隅で大会の事を考えていた。

病院に到着し運ばれていく仲間達。その姿を見届け、すぐに師範に連絡をして院内のソファーに腰掛けた。しばらくすると、師範が姿を現し神妙な面持ちで事故の話をしていると、仲間の父兄の姿が見え、師範と何やら話始めている。精密検査を除いて診察が終了したのか、医師が姿を現し師範や父兄と何やら話をしている。幸いにも重傷者はいなかったようだ。その後、警察の事情聴取の際に、車の運転手は即死だった事を知らされた。誠は突然の出来事に疲れた表情を浮かべている。全てを済ませ、師範に付き添われて帰宅の途についた。

——中野区…堀空道場——

翌日、学校を終えた誠は冴えない表情で道場に顔を出した。そして、ありえない光景に目を疑った。昨日、運ばれた4人の姿がそこにあっただからだ。

「お、お前ら。……大丈夫なのか？」

「鍛え方が違うんだよ……」

いたる箇所には包帯が巻かれている。仲間達の表情からは、どう見ても痩せ我慢をしているとしか思えなかったが、何としても大会に出場するという気迫が感じられた。

すると奥の部屋から現れた師範に、誠は呼ばれた。

「誠君、団体戦の出場を取り下げるつもりなんだが……」

予想していた通りの話だった。誠は致し方ないと諦める気持ちと、それでも出場するという仲間達の強い気持ちが入り乱れていた。

「……皆の気持ちはどうなんですか？」

「何が何でも出場すると伝えて来たが……」

師範としての管理責任から、やはり出場させるべきではないと考えていた。立場的に考えれば当たり前前の判断だが、努力してきた弟子達の気持ちもどうか酌んであげたいと悩んでいる様子が窺えた。そんな姿を見た誠は、意を決して口を開いた。

「師範、僕を全試合先鋒としてもらえないでしょうか？」

「何だって！？ 大会のルールは知っていますよね……」

5人1組で構成され、勝ち残りで3勝したチームが勝利という変則ルール。相手との相性や強さによって、毎度戦略を考えなければ優勝できない仕組みの大会。

「僕は彼らと一緒に優勝したいんです！！」

共に汗を流し稽古に励んだ仲間達との最後の大会。出場したくてもそれが出来なくなってしまった仲間達の気持ちを痛いほど分かっている。

「だが、君は個人戦も出場するだろう。仮に優勝したとして……」

師範はトーナメント表を見ながら試合数を計算している。

「個人戦の優勝まで6戦……その後の団体戦は……」

師範が再び計算していると、稽古場から4人が入って来た。

「全てを成し遂げるには、24戦を戦うことになりますよ」

「はい、覚悟は出来ています！！」

「師範、僕達からお願います！！」

仲間達は誠の敗北はチームの敗北である事を理解し、戦力にはないが一番近くで応援したいと師範に訴えた。

「……分かりました、皆で頑張りますよ。誠君、相手は全国の強者です。くれぐれも無理をしてはいけませんよ」

「はい！！」

仲間達は残り短い大会までの時間を、治療に当て静養した。誠は皆の気持ちを一身に背負い稽古に励んだ。

第36話 潜在能力（モンチュ）

——足立区…東京武道館——

——大会当日。

開会式を終えた堀空道場の一同は、観客席に座り先に行われている高校女子の部を観戦していた。

一同は試合を見る限り、小柄な女の子が躍動感溢れる動きで勝ち進んでいく姿が印象に残っていた。そして、決勝戦にその子が姿を現すと、応援団なのであろうか熱烈な叫び声が館内に響き渡った。

「香織！！ 頑張れえーえー！！」

おそらく師範と思われる男性の、ひときわ目立つ応援。声は裏返えり、もはや奇声に変わっている。香織は恥ずかしそうに顔を赤らめていた。

「……（まったくお父さんったら、恥ずかしいからやめてよ……）」
試合開始を告げる声と共に、相手に突進していく香織。決勝まで力を温存していたのであろうか、まるでスピードが違っていた。相手は躍動感溢れるその動きについていけず、あっさりと試合は終わってしまった。

会場の観客には桁違いの香織の強さより、師範と思われる男性のひときわ目立つ応援が、印象に残るような決勝戦だった。

仲間達が、香織を絶賛する会話をしている中、誠は無言のまま、香織を見続け何かを感じていた。

「次はお前の出番だな。個人戦、頑張れよ！！」

興奮冷めやらぬ試合会場を無言で見続けている誠の肩を、仲間達は軽く叩き勇気付けた。

「ありがとう。……先ずは初戦が大事！！」

誠は立ち上がり両手で頬を叩き気合を入れ、試合会場へと向かつ

て行った。

しばらくして個人戦が始る。初戦こそ緊張からか肩で息をして動きは硬かったが、誠の強さはずば抜けていた。皆の心配を他所に、あっさりと優勝してしまった。

その強さが目立ったのか、会場の大勢から祝福されている。手を振り頭を下げて挨拶し、仲間達の元へ向かった。

「優勝、おめでとう!!」

選手の控え室としても利用されている通路で、堀空師範を先頭に仲間達に祝福されている。すると、背の低い細身の老人が誠達の元へ歩み寄って来た。誠の目には、70歳前後に見える老人。その後ろには、香織、師範と思われる男性、そして、おそらく小学生と思われる男の子が立っていた。

老人に気づいた堀空師範は、深々と頭を下げて挨拶をしている。

「これはどうも、音郷さん。ご無沙汰しております」

何やら老人と面識があるようだ。それを見た誠と仲間達も、老人に深々と頭を下げて挨拶をした。

「その青年、よく目を見せておくれ……」

誠を見て老人は手招きをしている。不思議に思った誠だが、老人に歩み寄りがんで顔を近づけた。

「……（潜在能力を引き出してやろうかの）」

すると老人は、目にも留まらぬ速さで誠の眉間に軽い一撃を加えた。周囲を含め、本人ですら何をされたのか分からなかった。誠は老人と向き合いながら、その背後から送られる香織の視線を感じていた。

誠は体を起こし香織を見つめている。誠と香織が初めて出会った瞬間だった。すると、アナウンスが聞こえ団体戦の出場者が呼ばれている。

「師範、それでは行ってきます!!」

誠は仲間と共に師範に挨拶をして、集合同所へと向かって行った。その弟子達の姿を、師範は笑顔で見送っている。

誠達の姿が見えなくなってすぐの事だった、大会関係者が音郷師範の元へやって来た。とても大慌てしている様子だ。小学生の男の子は、何やら笑いを堪えている。

「ちょっと、ちょっと音郷さん。もう勘弁して下さいよ!!」

「えっ? 何の事ですか……」

関係者に対して、音郷師範はすっとぼけた顔をしている、香織は咄嗟に背を向けた。

「娘さん……中学生ですよね?」

高校生の大会に中学生が出場した違反を告げる関係者。音郷師範は出場規定年齢より、下なんだから大丈夫だと自分勝手に反論している。案の定、大会規定により香織の失格、優勝取り下げ処分となった。

「もう、音郷さんの所だから今回は大目に見ますけど……今後は本当に勘弁して下さいよ」

「ひえっひえっひえっ」

老人は関係者を見て笑っていた。老人に一礼した関係者は、優勝トロフィーを受け取り、そそくさと大会本部へ帰って行った。

「ほらあーやっぱりばれたでしょ、お父さん」

香織は軽蔑の目で父親を見た。音郷師範は、修行の一環だと苦し紛れの言い訳をして、あたふたしている。その姿を、小学生の男の子は楽しそうに眺めていた。そんな2人を他所に、老人は堀空師範に尋ねた。

「堀空君、あの青年を音郷に預けんか?」

あまりに唐突な話に、香織と音郷師範は目を見開き老人を振り向いた。

「私も、そうお願いしたいと思っておりました」

これ以上、誠に教える事が無い事を師範は痛感していた。又それ以上に、彼に何かを感じていた。

「あの青年にはな……【モンチュ】の潜在を感じるんじゃない」

「モンチュ」 古代エジプトの戦神。

「能力」 戦闘の天才。見た目に変化は伴わないが、いかなる戦闘にも対応出来る器用さを兼ね備える。

「モンチュと申されますと……戦闘の天才と崇められているエジプト神の事ですか？」

「ふむ、彼はこの国にとって必要な人物に成り得るはずじゃ……」

堀空師範は何かを感じてはいたが、それ程までと驚いている。小学生の男の子もまた、初対面の誠に何かを感じていた。

「この子にとっても良い刺激となるじやろう」

そう言いながら、香織のお尻を撫でている。

「あっ、こらっ……お爺ちゃん!!」

怒った香織に追いかけられている老人。その追いかけてこられている小学生の男の子は、声を出して笑っていた。

そんな時、会場から大きな歓声上がるのが聞こえた。誠は、見事先鋒として全ての試合を勝ち抜き優勝を果たしたようだ。個人・団体戦のW優勝に加え、1人で全戦全勝。前代未聞の快挙を成し遂げた。

その夜に行なわれた祝賀会で、誠は師範から老人の話を聞かされた。今まで育ててくれた師範に深々と頭を下げて感謝を述べ、音郷道場にお世話になる決意をしたのだった。

第37話 皆殺伝説 〱大工の魂〱

――目黒区・碑天建設――

夏の盛りが過ぎたとはいえ、残暑厳しいこの季節。昼食を終えた弟子達は、会社の4階にある応接室から道路を見下ろして暇を持て余していた。日傘をさして歩いている人の姿などを眺めながら溜め息をついている。では頭領の信人はというと、弟子達の不安を他所に応接室のソファで一升瓶を片手に歌っていた。

「大工一筋37年〱 バール持たせりゃ天下一品〱 人情・心情当たり前〱 それが俺達大工の魂〱。はあ〱……仕事がねえ……うい」

この業界に限らず、大不況の大波が全国をのみこんでいた時代。中小零細企業は行き場を失い、大企業でさえリストラ無しでは生き残れない状況下に陥っている。そして、国そのものが疲弊しきっていた。そんな失望感溢れる時代に、一筋の光を照らし続ける亀柴商事が人心を引きつけていた。

「……寝ちゃったよ。伝説の大工も仕事がなくっちゃなあ〱」

ソファ一に歩み寄り気持ちよさそうに寝ている信人の寝顔を、弟子達は囲むようにして見ていた。そして、働き所を失い途方に暮れていると来客のベルが鳴った。

「こんにちは。信さんいます？」

「あつ、仁さん。こんにちは、どうぞ……」

仁は、弟子達に案内され応接室に入ると大きないびきが聞こえてきた。ソファ一に向かい、信人の気持ちよさそうな寝顔を見ている。

「あーあー、この人は昼間っから……」

弟子達が不安そうな表情をしていた理由が分かった気がしていた。そして、弟子達に振り向き、一時的だがヒートで活躍の場を与える

と誘っている。

「お前ら体が鈍るのが嫌なら、運動しに杉並区に来いよ。……昼寝に邪魔だし、起こすのも気が引けるから帰るな」

仁は、起きたらよろしく伝えておいてくれと言い残して帰った。

ここ最近、めっきりと仕事が無い弟子達は、仁の誘いに甘えようか、いやしかし危険が隣り合わせだなどと盛り上がっている。

「そーいやー仁さんって【百式】の使い手なんだよな？」

「あつ俺、見た事あるぜ!! 目茶苦茶強えーよ」

「ああ、あの神速の蹴はヤバイね」

暇を持て余し、血気盛んな弟子達の会話は終わらない。

「でもよお、ここだけの話だぞ……仁さんって負けた事あるんだって」

一瞬、場が凍りついた。

「……で、誰にだよ？」

「まさか……この人にじゃねーよな？」

「あははは、ま、まさか……こんな飲兵衛なんか……うわあ!!」
すっかり泥酔していると思いこんでいた弟子達の背後で、飛び出さんばかりの目を見開いて仁王立ちしている信人の姿があった。

「……飲兵衛で悪うござんしたね……うい」

拳骨をチラつかせる信人に、弟子達は平謝りしている。

「冗談だよ。お前ら……興味があるのか？」

一斉に目を輝かせてうなづく弟子達の表情に、親心なのか若さへの嫉妬なのか少し羨ましく感じていた。

「仁が負けた相手ってのは、“皆殺”の『翔』だ!!」

一同が口を空け、啞然としている。しかしある者は、何かに疑問をもった表情をしていた。しばらくして、ざわつき始める弟子達。

「でも、……仁さんと『翔』は友人じゃないんですか？」

「ああ、そうらしいな。今はな……」

信人は仁から聞いた話であり、又、仁も『翔』の親友の『昌也』から聞いた話になる事を弟子達に伝え、語り始めた。

第38話 皆殺伝説（序章）

——練馬区・某所——

——14年前に遡る。

西の空が赤く染まり、鴉の鳴き声が聞こえている。

学生服を着こなし付き合い始めて半年を迎えた翔と優香は、いつものように小さな公園のベンチに座っていた。学校から程近いその公園には鮮やかな青紫色のアジサイが咲き乱れ、奥には無人のブランコとジャングルジムが寂しそうに夕日に照らされている。そんな景色を眺めながら、学校での出来事や友人の話など他愛も無い会話をしていると、不意に真剣な面持ちで優香は翔を見つめた。

「翔、大好きよ……」

あまりに唐突な出来事に翔は驚いた表情をしているが、その後に見せた優しい笑顔が何よりも好きだった。

「俺もだよ」

優香の目を見つめ真剣に答えた。顔は強張り引きつっている。苦手な笑顔を作ろうとしたらしい。そんな精一杯の姿を見た優香はそっとキスをした。そして、ベンチの背に寄りかかりながら薄暗い空を見上げている。翔はキスの余韻に浸りながら、優香を見つめていた。

「大人になった翔ってどんなだろ？」

「変わらない気がするなあ」

「そうだよ。どんな事があっても変わらないでね……」

薄暗い空を見上げている優香の表情が、何かいつもと違う感じがしていた。そんな表情を見つめていた翔に、優香は振り向き笑顔で問いかけた。

「ねえ。将来の夢ってなーに？」

「夢！？ うーん……優香はあるのか？」

「えーとね。日本中を旅してみたいの……」

少し恥ずかしそうだったが、無邪気な笑顔で優香は答えた。翔は、その笑顔が何よりも大好きで無言のまま見とれている。

「もうっ……ちよっと、何か言ってよ!!」

優香は顔を赤らめてふくれっ面をしていた。

「あ、ああ……一緒に行くかな。俺が優香の足になるよ……」

「……うん、ありがとう」

至福の時間が流れている。2人の会話はその後も続いているが、優香が足元に視線を落とし、寂しげな表情を時折見せている事が翔は気がかりだった。

「今日はもう帰るね……」

「家まで送るよ」

「ありがとう、今日は大丈夫だよ」

「う、うん。じゃあ、また明日……」

優香は笑顔でキスをしてゆっくりとベンチから立ち上がり、両足を引きずりながら家の方向へと歩き始めている。翔はキスの余韻に浸りながら、公園の出入り口まで見送った。

――翌日。

給食を終えても学校に姿を現さない優香。いつもの通院が長引いて遅れているのだろうと、裏庭にあるいつものたまり場で翔は思っ

ていた。昼休みも終わり、午後の授業の時に発表された先生の言葉に、翔は耳を疑った。

「て、転校だ?!?」

翔の時間が止まった。しかし、すぐに明らかな嘘だと思い教室を飛び出して、優香の家へと向かった。その姿を見ていた昌也も、すぐに後を追った。

優香が住んでいる2階建ての4世帯が住める小さなアパートに到着した翔は、1階にある玄関のドアノブを無理やり回して勝手に進入しようとしたが鍵がかかっていて開かない。

追いついた昌也は、冷静に郵便ポストの表札に目をやると、そこにはすでに取り外されているのだろうか、すでに何も無かった。そして、カーテンが無くなっている窓から中を覗きこむと、予想していたとおり綺麗に部屋がかたづけられている。玄関口で動揺を押して殺すかのように、ドアノブを握りしめたままうつむいている翔の肩に手をやって、昌也は翔を落ち着かせた。

「なあ、昌也……何故なんだ、どうしてなんだ!?!」

激しく動揺している翔に、親の都合とはいえ昌也は掛ける言葉が見つからなかった。

「いや、これはおかしい……何かがおかしいぞ。アイツは……アイツは絶対に隠すような事はしない。きっと何か事件に巻き込まれたんだ!?!」

全身を震わせながら叫んだ。そして、顔を上げた翔の目は、遠くを見ている。

「お、おい、翔!?! しっかりしろ!?!」

「アイツは、優香は……両足が不自由なんだぞ!?! きっと何処かで身動きが取れなくなつて助けを待っているはずだ……」

翔は昌也の手を跳ね除け、何処とも無く走り出して行ってしまった。

昌也は、思い当たる場所を駆け回り翔を捜していた。気がつく、道沿いに見える街灯が明かりを灯し始めている。そんな時、ふと学校から程近い小さな公園を思い出し急いで向かった。

案の定、公園のベンチに座り両足の膝にもたれ掛かる様にして、両腕で顔を塞ぎうつむいている翔の姿を発見した。昌也は園内に咲いているアジサイの花を横目に、ゆっくりと翔の元へ向かった。

「……どうだ？　気は晴れたのか？」

「……………」

泣き声を押し殺しているのだろうか、翔の体は小刻みに震えている。昌也はそっと隣に座り、翔の背中を見ていた。

「お前の気持ちは痛い程分かるけどよ、どうしようもない事ってあると思う。優香ちゃんはお前にだけは伝えたかったと思うけど、ずっと我慢してたんじゃないのかな」

「……………」

翔は、終始うつむいたまま両腕で顔を塞いでいるが、一緒になつて涙を流しながら話してくれている昌也の涙声に、小さな呻き声を上げて全身を振るわせた。

「俺達が大人になる前に……その前には必ず連絡をくれると思うけど、それより先に居所を突き止めてさっ、会いに行つて驚かそうぜ！！」

昌也の励ましに、翔はうつむいたまま何度も何度もうなずいていた。

そんな時だった、突如数台と思われるバイクのエンジン音が鳴り響き、園内に進入してくる数台の単車が見えた。

第39話 皆殺伝説 く旗揚げく

——練馬区…某所——

「ちっ、こんな時に……暴走族か？」

数台の単車が2人の座るベンチを囲むように停車した。昌也は立ち上がり様子を窺っている。後方で掲げられている暴走族の旗には【皆殺】の文字が見えていた。

「……（皆殺だと、どここの連中だ？）」

全員がバンダナで口元を覆い隠している。単車に跨っている者、降りて昌也を見ている者など、その数8名。すると1人の男が、昌也に向かって歩き出した。昌也はその姿を見て、身構えている。

「昌也、そう身構えるなよ……」

聞き覚えのある声だ。バンダナを外した男の顔を見た昌也は、少しホッとした表情へと変わった。その男は、翔達の1つ先輩である番長の岡崎だったからだ。

この岡崎という人物、隣町の中学校に占領されていたこの小さな公園を解放し、その支配に終止符を打った地域最強と言われた男である。そして、その背後にはバンダナを付けてはいるものの、四天王と呼ばれている佐賀、磯辺、林田、広瀬の姿が見えた。

「岡崎さん、驚かさないで下さいよ。どうしたんですか？」

偉大な先輩である事を認めてはいるものの、昌也はこの連中にあまり好意を持っていなかった。

「こいつらから話を聞いてよ……」

後方から顔を出してきたのは、翔達の同級生である赤城・山野の2人だった。岡崎の腰ぎんちゃくとして暴力を振るっているような奴等で、他の一般生徒達からも嫌われている男達だ。そして、調子に乗りすぎた彼等は何度か翔にも絡んで、こっぴどくやられた経験

を持つ。

「大切な彼女が行方不明なんだってな？」

「行方不明ではないですよ……それにもう、その話は済みましたから。すいませんが、あんまり俺達に係わらないでもらえませんか？」

「あーあー、そうだったのか。そうか、そうか……」

岡崎は、優香の何か情報を知っている様な顔つきで話してくる。

「……何か知っているんですか？」

「その前に、とりあえず紹介しとくぜ……」

岡崎と並列した前方で黙ってその様子を窺っていた男が、バンダナを取り腰掛けていた単車から昌也の前に歩み寄って来た。その男の顔を見た昌也は、目を見開いて驚いた表情をしている。南側にある地域で最強と言われていた相庭だったからだ。岡崎の世代では、北の岡崎・南の相庭として2強時代が続いていた。その2人が手を組んだ事に、昌也は内心穏やかではいらなかった。

「よろしく、昌也君だっけ。俺が聞いた、今朝の話なんだが……」
三原台方面の暴走族がこの地域の障害を抱えている女を攫った、という情報を聞いた話しだった。

「……それで？」

「昌也、頭の良いお前ならもう察しているだろう……」

岡崎は、傘下に加われと言わんばかりの表情を浮かべて昌也を見ている。

「冗談でしょ。そんな不確かな情報で伸れる訳ないですよ」

「お前ら他に当てはないんだろ？ 伸るか反るかは自由だが……」

昌也は全く相手にしていなかった。現実には、優香の家を訪れており引越しをした事実を目の当たりにしている事に、事件性は無いと確信していたからだ。

「わかった。加わろう……」

昌也はすぐに翔を振り向いた。立ち上がっていた翔は、もうすで

に目が血走り気合が満ち溢れている。

「お、おい、翔！　よく考えろ、優香ちゃんな訳がないだろうが……」

昌也は翔の前に立ちはだかり、必死に落ち着かせようとしている。
「俺は、何でもいいから……一刻も早く、情報が欲しい」

やはり泣いていたのだろうか、まぶたを腫らし真っ赤に充血した翔の目はずっと遠くを見たままだ。限りなく可能性が小さいとしても、じっとしているよりは気分が晴れるのだろうか。血気盛んに、今すぐにでも乗り込もうと岡崎に伝えた。

「おお、翔、頼もしいねえ。期待しているぜ……昌也、お前はどうするんだ？」

「……わかりました、行きますよ」

不確かな情報がきつかけとなり【皆殺】の伝説が……幕を開けた。

第40話 皆殺伝説 〔三原台連合〕

――練馬区…某所――

夜を迎えて、辺り一面を暗闇が覆いつくしている。大通りに面した街灯や店の明かりが道路を照らす中、走り出した【皆殺】。四天王が代わる代わる信号止めをしながら、三原台へと向かっている。並列して走る岡崎・相庭の単車に翔・昌也を乗せ、その後方に旗を掲げている山野を乗せた赤城の単車がついてきていた。

「三原台に着く前に、お前らに話しておく……」

相庭は、翔と昌也に区内の暴走族事情を説明し始めた。

当時、練馬区の暴走族を牛耳っていたのが三原台連合であり、三原台を本拠とした連合総長・谷山がいる【不死】を中心に10チームが参加しているとの事だった。総勢150〜200名と言われている。

「おそらく、この連合のどっかのチームだろう……」

相庭の話を昌也は無言のまま聞いていた。翔は、ただ前方だけを見据えたまま微動だにしていなかった。

「相庭、いきなり【不死】を叩くってのも面白くねーか？」

岡崎はいきり立ちながら、アクセルをグイグイと回してエンジンをふかしている。後方にいる、赤城と山野は表情を見るからにかなりビビッていた。

「さあ〜てお前ら、連合の支配地域に入ったぞ……」

「四天王、警戒を怠るな……!」

危険区域に突入し、相庭と岡崎の目の色が変わった。しばらく暴走していると、前方を走っている族らしき集団を林田が発見する。

「あの旗は……【不死】だ!!」

「おいおい、いきなりかよ……」

頭の片隅にはあったものの、連合本隊との遭遇を目の当たりにした【皆殺】のメンバーは、さすがに驚いた表情をしている。

「どうすんだ岡崎、突っ込むのか？」

相庭の問いに、四天王が一斉に岡崎を見て指示を待っている。

「当たり前だ!! 派手に暴れて名前を売るぜ!!」

「よっしゃー、いくぜ!!」

いち早く動き出した相庭を先頭に、【不死】の後方より一斉に突っ込んでいく【皆殺】。

「おい、後方から何か来てるぞ……」

「どっか連合のチームだろ、ほっとけ……」

「ん? ……【皆殺】だど!? 敵襲だー!!」

その叫び声と同時に、危険を察知した【不死】の特攻部隊が切り返して【皆殺】に向かって突っ込んでいった。

「うおっ!? 奴等、切り返してきやがった……」

急襲するつもりだったのか、迅速な【不死】特攻部隊の動きに相庭は驚いていた。

「いいかお前ら、他の連合が到着する前に決着をつけるぞ!!」

岡崎の叫び声と共に、【皆殺】と【不死】特攻部隊の衝突が始まった。その後方では、総勢40名程の【不死】本隊が臨戦体勢に入っていた。

昌也は立ち向かってくる敵のみを、得意の合気道でいなし上手く立ち回っている。冷静に、辺りを見回し仲間の動きを見ていた。やはり、岡崎と相庭の強さは本物だった。次から次へと【不死】のメンバーを圧倒している。そして、四天王もいい勝負をしている。腰ぎんちゃくの赤城と山野は、旗を守りながら逃げるので手一杯だった。そして、翔はというと、怒りに任せて身近な敵から蹴散らして

いた。

しばらく大乱闘が続いていると、相庭が岡崎の元へ向かって走り出した。

「岡崎、四方八方から爆音が聞こえてきたぞ!!」

「ちつきしょう、もう来やがったか……」

おそらく連絡を受けたであろう、連合のチームが集結し始めている。とりあえず、十分な成果をあげていると見た岡崎から撤退命令が飛んだ。その頃、翔と昌也は【不死】本隊の奥まで進んでいた。

「翔!! あそこで踏ん返り返っている奴が総長なんじゃねーか？」

昌也が指差している方向に、親衛隊と思われる集団に囲まれている男の姿が見えた。2人はその男目掛けて一直線に突っ込み、次々と敵を蹴散らしながらなんとか辿り着いた。

「おい、優香を返せ!!」

いきり立って叫ぶ翔を横目に、谷山は、周りの親衛隊に静止をかけて話を聞いている。

「……何を言ってやがんだこのガキは？　しかし、ここまで辿り着いた事は褒めてやるよ」

「野郎、しらばっくれやがって。後悔すんなよ……」

「はっ……ガキが、俺に勝てると思ってんのか？」

谷山は余裕の笑みを浮かべて、翔を見下している。そして、翔が仕掛けようとした時だった、後方から単車に乗りつけた【皆殺】メンバーが到着した。

「お前ら!!　今日はここまでだ……退くぞ!!」

周囲から聞こえてくる凄まじい数の単車の爆音から、連合のチームがすぐ近くまで迫ってきているのが分かった。

「ちっ、面は覚えたからな……覚悟しとけよ!!」

昌也は、谷山の顔をずっと睨み続けている翔を引っ張って、急いで単車に乗り込んだ。その後、追撃してくる連中をなんとか殲滅し、【皆殺】は地元へと向かった。

その後、現場では【不死】のメンバーだけが倒れており、動ける者はほんの数名だけだった。事実上の壊滅と言ってもいい被害を受けていた。

地元へ向かい走行中の【皆殺】。各々が大小の傷を負ってはいたものの、全員無事に帰還していた。

「ちつきしょう。あともう少しだったのにな……」

「あれだけ叩けば十分だろ？」

相庭の冷めやらぬ言葉に、四天王が答えていた。そして、岡崎から次の集合の話が伝えられる。

「明日休みを取って、明後日に集合だ。それでいいな……翔？」

「……………」

翔はさっきの谷山の顔、そして、優香の事で頭がいっぱいになっている様子だ。その姿を見た昌也が、代わりに頷いていた。

第41話 皆殺伝説（覚醒）

——練馬区…某所——

翌日、学校に登校した昌也は少し後悔をしていた。それは、自分以外の【皆殺】メンバーが休んでいる事実を知ってしまったからだ。「……失敗した、俺も休めば良かったよ。今頃、全員疲れて寝てるんだろうなあー」

昌也は、机にもたれかかりながら、昼寝日和の空を眺めていた。そして、学校を終えた昌也は、その足で翔の家を訪れた。すると、母親に昨日から帰ってきてない事を知らされる。

「あ、あいつ……まさか!？」

嫌な予感がした昌也は急いで家に戻り、勝手に兄のバイクを走らせて三原台へと向かった。

——その夜。

三原台にある50台ほどの駐車スペースを兼ね備えたファミリールレストランで、三原台連合の幹部会が緊急で行われていた。10チーム80名程が集まり、幹部以外の連中がファミリールレストランの駐車場を占領している光景は、まさに異様だった。

総長の谷山から、昨日起こった事件の詳細を伝えられた連合の幹部達。意気盛んに決着をつけるべきだと主張する者や冷静に対処するべきと主張する者、【皆殺】の破壊力に臆している者などバラバラの状態となっていた。

そんな最中、一般客を装った1人の男が幹部達がいるテーブルの前に現れた。

「やっと見つけたぜ……」

翔はひらすら谷山だけを睨みつけていた。他の幹部達は、無言の

まま翔を見ている。

「まさか……お前1人で来たのか？」

「……そうだ、話し合いで解決できればそれでいい」

「聞いたか、話し合いだってよぉ」

自分の腕っ節だけを信じ、話し合いなどは対極にいる世界。翔の話聞いた幹部達は、テーブルを叩いたり腹を抱えながら大笑いしている。

「お前らには用はねえんだよ……」

そう言って、翔は行方不明の女性を探しており、その情報がここにあると聞いた事を伝えた。すると、更に幹部達は大笑いして翔を見ている。

「1人で来た勇気を称えて正直に答えてやるよ。残念だが、そんな話はまったく無いな……」

谷山の答えに、翔は目を瞑りひと息ついた。当てにしていた情報を失い、もう何もかもがどうでもよくなってしまっていた。そして、無言のまま立ち去ろうとすると、幹部達に取り囲まれて行く手を塞がれていた。

「おい、お前の用件は済んだかもしれんが……俺達にはまだあるんだよ」

【皆殺】の一員として事を起こしてしまった以上、しょうがない結末だった。谷山の合図と共に、幹部達に駐車場へと連行されて袋叩きにされている。多勢に無勢、それ以上に今の翔には戦う意味すら分からなくなっていた。うつ伏せになって無抵抗のまま倒れている翔を、数え切れないほどの足が踏みつけている。体の感覚が無くなりかけ、遠ざかっていく意識に心地よさすら覚え始めた。そして、この境地に訪れる周囲の声がやけに良く聞こえる現象を感じていた。

「谷山さん、見せしめだ。このガキを血祭りに上げて、その【皆殺】って連中のいる場所へ捨ててこよーぜ……」

「馬鹿、何言ってるんだよ。こんなペーペー殺したって意味ないだろ

……ねえ、谷山さん……」

「谷山さん、さっき女を捜してるとか言っていましたけど……このガキも不幸な奴っすよね……」

「……（女？ ゆ、優香……。くっ、死んじまったら会いに行けねえじゃねーかよ……。うう、俺は一体何をしてるんだ？）」

翔は駐車場のアスファルトの上に、血だらけのまま放置されてる。それを囲むようにして、連合の下っ端達が会話をしていた。もうろうとした意識の中で、ふと優香の笑顔が翔の脳裏を過ぎった瞬間だった、全身が震え始め心の奥底からなのか、頭の奥底からなのか、何処からか分からない場所から何かが飛び出そうとしている感覚に襲われた。

「ぐっ、があ……。な、何だこの感覚は？」

「お、おい。コイツ、全身を震わせてけいれんしているぞ。し、死ぬのかな……。なんかやべえんじゃねえか？ ちょ、ちょっとお前、幹部の人達を呼んで来いよ……」

息も絶え絶えにぐったりしていた翔が、急に全身を震わせ始めた事に恐怖を覚え、駐車場に屯していた連中がファミリーレストランにいる幹部達の元へと走り出した。

「うおお……」

全身血だらけで腫れあがった顔、どこを見ているのか分からない目のままゆっくりと立ち上がる翔の姿に、駆けつけた谷山を始めとする幹部達の表情が凍てついた。黒いオーラが全身を覆い、解き放たれる殺気。翔の中に眠っていた【潜在…修羅】が、目覚めた瞬間だった。

その頃、昌也は翔を捜して三原台付近を当ても無くバイクを走らせ続けていた。一向にそれらしい情報を何も得られずに、ガソリンスタンドで給油をしていると、ふと先程から不自然に思うことがあった。

「さっきから、やけに救急車のサイレンが多いな……」

はっとした表情に変わり、昌也はすぐに給油を終えて救急車のサイレンを追った。

行き着いた先のファミリーレストランには、すでに30台以上の救急車が停車しており、テープが一面に張り巡らされた現場を数十台のパトカーが埋め尽くしている。辺り一帯を覆うように光輝いている赤い光りが、大事件である事を物語っていた。そして、それを取り囲むように周囲にはすでに、報道陣や野次馬などでごった返していて騒然としていた。

「な、なにがあっただ？」

昌也は近くの電柱に登り現場を覗き込むと、大勢の暴走族が倒れている姿が見える。よく見ると、いくつかの旗が散らばっており、その中に【不死】の旗があることに気がついた。

「ま、まさか……翔の仕業なのか？」

昌也は疑心暗鬼に陥りながらもバイクに跨って現場を離れ、翔の身を案じて再び近辺を捜し始めた。

第42話 皆殺伝説（百式）

——練馬区…石神井公園——

——数時間後。

昌也は石神井公園のベンチに横たわっている翔の姿を発見した。その姿を見て、昌也の疲労は一瞬にしてふっ飛んだ。大きな池と、この園内でも咲いているアジサイの花を横目に、昌也はゆっくりと翔の元へと歩き出した。

自分に向かってくる足音に気がついたのか、翔は体を起こして昌也の方向を見ている。

「……ま、昌也か？」

返り血を池で洗ったのであろうか、翔は全身びしょ濡れで髪から雫が垂れていた。

「……ふう、無事で良かった。大丈夫か？」

翔は昌也の顔を見て安心したのであろうか、涙目になって事の経緯を話し始めた。

「優香ちゃん的笑顔が過ぎてから……力が溢れ出した？」

「ああ、それ以降の記憶があまりない……」

再び気がついた時には、その場にいた連中が全員倒れていたらしい。

「うーん、俗に言うブチ切れた感じなんだろうな……」

しばらく、2人の会話が続けていると、右側から4人の男達の姿が見えた。そして、その声は段々と近づいてくる。

「お前ら、ニュース速報だけじゃ詳細が分からないだろ？」

「仁、言いたい事は分かるが、現場に行っても何も見せてくれないぜ……」

「そうだよ、三原台連合なんてどうだっていいよ。俺は奴等が先日

もめたって噂の【皆殺】の方が気になるけどな……」

「今川、それは調査中だ。この事件に関与してる気がするし、まだ現場周辺にいるかもしれんしな……」

「仁、現場に居たらどうすんだよ？ まあ居たら居たらで、この溝口様が返り討ちにしてやるけどなっ！！」

翔達の1コ年上の仁。当時は、杉並区のある中学の番長をしていた。後に治安部隊ヒートの1〜3番隊隊長となる、松原・溝口・今川を引き連れてニュース速報が流れた現場を見に行こうとしていた。

2人が腰掛けているベンチに仁達が差し掛かった時だった、翔と目が合った仁は立ち止まった。

「おい、仁。急に立ち止まるなよ……どうしたんだ？」

お互いに、いつまで経っても目線を外さない。只ならぬ雰囲気を感じ、昌也が立ち上がるのと同時に、対抗して溝口が昌也の前に立ちはだかった。

「（こいつの目の奥に悪魔を感じる）……犯人はお前か？」

あまりに唐突な質問に、さすがの3人も驚いて仁を見た。

「……だとしたら何だ？」

突如、仁の蹴りが翔を襲う。紙一重で交わした翔だが、ベンチの背もたれがへし折れている。それを見た翔と昌也は、仁から距離を置くように離れて身構えた。

「おい、仁！！ 一体どうしたんだよ？」

松原・溝口・今川の3人は、何かいつもと違う仁に気づいたのか必死に止めにかかった。普段、冷静な仁が取り乱している事や自分から戦闘を仕掛けることがない事、そして何より、神速の蹴を避けられた事に驚いている。

「不意打ちとは気に入らないな……相手なら俺がするぜ」

昌也は翔をかばって前に出た。

「こ、こいつは……今のうちに倒しておくべきなんだ」

仁の口から出た信じられない言葉に、戸惑っている3人。

「ご指名だ……昌也、どいてくれ」

「お前、大丈夫なのか？」

心配そうに翔を見ているが、渋々昌也は退いた。仁の妙な言いがかりから対峙する事になった2人。そして、火蓋が切られた。

上段・中段・下段と色々と変化をつけて襲ってくる仁の神速の蹴りに、防戦一方の翔。反撃の糸口すら見えない。次第に、いくつかの蹴りをまともに喰らい始める。

「ぐっ!!」

意を決して反撃する打撃も、簡単に蹴りにあしらわれている。そして、翔の胸元に仁の渾身の一撃がまともに入った。仰け反ったまま翔はふっ飛ばされ、倒れたまま一向に起き上がってこない。

「翔!!」

すぐさま翔に駆け寄り、しゃがみ込んで昌也は声を掛けていた。

「……翔だと？ おい、そいつは【皆殺】の翔なのか？」

突然の仁の問いに、昌也は振り返り睨みながら頷いた。すでに、仁は正気に戻っているのだろうか、優しい表情に変わっていた。そして、深々と頭を下げて昌也の元に歩み寄り話し始めた。松原・溝口・今川の3人も、倒れている翔を取り囲むように昌也の元へ歩み寄った。

仁は、翔の目を見ていたら妙な気分に襲われ我を忘れてしまった事を詫び、相庭の話を始めた。昌也はしゃがみ込んだまま、その話を無言で聞いている。

話を聞いていると、仁は相庭と知り合いとの事だった。そして、岡崎と組んだ相庭は、翔を利用して練馬区を支配しようとしていた事や、背後から三原台連合を急襲して欲しい要請があった事などだった。

真剣に話してくれている仁の表情を見ていた昌也は、少しずつ信用し始めたのであろうか、仁に質問を投げかけた。

「あの、仁さん。連合に攫われた女性の話などは……」

昌也は、事の経緯を説明し何か知っていないのか尋ねた。

「すまん。その話は初耳だ……」

今日出会ったばかりなのに、翔の境遇を聞いて仁は力になりたいと言ってくれた。そして、周りを囲むように聞いていた3人も、神妙な面持ちで翔の境遇を聞いていた。

「仁、なんかコイツ……ちょっと可哀想な奴だな。俺達も何かあったら力を貸すぜ……」

倒れている翔を囲むように、5人はお互いを見て頷いていた。そんな時だった、翔は意識を取り戻したのであろうか無言のまま立ち上がった。そして、それにつられて、昌也も立ち上がる。

「おっ、大丈夫なのか？」

立ち上がった翔の表情を、そっと覗き込んだ昌也は目を疑った。明らかに別人の表情をしており、目は何処を見えているかさえ分らなかった。その異様な表情に、仁達も少しだが後ずさりをしていった。

「邪魔をするな……」

翔が小さく呟いた瞬間だった、黒いオーラが全身を覆い解き放たれる殺気に、その場にいた全員の表情が変わった。次の瞬間、昌也を始めとする仁・松原・溝口・今川の体が宙に浮いていた。各々が翔を中心として、円を描くようにふっ飛んで倒れた。物凄いスピードだったからなのか、あまりの一瞬の出来事に、全員が何が起きたのか把握出来なかった。

昌也・松原・溝口・今川は、意識はあるものの倒れたまま動けない。その中で、左腕を押さえて、苦痛の表情を浮かべているが、仁は辛うじて立ち上がった。その動きに照準を合わせたのであろうか、

翔が仁に向かって突進していく。

「ちょっと待て、翔！！ もう終わったんだ」

昌也の声も虚しく、翔の勢いは止まらない。仁は、構えたまま翔を待ち受けている体勢をとっていた。

「も、もしかして……これがさっきアイツが言っていた、力が溢れ出すってことなのか？」

昌也は、翔を眺めながら先程ベンチで話していた事を思い出していた。仁は、正面から向かってくる翔を見据えて何かを決心した様な表情をしている。

「凄まじい殺気だな……（この暴走を止めるにはこれしかないか……）
…【体技…百式】」

（能力） 瞬時に神速の蹴りを百発繰り出す大技。

仁は最後の力を振り絞って百式を放った。翔も真正面から恐ろしいスピードで打撃を繰り出して、神速の蹴りを弾く。だが、次第に対応が遅れ始めた翔はまともに喰らい始め、その場に膝から崩れ落ちた。そして、仁も力尽きたのか、仰向けになって倒れた。

辺り一帯が薄明かりの中、静寂に包まれている。何かが落ちてきているのであろうか、池の水が小さく音をたてていた。

しばらくして、ゆっくりと体を起こした昌也は翔と仁の元へ歩き始めた。眠るようにうつ伏せになって倒れている翔。そして、仁は無言のまま夜空を見ていた。昌也の背後からは、松原・溝口・今川の3人も同じように歩み寄ってきていた。

「あなた達も大丈夫ですか？」

昌也は、その3人にそっと問いかけた。

「ああ、ありがとよ……なんとか大丈夫だ。しかし、さっきのあれは何だったんだ？ とてつもない殺気を感じたぜ……」

昌也を見ている3人が、お互いに顔を見合わせながら答えていた。そして、先程の翔のバケモノ状態について聞いている。

「俺も、今始めて見ました……」

翔の背中を見ながら、昌也はそっと答えた。

「仁、大丈夫か？ 久しぶりに見たぜ、百式……」

「な、なんとかな……（軸足と股関節が痛え）」

仁達の会話を聞きながら昌也はその場に座り込み、先程目の当たりにした翔のバケモノ状態の話をし始めた。

「ブチ切れたただけとは思えなかったがな……。」

松原は、冷静に記憶を辿っている。

「ああ、何か悪魔が宿っていた感じがしたぜ」

溝口は、異様な形相を思い浮かべていた。

「俺は一瞬だが……死を感じたぞ」

今川は、顔を歪ませていた。

「上手く言えないが、まさに【修羅】そのものだった……」

両手を後ろについて上半身だけを起こして座っている仁は、正面から対峙した感想をそう例えていた。

「……（【修羅】ねえ）」

昌也はそんな事を思いながら、気を失ってから一向に起きてこない翔を見ていた。

池から聞こえてくる水の音が激しさを増している。各々を伝う雨水と地面から弾かれる泥水が、全員の体から赤黒いそれを洗い流している様だった。

「仁さん、色々な情報をありがとうございました」

「昌也、いつでも連絡してくれよ」

昌也は、仁に兄のバイクを任せてタクシーに翔を担ぎ込んで帰って行った。

「いい仲間が出来たな……俺たちも帰ろう」

頼まれたバイクを押しながら、仁達も地元へ帰って行った。

翔を家に届け、自宅に着いた昌也。タクシー代の件は両親に叱られ、バイクの件では兄からこっぴどくしばかれた。

第43話 皆殺伝説（終焉）

——水久保公園——

仁との戦闘から4日目、学校を終えた翔と昌也は学校から程近い小さな公園のベンチに座っていた。目の前に見えるジャングルジムでは、数人の小学生が遊んでいる姿が見える。翔の体調もほぼ全開している様子だ。あの日の出来事や、報復を恐れた岡崎達が翌日から逃亡していた事、そして、一番重要な優香の情報が全く無くなってしまった事などを話していた。

「そうか、俺の中にそんな力が潜在していたとはな……」

「後で調べたけどさ、あの仁って人は杉並区じゃそーとー有名なんだとよ」

終始、うつむきながら元気がない翔を昌也は心配そうに見ていた。「おい、翔。元気だせよ……優香ちゃんが事件に巻き込まれていないことが分かっただけでも良かったじゃねーか」

「……ああ、そうだな。必ず居所を突き止めて、俺は会いに行くぞ」持ち上げた翔の顔には、少しだが生気が戻っているように見えた。

梅雨の中休み、雲の隙間からうつすらと差し込む日差しをベンチの背もたれにもたれ掛かりながら、2人は無言で眺めていた。

しばらくすると、そんな2人の元へ赤城と山野が姿を現した。翔と昌也は、無言で2人を見ている。この2人、岡崎に見放されて逃亡せずに残っていたようだ。そして、腰ぎんちゃくだった彼等が、翔を利用する計画を知っている訳は無く、ある意味同じ被害者なのかもしれないと昌也は思っていた。

「どうしたんだ……何か用か？」

「【皆殺】が現れたぞ……和光を占領し、朝霞方面に進行している

らしい」

昌也の問いに、山野が答えている。翔と昌也は顔を見合わせて、逃亡だけならまだしも、更に侵略を繰り返している事に呆れ顔をしている。

「懲りない奴らだなあ……どうすんだ翔。興味は無いが、終止符を打ちに行くか？」

「ああ、そうだな。……俺達の手で、この悪夢を終わらせよう」

翔と昌也は、赤城から借りた單車に乗り込んで公園を後にした。

——水久保公園。

【皆殺】が朝霞攻略の拠点として利用していた場所。占領した和光の兵隊を吸収し、陣を張っている。陣内で横になってくつろいでいる相庭が、地図を眺めながら戦略を練っている岡崎に問いかけた。「まだ朝霞を占領できないのか？」

「お前は黙ってろ。和光のように簡単にはいかんだろ……」

吸収した和光の残党と共に、四天王を前面に押し出して朝霞を侵略させていた。

「しょうがねえ、一旦立て直すか。……四天王を呼び戻せ!!」

「あーあー、やっぱり戦略なんて向いてないんだよ。俺たちが出張って終わらせようぜ!!」

この頃から岡崎と相庭の考え方の違いが現れ始めていた。しばらくして、四天王が拠点に戻り、岡崎は新しい戦略を練り始めている。それを横目に、相庭は暇を持て余しているのか、園内へ散歩しに離れて行ってしまった。

相庭は園内をふらふらと歩き回り、今にも降り出しそうなぶ厚い雲を見上げていた。日も沈み始めているせいか、辺り一面がやけに暗く感じる。

「何だかとても久しぶりに感じますね……」

身近で聞こえた声に、相庭は思わず振り向いた。目の前には、翔と昌也がいた。

「ちっ、テメエーらか……翔、あのニュースは見たぜ。俺は全身鳥肌立っちゃったよ」

対峙している相庭の只ならぬ空気に、周囲にいた和光の残党達が近づいてきた。そんな事は御構い無しに、翔はゆっくりと相庭に向かって歩き出した。

「ん？ 相庭は何処に行ったんだ？」

「どうせ散歩か何かでしょう。暇を持て余してましたからね……」

岡崎の問いに、四天王が答えている。地図を囲むように、戦略を練っている岡崎達は後方が騒がしくなっている事に全く気がつかなかった。

「あんたが仕掛け人なんだってな……とりあえず、終止符を打たせてもらうぜ。うおお……（我に眠りし修羅よ、今……目覚めよ）」

悪魔の形相に黒いオーラが全身を覆っている。解き放たれる殺気に、相庭は圧倒され後ずさりして身構えている。そして、相庭の両腕でガードしている上から、翔の一撃が炸裂した。相庭は白目をむきながら静かに膝から崩れ落ちた。

周りにいた和光の残党達は、あまりに一瞬の出来事に啞然としている。そして、その光景を見ていた連中は騒ぎ声を上げて逃げた。

後方での騒ぎに気がついた岡崎と四天王は、急いでその場に駆けつけた。すると、目の前にいる翔と昌也の姿を見て驚き、更に、翔の足元に倒れている相庭の姿を見て絶句している。

「翔、強くなったじゃねーか……」

岡崎が顔を引きつらせながら話している。四天王は、臨戦体勢で身構えていた。

「お前との縁に、終止符を打たせてもらおうぞ……」

火蓋が切られ、岡崎と四天王、そして和光の残党達が奇声を上げて向かってくる。翔と昌也も気合を入れて立ち向かう。【皆殺】同士の内紛が始まった。

やはり、翔の強さはずば抜けている。時間と共に四天王が崩れ和光の残党達が倒れ、岡崎は追い詰められていった。

すると、何処からか翔を呼ぶ声が聞こえている。翔と昌也は戦闘を中断し、その声の方向へ振り返った。そこには、単車に跨った山野の姿が見える。岡崎にとっては好機到来、その一瞬の隙について逃げだした。そして、その姿を見ていた和光の残党達も一緒になって逃げ出している。

「あつ、待てコラ!!」

「翔、もういいよほっとけ。それよりどうしたんだ……」

翔と昌也は、山野に向かって歩き出した。すると、山野の後ろには同級生の弘美が乗っている姿が見えた。

「あれ？ 弘美じゃねーか……どうしたんだ？」

「翔、落ち着いて聞いてね。優香の事が分かったの……」

「おう、引越し先が分かったのか？」

「あのね、病気で……亡くなったって……」

その場の時が止まった。そして、昌也はすぐに翔の顔を見ると、瞬きもせずは無表情のまま立ち尽くしている。弘美は、そのまま話し続けた。

「お母さんには、絶対に内緒にしていなさいって言われたんだけど……」

優香の母親と弘美の母親が友人であり、最初は弘美にも内緒だと言われていた事、そして、最近の翔達を心配して情報を集めている姿を見た母親が教えてくれた事を伝えている。

「……（さ、最悪な結末だ……）」

昌也はそう思いながら目を閉じた。

「……嘘だ……嘘だあ！！」

両手で顔を覆って下を向き、周囲に憚ることなく全身を震わせながら翔は泣きじゃくっている。前日まで一緒に居た翔。死に至る程の、病気の兆候すらみられなかった。翔に悟られる事がないように、毅然とした態度で接していた優香の姿を思い浮かべていた。

その姿を見ている弘美も一緒になって泣いている。

「弘美、こんな危険な場所にまで伝えに来てくれてありがとう……」
お礼を言う昌也の目にも、涙が溢れ頬を伝っていた。

結成から1週間足らずで、練馬区・和光・朝霞と怒涛の進撃。そして、突然の消滅。憶測が憶測を呼び、【皆殺】は伝説となった。
語られぬ真実と共に……。

第44話 妖刀 くホスト狩りく

――新宿区・歌舞伎町――

――7年前に遡る。

今や歌舞伎町で、不動のNo.1ホストの地位を確固たるものになっている麗。その彼が、まだ四天王と呼ばれていた時代である。

歌舞伎町の治安は乱れに乱れ、ヤクザの抗争が絶え間なく続いていた。日本一の繁華街として知られているこの街は、日本で最も治安の悪い街として、不名誉なニュースが連日のように流されていた。均衡を保ちながら息を潜めていたヤクザが、表舞台に解き放たれている。次第にその抗争は、各々の資金源であるホストに向けられ、ついにはホスト狩りへと姿を変えていった。そして、渦中の麗を巻き込み大事件へと発展するのであった。

――デュアルコア。

連日のニュースの影響なのであろうか、歌舞伎町から人影が消えていた。

「ああ、この調子じゃー今日はお茶引き確定だな」

「なに言ってるんだよ、お前はいつものことだろ……」

店内で暇を持て余しているホストが、ソファでくつろぎながら溜め息をついている。ホスト狩りが続く中、オーナー命令でキャッチに出る事を許されていない。

店内には、麗の客が数名いる程度で華やかな世界とは信じ難い光景が広がっていた。こんな日々が、もうすでに半年以上続いている。他店には、休業する店も出始め、デュアルコアも例外ではなかった。

――そんなある日の夜。

「みんな、よく来てくれた。ありがとう……」

老舗ホストクラブのオーナーである和磨の呼びかけで、歌舞伎町・四天王を含め、名だたるホストが集結していた。和磨という人物、ホスト暦20年のベテランで歌舞伎町No.1ホストの肩書きを持っている。さすがと言うべきなのであろうか、これだけのホストを集める顔の広さは勿論の事、彼を目標としているホストは数え切れない程だった。そして、その和磨がホスト狩りに対する一致団結の必要性があると訴えかけている。

しかし、そんな呼びかけも虚しく、自分達の親玉にあたるヤクザの抗争に首を突っ込むべきではないとの意見が大半を占めていた。実際、すでに数十名のホストが消息を絶っており、自己防衛で各々が対処するしかないとの結論へと議論は向かっている。そんな中、今までずっと口を閉ざしていた麗が和磨に問いかけた。

「抗争の中心にいる組を潰せば、なんとかなるんじゃないか？」

他の連中の議論が続く中、麗の話を聞いた和磨は意を決したように言い放った。

「みんな、聞いてくれ……抗争の中心と思われる組を潰して、以前の状態に戻すしか方法は無いと思うが、一緒に行く勇気がある奴は名乗り出てくれ!!」

全員が目を見開いて和磨を見ている。しばらく沈黙が続いたが、麗を含めた5人が名乗りを上げた。それを見た和磨は、笑みを浮かべている。

「よし、分かった。では、それ以外は解散してくれ。今日は本当にありがとう……」

和磨は再びお礼を言い、残った5人と打ち合わせを始めた。

第45話 妖刀 〔悲劇〕

翌日、麗はとある児童養護施設を訪れていた。都内から少し離れた郊外、緑に囲まれた大自然の中に寂しげにポツリと建てられているこの施設。彼は物心が付き始めた幼い頃に両親を亡くし、この施設に預けられて育った。デュアルコアの仲間や友人を含め、隠し通してきた唯一の過去である。

日常に忙殺されながらも時間が取ればこの施設に足を運び、弟分・妹分となる子供達をとてよく可愛がっていた。その昔、ある人物がこの施設を救ってくれたように……。自分もそんな人物でありたいと願い、寄付金を渡して施設継続に努めていた。

「ねえ、お兄ちゃん。次はいつ来るの？」

10歳になる妹分の夏希が、麗の上着の袖を引っ張りながら無邪気な笑顔で聞いている。

「近いうちにまた来るよ……」

麗は、夏希の頭を優しく撫でながら微笑みかっている。彼にとってこの施設は全ての原点であり、荒んでいく心を癒してくれるかけがえのない場所であった。

午後3時を回った頃、自宅に到着した麗は何気なくテレビをつけてソファ―に横たわっていた。目を瞑って束の間の休息に浸っていると、携帯が鳴り現実に呼び起こされる。

「麗！ た、大変な事態が起きた……」

明らかに慌てている口調で話す和磨の声に、電話越しにでもその様子が目に浮かぶ。麗は上半身を起こして煙草に火を点けた。和磨の話によると、組に乗り込むはずだった他の4人を含め、大勢のホストが消息を絶ったとの事だった。

「昨日の密会が、郷土組に漏れたのでしょうか？」

慌てながらも、そうとしか考えられないと和磨は言い切った。昨

日の密会では、郷土組が歌舞伎町に姿を現した時期と、抗争の時期が一致している事が話し合われ、ほぼ間違いないと思われていた。

「和磨さん、郷土組事務所の場所を教えてください……」

麗は、こうなつては単騎で乗り込むと伝えるが、それはあまりにも無謀だと和磨は説得している。

「麗、それにな郷土組には『以蔵』がいるんだぞ。それは、お前も知っているだろう……絶対に無茶だ!!」

郷土組で最強と言われている剣士で、数々の事件の首謀者である。そしてその名前は、歌舞伎町に知れ渡っていた。

そんな、会話の最中にふとテレビに目を向けると、そこに映し出されているニュースに、麗は言葉を失った。

「……児童養護施設……全焼!？」

「もしもし……おい……麗、聞こえているか?」

和磨の声に、麗は我に返った。

「す、すいません和磨さん。後で掛け直します……」

麗は電話を切るなり、すぐに施設に向かった。

——児童養護施設。

夕暮れ時、辺りは薄暗くなり始めている。麗は施設付近に到着し、信じたくなかった事実を目の当たりにして立ち尽くしている。無言のまま見つめるその先には、施設を囲むように造られている道路の街灯が明かりを灯し始め、その下にはパトカーや消防車、救急車などが道を占領していた。そして、施設からは次々と青いシートに包まれたそれが運び出されている。大きな黒いすすの塊からは、かすかな煙が立ち込めており救助を続けている消防隊員の姿が見えた。

今、目の前で見ている信じられない光景。自分を育ててくれた景色が消えた。静かに目を瞑る麗の中で、何かが音を立てた。まぶたの裏側に巡っている懐かしい想い出、貧しくても楽しかった日々、そして、先生と一緒に過ごした仲間、弟分や妹分の笑顔に、いつし

か目頭が熱くなっている。すると突然、腰元を誰かに抱きつかれ目を見開いた。

「お兄ちゃん……」

全身を震わせながら、麗のお腹に顔を押し付けて泣きじゃくっている夏希の姿が見える。全員の死を覚悟していた麗にとって、これ以上の喜びは無かった。そして、夏希をそっと抱きしめて悲しみを分かち合った。

しばらくして落ち着きを取り戻した夏希に、麗は何があったのか訪ねた。

「うん、あのね……」

この施設には、大昔からあるらしいのだが大きな蔵が少し離れた場所に1つ存在していた。そこは、施設長から決して近づいてはいけない場所として教えられており、更には立ち入り禁止の看板が掲げられている鉄格子がその蔵を囲っている。

夏希はそこに居て助かったと麗に伝えた。そして、施設に戻ると、大勢の怖そうな大人達に先生が囲まれていたのを見て怖くなって隠れていたことを話していた。それを聞いた麗は、驚いた表情で訪ねた。

「夏希、蔵がある事を知っていたか？」

夏希は下を向き、首を横に振っている。麗が帰った後に、先生達が話していた会話を聞いて蔵の存在を知り、探しに行ったとの事だった。

——話は更に6年前に遡る。

15歳を迎えた麗は、施設での生活を送っていた。好奇心旺盛でよく喧嘩ばかりしているような決して良い子ではなかったが、1人で何でもこなしてしまう器用な少年だった。

そんなある日、施設を抜け出して1人で辺りを散策していると、その大きな蔵を発見する。看板には立ち入り禁止の文字が見えたが、

それが逆に麗の好奇心を駆り立ててしまった。鉄格子を乗り越えて、蔵の入口の鍵を無理やり壊し中へ入っていくと、中央に1本の古びた刀だけが置かれているのが見えた。

大きな蔵であった事や鍵までかけられているので、大いに期待していた麗だったが、古びた刀しか無かった事にとっても残念そうな表情を浮かべていた。しかし、興味本位からなのか、刀を手にとって眺め、そして鞘から抜いた。その瞬間、その古びた刀は跡形も無く砕け散ってしまった。呆気にとられている麗の中で、何かが音を立っていた。

すると突然、背後から声が聞こえたので麗は恐る恐る振り向くと、当時の施設長が眉間にしわを寄せて無言で立っていた。しかし、施設長は怒鳴る気配もなく、とうとうこの日が来たのかと呟いて麗を見ている。

「麗君、その古びた刀は、抜いた者が呪われると伝えられている【妖刀】です……」

そして、それで得た力は諸刃の剣であり、決して多用してはいけないと、麗は何度も何度もいい聞かされた想い出があった。

その想い出の地に、夏希も麗と同じように興味本位で行ったのであろう、しかし、それが命を救う結果になった事に、麗は何かの存在を感じていた。そして、先生を囲んでいた大人達について訪ねる。「よく分からなかったけど、怖い顔の人達ばかりだった……」

おそらく直感でヤクザ絡みだろうと思ったが、施設の事情などは麗が知り得ない部分である。そして、夏希を警察に保護して貰おうとパトカーに目を向けた時だった。

「お兄ちゃん、あのね……その人達がね、『イゾウ』『イゾウ』って誰かを呼んでいたよ」

「……イゾウ？」

麗は再び夏希を抱擁して、警察に保護して貰うように伝える。パトカーに向かって歩き出した夏希の中で、何かが音を立てた。そし

て、それを見届けた麗は、すぐに歌舞伎町へと向かった。

第46話 妖刀（抛り所）

——新宿区…某所——

午後9時頃に、麗は自宅に到着した。帰宅途中に『夏希』から聞いたイゾウについてずっと考えていたが結論が出ず、ふとテレビのリモコンを手にした時に和磨と電話をしていた事を思い出した。そして、その事が郷土組の『以蔵』と一致する事に気がついた。

「和磨さん、先程は失礼しました……」

電話に応答した和磨に、途中で電話を切ってしまった事を詫びている。そして、郷土組に『以蔵』がいる事を再確認して、事務所の場所を教えて貰った。

「……本当に、お前1人で行くのか？ ……分かった、デュアルコアには俺から伝えておくからな」

和磨は、もうこれ以上何を言っても聞かないと判断したようだ。

麗はお礼を言って、郷土組事務所へと向かった。

——郷土組事務所。

麗は歌舞伎町の外れにある、3階建ての小さな雑居ビルに到着した。感情を一切も持たない、氷のように冷めた目でその雑居ビルを眺めている。そして、意を決して正面入口の見張り口と1階で賭博をしていた連中を殲滅し、2階へと駆け上がった。

扉を開けて中へ突入すると大広間らしきその部屋には、異変に気づいた20名程の郷土組が待ち構えていた。

「以蔵って奴はどいつだ？ 出て来い！！」

「指名される気分ってのも悪くねえな、ホストさん……」

刀を肩で担ぐ様に携え、奥からゆっくりと以蔵が姿を現した。

「ホスト狩の復讐のつもりかい？ 後悔すると思うよお……」

以蔵は余裕の笑みを浮かべ、トントンと刀で肩を叩いている。麗と以蔵が睨み合ってお互いの出方を窺っていたその時、背後の扉が開きナイフや鉄パイプを持った和磨と8名のホストが姿を現した。

「麗、大丈夫か？ まったく無茶しやがって……」

振り返る麗の氷のように冷めた目を見た和磨は一瞬たじろいだ、が、ゆっくりと麗に歩み寄った。

「和磨さん、あの以蔵って奴は俺に任せてください。他の連中を頼みます……」

そして麗が以蔵を振り向き、和磨に背中を見せた瞬間だった。和磨のナイフが無防備な背中を襲った。

「くっ!!」

とっさに何かを感じた麗は身をかわしたが、左肩を刺されうずくまった。

「悪いな、麗。お前で最後なんだよ、死んでくれ……」

ホスト狩を踏み絵とし、歌舞伎町から邪魔者を一掃する郷土組と和磨の戦略であり、麗の過去を調べあげて施設襲撃に至った。うずくまっている麗に、冥土の土産と言わんばかりに和磨は真実を語っている。

「もう、これで終わりでもいいか……妖刀・比叡!!（【呪縛…妖刀】）」

「妖刀」 滅亡していった名刀の呪い。意思を持ち、生き血を求める執念から使用者に力を貸すが諸刃の剣でもある。

||能力|| あらゆる名刀を呼び起こし一流の剣豪と化する。

うずくまっている麗の右手に、妖気を発し濃緑色に輝く妖刀が突如姿を現した。その光景に、一同が驚いた表情で麗を見ていた。そんな空気を他所に、麗は立ち上がるや否や、和磨の後ろにいるホスト達を一瞬にして斬り捨てた。そして、和磨の首に妖刀を突きつけている。

「とても残念です。俺にとってもあなたは憧れの人だった……」

「ひ、ひい！！ い、以蔵さん！！」

和磨の首は、叫びながら宙を舞っていた。刺された左肩の影響でまったく左腕は使い物にならず、右腕一本で妖刀を構え以蔵と向き合う麗だったが顔色がとても悪い。血を流しすぎている。

「ほう……やるねえ。もし、万全の状態だったら、いい勝負になったかもな……」

麗の太刀筋に関心している以蔵。だが、まだ余裕の笑みを浮かべている。そして、以蔵は鞘から刀を抜いて一直線に麗に向かって行った。予想以上に鋭い以蔵の太刀筋に、防戦一方の麗。片腕で力不足なのであろうか、妖刀を何度も弾かれて致命傷ではないものの数箇所を斬りつけられている。

そして、麗は血を流しすぎているせいで、時間が経つにつれ体中の痺れが増している。ついに受けきれずに脇腹を斬られ、致命傷を負ってしまった。両膝についてうつむきながら、全身を震わせて必死に耐えている。

「ぐっ……（ここまでなのか……）」

そんな時、ふと昔を思い出していた。施設の反対を押し切ってホストの道へ進み、やりたい事をやれた満足感からなのか死への後悔は自然と無かった。

「情けだ……一思いに逝かせてやる」

麗の元へ、ゆっくりと歩み寄る以蔵。その時だった、麗の脳裏に『夏希』が過ぎった。

「ま、まだ、終われない……（俺には、帰りを待ってる妹分がいる……）」

麗は、目を見開き最後の力を振り絞って立ち上がった。

「……もう足掻くな、楽にしてやるから」

「はああ……妖刀・天雲！！」

天地を揺るがす渾身の斬撃が、2階の大広間に留まらず雑居ビル全体に迸った。その場に倒れこむ麗と共に、建物内にいる全ての者もその巨大な一撃に倒れた。そして、この事件が麗の名を歌舞伎町のホストのみならず、裏の世界に知らしめる結果となった。

——江東区…診療所——

郷土組襲撃事件から3日後、目が覚めた麗はベッドの上に居た。見つめる先の天井は、どこか懐かしい感じがしていた。

「気分はどうですか？」

隣のベッドに腰掛けている学は、優しく麗に問いかけた。学の顔を見た麗は、今まで堪えていた何かから解放されたのか両目から大粒の涙を流している。この学こそ、麗が育った児童養護施設の危機を救った人物であった。施設にいた全員にとって、父親の様な存在。

「麗君、1人でよく頑張りましたね……」

麗は涙が止まらない。施設で起こった悲劇、そして郷土組との戦闘で、簡単に死を受け入れた自分が情けなくて悔しかった。

「施設の事件はニュースで見ました。そして、夏希ちゃんの事も心配しなくていいですよ。彼女はしばらくここで預かりますから……」
そして、これから『夏希』を迎えに行く事を告げて学は姿を消した。麗は荒みかけた心を癒され、子供のように眠りについた。

第47話 大暴走 ～六國連合～

――墨田区・某所――

――18年前に遡る。

12月31日午後8時前、荒川の川沿いに六國連合が集結していた。両国・菊川・業平・向島・押上・立花の地域を中心とする、暴走族6チームの連合である。業平の一鉄を連合総長とし、23区制覇を決行しようとしていた。連合総数120名、だが集まったのは100名だけだった。

この一鉄という人物、190センチ近い巨体に鍛え抜かれた体、そして顎のラインを覆いつくすように生えている髭に乱れた短髪。そして、ぶっきらぼうで無口だが、心は誰よりも熱く仲間からの信頼が厚い男である。

――1ヶ月前。

とある事務所で六國連合・幹部会が行われていた。

「今年の年末に、23区制覇を決行する!!」

幹部を前に一鉄は立ち上がって叫んだ。一同からは歓喜と驚きで、室内がどよめいている。すると、血気盛んな六國連合・特攻隊長の瑞樹が口を開いた。

「おお!! よっしゃー!! ……で、大将、決行日はいつなんだ？」

「おい、瑞樹。ちゃんと総長と呼べ……決行日は年末だ」

冷静沈着な六國連合・親衛隊長の瀬良が、瑞樹を制しながら静かに話した。

この瑞樹と瀬良という人物、一鉄の幼馴染である。彼らも18歳になり、築き上げた六國連合の集大成を迎えようとしていた。

「決行日時、走行ルートの全てを区内全域に触れ回れ!!」

賑やかに23区制覇の話で盛り上がっている最中、突如発せられた一鉄の暴言に一同が凍りついた。

「デメエーはアホか!!」

冷静な瀬良もさすがに驚いたのか、目を見開いて一鉄に向かって叫んだ。

「ははは、大将……さすがにそれは無謀すぎると思うぜ」

瑞樹も顔を引きつらせ苦笑いをしながら、一鉄を見ている。そして、他の幹部は啞然とした表情を浮かべたままじっと一鉄を見ていた。

「立ちはだかる者全てを粉碎してこそ、制覇と呼べるんじゃないのか？ 臆する者は去れ!!」

一鉄の怒気を含んだ一喝に、その場にいる全員の表情が一変した。不良根性に火を点けられ、完全に腹を括っている表情をしている。

「もう一度言うぞ、決行日時は12月31日午後8時に出発する。」

走行ルートは、環状七号線・首都高速湾岸線を抜け23区を1周し、初日の出と共に制覇の勝どきを上げる!!」

こうして無謀にも、壮大な計画が始まった。

——23区・北側（葛飾区・足立区・北区・板橋区）——

午後8時を回り、六國連合は環状七号線に突入する為、水戸街道を北上していた。

「総長、北のエリアはこれと言った人物はいないが……」

「その前に、まずは警察の包囲網が先だろうな……」

瀬良が危惧しているのは、足立区に【皇帝】と呼ばれる区内最大勢力を誇る暴走族がいる事だった。そんな、瀬良の不安を他所に、環状七号線に突入した六國連合に歩道から歓声があがっていた。

おおっぴらに告知した事によって、野次馬達が大勢集まっていたようだ。六國連合は臨戦態勢のまま、葛飾区を抜けて足立区に突入する。

谷中付近に差し掛かると、目の前に機動警察隊と思われる集団の姿が見える。パトカーの赤光りを輝かせ、バリケードを張って待ち構えていた。

「思っていたより数が少ないな……大将、突っ込むか？」

一鉄の表情を窺いながら、六國連合・特攻隊長の瑞樹が支持を仰いだ。

「俺が行く……」

そう言うと、一鉄は単騎でバリケードに向かって走り出す。その動きに合わせるかのように、機動警察隊のバリケードが一鉄に絞られた。

「……（唸れ黄金の右腕）」

バリケードに煌々と輝いている右腕を振りぬいて一撃を打ち込むと、後ろで構えている機動警察隊ごとふっ飛ばして道を切り開く。

そして、六國連合は開けた道を悠々と通過して行った。

「うわぁ!! ……（バケモノかこいつは……）」

ふっ飛ばされながらもすぐに立ち上がった司は、走り去る一鉄の背中を眺める事しか出来なかった。当時、司は機動警察隊に所属していた。その後、ある事件をきっかけに署長に昇格するのだが……。

「さあゝて、お次は【皇帝】のお出ましか？」

出番が近いと思い、意気盛んに瑞樹が口走った。六國連合は臨戦体勢のまま、走行を続けている。しかし、一向に【皇帝】は姿を現さなかった。

「おかしいな……そろそろ足立区を抜けるぞ？」

瀬良は、無傷のまま足立区を抜ける事になるとは、まったくの想定外だった。

「前を見る、大歓迎してくれてるぞ……」

先頭を走る一鉄の目の前に、大きな光の塊が見える。荒川と隅田川に架かる鹿浜橋と新神谷橋の間に、およそ300名程の暴走族が待ち受けている単車のライトの光だった。旗を見渡す限り、【皇帝】を含めた近隣の暴走族が集結している。

「ここでもたもたしていると袋の鼠だな……」

一鉄の号令が下ると、六國連合・特攻隊長の瑞樹を先頭に特攻部隊30名がその光の塊へと突撃を開始した。そして、六國連合・本隊も突入し大乱闘が始まった。

「おい、瑞樹！！ 殲滅が目的じゃない。道を切り開け！！」

瀬良の掛け声に、特攻後にその場で暴れまわっている瑞樹が反応した。

「特攻部隊、俺に続け！！」

光の塊のど真ん中を、物凄い勢いで直進して切り裂く六國連合・特攻部隊。それに続くように、六國連合・本隊も突破していく。

「後で追いつく。お前達は先に行け、一鉄を頼んだぞ……」

親衛隊10名を一鉄に残し、瀬良は残り20名程の六國連合・親衛部隊と殿にまわった。

足立区・北区を抜け、板橋区を走行中の六國連合。その数は、およそ60名程度になっていた。その後、検問などの小さな抵抗はあったものの、板橋区を抜けた六國連合は北側エリアを制覇した。

第48話 大暴走 〈北条と隼士〉

――23区・西側（練馬区・中野区・杉並区・世田谷区）――

この時代の勢力図は、東の一鉄、西の北条、南の隼士の名前が真っ先に出る3強時代が続いていた。

六國連合は、練馬区・中野区を抜け、『北条』の居る杉並区に突入していた。高円寺を抜け、和田付近を走行している。すると案の定、『北条』率いる暴走族【八蛇】が環状七号線で待ち構えていた。「およそ50名ってところか……」

瑞樹が先頭を走る一鉄に呟いた。

「『北条』の相手は俺がする。他を殲滅しろ……」

【六國連合】VS【八蛇】の大乱闘が始まった。一鉄は、雑兵を蹴散らしながら『北条』を捜している。だが、いくら捜し回っても一向にその姿を発見する事が出来なかった。

その後、六國連合は激戦の末に【八蛇】の殲滅に成功する。さすがの六國連合も深手を負い、その人数は30名程度に減っていた。

「大将、『北条』の野郎はいなかったのか？　ちっ、あの野郎、逃げ出したんじゃないのか……」

警察による数々の妨害は全て一鉄が打ち払ってきたが、【皇帝】【八蛇】との激戦で六國連合に疲れの色が出始めていた。そんな時だった、後方から瀬良率いる親衛隊10名が到着し合流する。

「……瀬良、殿ご苦労だったな」

「ああ、ありがとよ。あの後、警官も大勢乱入してきてな……」

瀬良はその隙を突いて、振り切ってきた事を一鉄に伝えている。そして、周りに倒れている【八蛇】の連中を見て殲滅した事に気がついた。

「ん？ ……『北条』はどうした？」

「それがよお、瀬良。あの野郎いなかったんだよ……な、大将？」
瀬良は不思議そうな表情を浮かべていた。

「まあいい、今は先を急ごう……」

再び六國連合は走り出した。

杉並区を抜け、世田谷区の若林付近を走行していると、辺り一面に除夜の鐘が鳴り響いていた。

——23区・南側（目黒区・大田区・品川区・江東区）——

世田谷区を抜け、目黒区へ突入する六國連合。幾度と無く張り巡らされている小さな検問を無難に突破し、大田区に突入した。

「さて、『隼士』が出張ってくるかどうかが鍵だな……」

瀬良はそんな事を考えながら、一鉄の後方を走行していた。『隼士』は暴走族ではないが、幾度となく一鉄と戦い決着が未だにっていない相手である。大森付近を通過している六國連合。今だ『隼士』の気配すら全く感じられない。

「この様子じゃーあいつ出てこんなぁー……多分」

瑞樹は、安心した様ながっかりした様な表情を浮かべている。

「……………」

一鉄は、無言のまま前方だけを見据えていた。

「んっ？ なんだありあ？」

瑞樹が前のめりになって目を凝らして見ている前方には、横浜・白鬼とかかれた旗が掲げられ30名程の集団が待ち構えていた。

「わざわざ他県からご苦労なこった。……ここは俺が行くぜ!!」

六國連合・特攻隊長の瑞樹を先頭に、特攻部隊10名が白鬼に突

撃していく。

「よし、俺たちは湾岸線に突入するぞ!!」

瀬良の合図と共に、六國連合は料金所を突き破り、首都高湾岸線に突入する。

100名で出発した六國連合。30名程にまで数を減らしたが、制覇まで残り4分の1まで辿り着いていた。

第49話 大暴走（制覇）

――23区・東側（江戸川区・葛飾区）――

首都高速湾岸線を暴走している六國連合。高速道路だけあって、検問などは一切無く無難に走行していた。

「やはり湾岸ルートは安全だったのか？」

「そうでもなさそうだな……後ろを見ろ」

何処からともなく現れた久喜・王華と書かれている旗を掲げた、20名程の暴走族が背後から迫っていた。

「下で迎え撃つぞ！」

葛西の下り口から再び環状七号線に進み、江戸川区に突入する六國連合。そして、六國連合は戦闘体勢に入った。すると、環状七号線で待ち構えていた市川・鷹爪の30名程と、高速を下りてきた久喜・王華の20名程に挟撃される。

「こっちは俺に任せろ……」

王華に向かって一鉄は単騎で突撃していく。瀬良と他の六國連合は、鷹爪へと突撃を始めた。壮絶な戦闘の末に殲滅するが、六國連合もわずか18名となっていた。一鉄の表情にも、疲労の色が表れ始めていた。

「あとわずかだ、気合を入れろ！！」

一鉄は、自分を鼓舞するかのように仲間に大声で叫んだ。

走り出した六國連合。一之江付近を走行していると、前方に大掛かりなバリケードと60名程の警察が待ち構えていた。

「総長、これが最後の難関って感じだな……」

瀬良の声に、いつものように一鉄が単騎でバリケードに突っ込んでいった。

「……（唸れ黄金の右腕）」

バリケードに煌々と輝いている右腕を振りぬいて一撃を打ち込むが、いつものようにそれをふき飛ばす事が出来なかった。背後にいた部隊を見た瀬良が驚いて叫んだ。

「あれは……SATだ!!」

SATはすぐにバリケードで一鉄を囲い込んだ。すると、後ろで指揮をとっていたであろう管理官が姿を現した。

「そこまでだ、ガキ共!! (……まったく所轄の連中も使えんな)」

警視庁が動き出していたのである。そもそもの話だが、この管理官は23区制覇の告知を知っておきながら、すかされた時の世間体を気にして本腰を入れた警備をしなかった。そして、ガキ共の遊びごとだと決めつけていた節がある。万が一が起きたとしたら、所轄が各々の判断で対処するようにと命令を伝えていた。

しかし、足立区に始まった衝突の一報を受けて急遽対応に追われることになった。そして緊急時には、SAT20名と本庁警察官40名を集めたことに満足した様子だった。

「無駄な抵抗はやめておけ!! (ここで全員を捕縛すれば……少しは格好がつくだろう)」

この管理官、完璧な保身主義者である。そして号令と共に、一斉に捕縛しに動き出すSATと警察官。1人また1人と、次々と六國連合は倒れていった。

「ちっ……」

一鉄は、SATに集中的に狙われていて悪戦苦闘している。

「管理官殿、報告申し上げます。背後より、暴走族らしき集団が近づいております」

「ふん、どっかの暴走族だろう。……抵抗するならまとめて捕縛しろ」

その集団は爆音を鳴らして、警察官の背後へと突っ込んでいった。「か、管理官殿。六國連合です!!」

「……なんだと!!」

「……ったくあいつら、遅せーよ」

爆音を聞きつけた瀬良が、ホッとした表情を浮かべた。

決行日の前日、最終的にこのような状況を想定した瀬良は20名の遊軍を編成していた。一鉄直属から4名、特攻・親衛共に3名づつ、残り10名は志願で編成した。

瀬良の機転により、一時的に全滅を免れた六國連合だが、SAT擁する本庁の警察官達にじわりじわりと追い詰められている。そんな状況の中、他に手は無いと考えた瀬良が六國連合に向けて叫んだ。「総長だけでも突破させる。全員道をこじ開けろ、特攻!!」

SATに囲まれている一鉄を六國連合が囲み返して、突破口を開く特攻を仕掛けている。

「ふん、馬鹿共が。そう簡単にいく訳がないだろう……」

SATは瞬時に特攻に対する陣形を整え弾き返した。まさに訓練の賜物である。

「ちつきしょー!! (……万事休すか)」

崩壊寸前の六國連合に迫るSATと警察官。すると、後方から笑い声が聞こえた。

「瀬良、下手糞な特攻だなあ、あっはっはっはっ……」

白鬼を粉砕したのであろう瑞樹と特攻部隊の数名が追いついてきたようだ。そして、そのままの勢いでSATへ突っ込んでいった。

「六國連合特攻隊長じゃー、しかと目に焼き付けておけ!!」

本領発揮した瑞樹が、SATの陣形に突撃している。さすがに特攻専門の瑞樹が繰り出す突撃は凄まじかった。SATの陣形に綻びが見え、その隙を突いて六國連合はかろうじて突破に成功する。そして、一鉄は突破する際に、バイクと一緒にふっ飛んでいった瑞樹の後ろ姿が見えていた。

「うう……瀬良、後は頼んだぜ……」

その場を走り去る六國連合の後ろには、瑞樹を始めとする特攻部隊の連中が倒れている姿があった。

六國連合は突破に成功するも、すぐにパトカーの追撃にさらされている。

「総長、いや一鉄。お前と出会えた事に俺は感謝している……」

一鉄の肩を叩き笑顔で話している瀬良は、そう言い残すなり1人でUターンしてパトカーに向かった。バイクのガソリンで道路を炎上させ、その後ろで仁王立ちしている。

「じゃあな……一鉄。六國連合親衛隊長だ、まとめて掛かって来い。この肩書きは、俺の誇りだっ!!」

一鉄は後方を振り向き、瀬良の後姿を一目見て走り出した。

「多くの仲間達が託した制覇の偉業。今完結させるぞ!!」
周りに付き従っていた六國連合は、すでに5人となっていた。

——墨田区…某所——

出発地点である荒川の川沿いに到着した六國連合。しばらくすると、地平線が輝きだした。

「お前達、少し離れてろ……」

一鉄は仲間達を遠ざけ、地面に渾身の一撃を打ち込む。

「……（唸れ黄金の右腕）」

まさに魂の一撃は、地面に直径3メートル程の窪みをつくった。そして、その場所に、最後の1つとなった六國連合の旗を突き刺して一鉄は言い放った。

「六國連合は前人未到の23区制覇を成し遂げ、今ここに……解散を宣言する!!」

こうして六國連合による、23区制覇は完結する。翌日には、何者かによって旗は持ち出されており無くなっていたが、地面の窪みは18年経った今尚残っている。

この事件は、【大暴走】として世間を賑わせ警察への非難も沸き起こった。

そして暴走族ブームが各地で起こり、その後消息を絶っていた一鉄は指名手配されることとなる。その影響はやがて次世代へと受け継がれ、岡崎や相庭みたいな連中を生む事となる。

――23区制覇。

難敵『北条』『隼士』の不在、警視庁による軽視判断など様々な要因が重なり、偶然にも必然にも何かに導かれた様な感じで幕を閉じた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3860y/>

悪がままだに ～23区編～

2011年12月25日15時54分発行